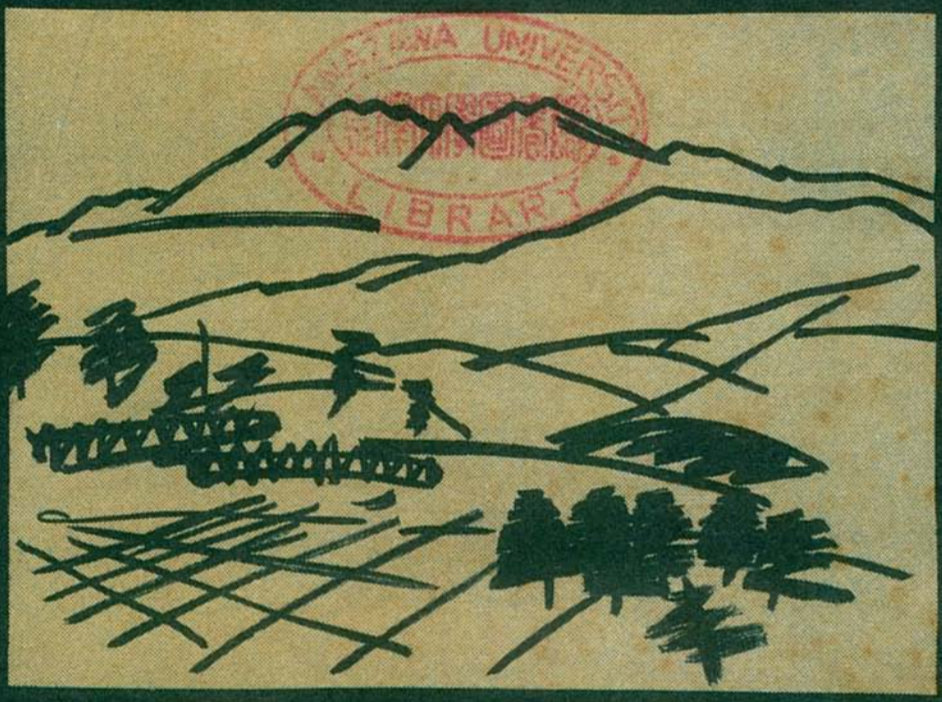
Bergheim



KANAZAWA UNIVERSITY LIBRARY

5

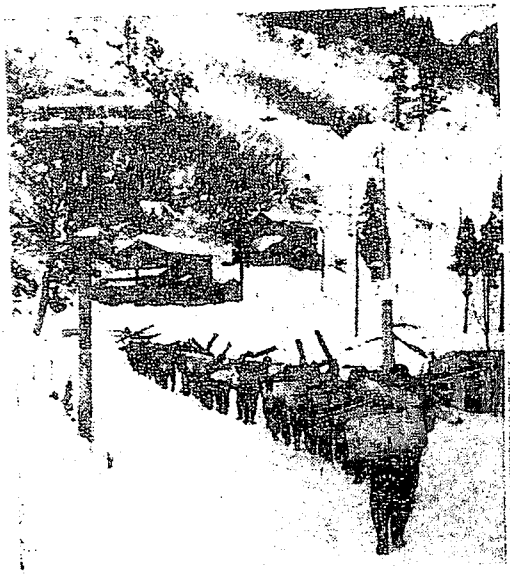
金沢大学ワンダーフオーゲルクラブ

やまざと

(上) 夏期合宿、出発風景
見送る者、見送られるもの
悲喜こもごもの金沢駅

(中) 一路、集中地雲の平を目指す。

(下) 金大主催の北陸3大学合同ワンデルングのテントサイト風景。



(左) 1月5日～1月9日
スキー合宿・平岩駅付近。
この合宿は42名が参加し、山の坊スキー場で行なわれた。

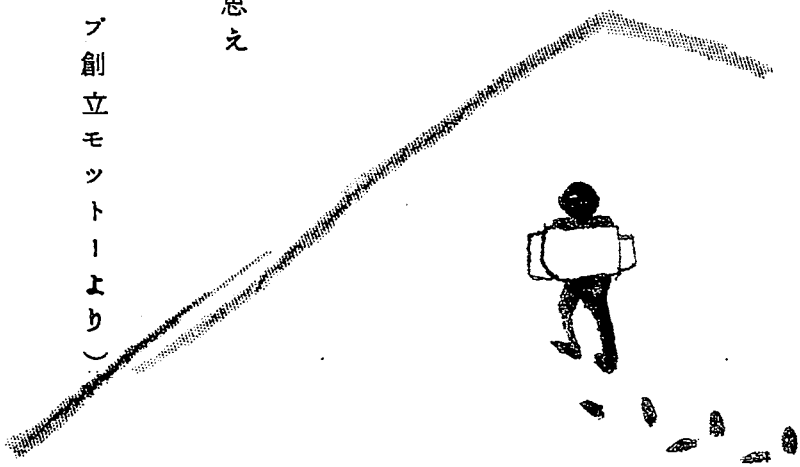
(右) 2年部員による大門冬山登山
山頂付近。

(下) 4月20日～21日
新入生歓迎登山
キャンプファイヤー。

詩　頭　巻

日光を浴びよ
自然に親しめ
浩然の気を養え
民謡を歌え
山に登れ
伝説をとりもどせ
祖国の土に芽む魂を思え

（クラブ創立モットーより）



やまざと
写真
巻頭詩
新主将になつて思うこと……新主将……合津尚……一
一年をふり省つて……前年度主将……稲葉正巳……三三
論説……編集子……五
女性に関する七章
はじめに……六
女子部員放談会……七
寸想……池田進……一五
ワンゲルの女性にささげるものにして論にあらず……宮村宣雄……一七
ちよつと一言……中川皓三郎……一八
女子部員諸君あなた方の使命は重大だ……山田允……二〇
雑感……今井春昭……二二
ワンゲルの女子部員……中山大樹……二四
私の本心……支部長……二七
最後に……編集子……二七
冬
金星人がスキーをしていた……清野邦弘……二八
ハネムーン……三〇
スキー合宿の思い出……飯田利之……三一
スキーの思い出……大橋功一郎……三三
差入れ強盗始末期……紺清敬一……三五

春

冬の詩……河合英明……三九
春の木曾駒ケ岳……小松武文……四〇
若きワンデラの集いに参加して……沢田孝雄……四二
新入生歓迎登山のころ……高見よ志子……四五
医王山……宮腰由美子……四七
自然と共に……石徹日淑子……四九
詩……藤井信晴……五〇
ふるさとの白山……青山修司……五一
妙高　雨・後・晴……花木宏……五二
大門パーワンのこと……山村嘉一……五三
尾瀬から小諸へ……黒瀬一夫……五八
汽車の旅……石橋毅……
さすらい、星のささやきが……宮村……

夏

初めての白山……玉野暁世……六〇
思い出の白山オープン……沢田豊子……六一
ばてた時のこと……藤井由紀……六三
合宿雑感……合津尚……六七
偵察と合宿……池田進……六八
おんなのこ……谷田和子……七一
針の木パーティ……吉村弘二……七三
薬師パーティ……富永浩之……七六

合宿槍平パーティ……宮本則夫……七八
燕パーティ行状記……沢田孝雄……八〇
五郎パーティマスコット……四十万利之……八三
落し書き……西田良穂……八五
合宿役員の反省　装備雑感……新谷正喜……八六
食料係……大磯岩雄……八七
合宿医療係を終えて……平賀晶子……八九
合宿会計の任務を終えて……宮保洋子……九一
一人の山行き　夏の思い出……藤井信晴……九二
白山バイトの一日……柳川徹……九三

北陸三大学合同ワンダリング

合ワンをふりかえって……亀田武……九五
当日の蛇谷……福田繁機……九七

秋

秋のパートワンデリング

秋の山脈……今井春宵……一〇〇
桜貝のうた……一〇三
白山……平木元真……一〇四
秋山の良さ……新谷正喜……一〇五
秋の東北パーワン　岩手山……大磯岩雄……一〇六
東北パーワンを顧みて……千場良平……一〇九
南アルプスパーワンを省みて……合津尚……一一一
唐松……伊豫欣二……一一三

紅葉の美ケ原・霧ガ峰……中山美津枝……一一五
隨筆
秋の一人旅……富田征也……一一七
雑感
砂粒……野村孝弘……一一九
歓迎登山……小栗英二……一二〇
大崎進……一二一
四年間を省りみて
チョンボ……堀上徹……一二二
よき先輩の思い出……山田允……一二三
食事雑感……川島浩……一二五
ワンゲルの歴史と関係あるようでない話……宮村宣雄……一二八
ある部員……影近憲一……一三〇
今と昔……稲葉正巳……一三二
眠りは……河合良太……一三四
創作
大学院一年生……鈴木正国……一三六
隨筆
視覚的印象と聴覚的刺激間の連繋作用に関する物理学的一考察……山下紀久夫……一三九
山小屋建設について……石橋毅……一四二
考レ共ニ先生ノ事……木下泰恵……一四四
卒業生プロフィル……一四六
昭和三十八年度卒業生……一四八
O・Bだより……一六四
特別寄稿
會遊猿山の記……柏野義夫……一六八
編集後記……一七〇

新主将になつて思う事

主将　合津　尚

大変な役柄を与えられて、その責任の重さからか昔からあまり調子の良くなかつた胃袋が最近さらに悪くなつた。正直な所、私個人の意思でクラブがどうなるものではなし、またその様なものであつてはならないと思う。ただ私は与えられた役柄に圧し潰されないようになんとか頑張つてみようと考えている様な心細い状態にある。

稲葉さんの努力によつて規約が改正され、そしてそれを実行に移すのが私の役割なのであろう。今度の改正によつて最も変つた所は、役員会が消滅して役員の一部によつて構成される企画委員会（他のクラブではこれをリーダー会と呼ぶのかもしれない）になつた事である。何故非民主的とも思われるこの様な組織になつたのかは、部の現状、多くの利点を考えて見ればわかるだろう。執行機関の縮少により、部員の意見が部の運営に反映されないのではないかという不安に対しては、今の所企画委員会ノートを考えている。総会の準備やＰＲの為に決定事項はこのノートに書き込み部屋に保存してあるから、それを見たら企画委員会が何をやつているかはすぐわかると思う。また意見があつたら書き込んでおいて欲しい。最終決定の総会で執行機関の人数が減り、議論の準備期間が与えられているのだから、活発な議論が出来ると思うのだが、企画委員会が出来た事によつて、総会がさらに重要になつた点を大いに自覚して欲しい。

過去一年間の役員生活で感じた事なのだが、残念ながら役員と一般部員が何か対立したものと考える人がいるらしいという事である。どこに原因があるのか今の所不明だが、労資関係の様に対立したものであつてはならないと思う。とくに構成員の少ない企画委員会になつた現在、こういつた考え方は企画委員会を部員から浮上つた存在としてしまうので非常に危険である。

これは私の性格上の問題であるが、物事にルーズなのはあまり好きではないし、形式的な面があるので、現在の部の姿とは多分に相容れない所がある様な気がする。備品は部室から出て行つて帰つて来るのに一月かかつたり、帰つて来なかつたり、クラブ図書に関しても同様で今の状態を考えると新たに購入しようという意欲を失つて

しまう。最良の管理方法が見つからないので部員の良識に期待したい。またクラブをPWの斡旋所や、単なる余暇利用の機関と考えるのは勝手だが、最低他の部員の迷惑になる事だけはやめたいものである。

話は急転するが、ワンダーフォーゲル運動について私の考えを一言。ドイツにおけるWV運動はその社会的背景、自然条件その他ドイツという特殊性を基にして発生し、発達した。したがつて日本でもそして北陸でもその特殊さを背景としたWV運動があつて良いはずである。他の運動部の様に明確な目標を持たず、自然という漠然とした物なので、場所、環境等で性格が異なつてくるのは当然で、ドイツにおけるWV運動は我々がWVと呼んでいる物の一部にすぎないと思う。ドイツ語をそのまま輸入したから誤解の元になつたのだ。ドイツのWVの概念にしばられていては、ワンゲルの生命である行動範囲の広さ、自由さが出て来ず、好きでもない無理な行動をしなければならない。一番大切なのは、やりたい事をやる事である。ただクラブとして存在する場合には、そこに統制や伝統があり、何か共通の物がなければならない。我々の部が如何に山岳中心になつて行つたかはベルクハイム第四号に譲るとして、山が好きな者が大多数を占めているのだから、北陸という事を考え合わせて現在の方向に疑問は持つていない。昨年の今ごろから一部で話題になつていた山小屋建設であるが、今の所土地が一番の難問であるのだが、もしこれが解決したならばこの一年間で建設出来ると考えている。場所は倉谷なので、ダム工事の関係もあつてこのチャンスを逃したくない。良きトレーニング場であつた医王山を失いつつある現在それに代るものとして山小屋を基地とした高三郎周辺を何とか手に入れたい。技術的には多少不安はあるが、山小屋施行となつた時は、クラブの将来のためにも協力をお願いしたい。

最後に最近少し不安に感じる点は部員相互の交流についてである。山行の多い我部にとつて、人間関係を軽視するならば非常に危険な事であり、またクラブとしての大半の意味も失われてしまう。各学年、各人ごとに性格や考え方が異なつているが、それ故にそこに断層を作つてはならない。職業による人間性の分化が始まるこの時期に相互理解は大切であり、第一にそれがなかつたら楽しい山行などとても望めない。良き大学時代そして青春の思い出のために自然を相手として友を得る事は有意義であると思う。バイタリティを失わずに活発な行動をお願いしたい。私もそのためには微力ながら努力は惜しまないつもりである。

一年を省みて

前年度主将

部長という大任を命ぜられてから一年、次期役員も決まり、正直言つてホッとしている。と同時に何か大切な事を看過してきた様な気もする。幸い部誌編集委員会の方で機会を与えてくれましたので、過去一年間をふりかえり、気付いた点を二、三のべて見たいと思う。

御承知の如く、規約の改正とそれに伴う部の体制及び組織の充実を第一の目標として来たがそれらがいずれも不充分であつた様に思う。昨年の規約改正は、　あつてなきが如き　規約を現状に合致させるのが目的であつた。

しかしながらクラブが組織の面で多分に同好会的要素をもつたものから四年部員を頂点とする、いわゆるピラミッド型の組織へと転換しなければならない時、換言すれば、ほぼ同程度の技術をもつた者の集団から技術的にも体力的にもかなりの相違がみられる者の集団へと、クラブが移行しつつある時には、規約そのものが意味している体制が過去のものとなつていた。それ故、規約の形式上の語句をどれだけいじくり廻しても、問題の解決とならないはずであつた。昨年の規約改正当時このことに全く気付いていなかつた訳ではないが、具体的にどうしたら良いかということになると見当がつかなかつた。ところが、四月に入り部活動が活発化してくるとともに、かかる欠陥が具体的な形をとなつて表面化し、我々役員の切実な問題となつた。そこで五月に暫定的な措置として、企画委員会を設けたが問題解決の手段となりえなかつた。規約のもつ欠点を例挙するならば、先ず第一に役員会の構成員が部員数に比して多過ぎること、第二に企画委員の任務及び同委員会の任務が不明確であること、等のために、部の運営が実質的には少数の人々の手に委ねられ、クラブ活動の生命とも言うべきパーワンを過度に制約する結果になつたことである。具体的に言えば、パーワンは各部員の自由意志により立案され実行されるが、当然それは一定の枠内で行なわなければならないし、それがほぼ定まつた期間に集中的に行われるために、

全体的な立場に立つて、迅速且つ適確にそれらを総括し調整する機構が役員会でなければならない、しかし上記した様に、現在の役員会がそういつた機能を果しえない以上、部の執行機関の規模の縮少と責任体制の確立が必要であろう。しかし、規模の縮少はともすれば部員全体の意見が反映しにくいという弊害を生ずることを十分に考慮しておくことが肝要である。

以上が任期末になつて規約再改正の必要が生じた理由である。それは部の現状を適確に把握しえなかつたところに原因があることはもちろんである。その意味で大変申し訳なく思つている。けれども、役員の交替がそれまでのクラブ運営との完全な断絶を意味をする様な役員の選出方法に関するこれまでの慣行にも問題がある様に思う。

その他夏期合宿で女子パーティを編成したが、これは全体的にみて最近の活動範囲が次第に強い体力を必要とするものへ拡大しているため、女子部員の活動を制約、部活動から遠ざけているのではないかという考えから試みたものである。これに対し色々と批判（非難？）があつたが、男女ともに同じく部員であることを深く認識した上で、両者がそれぞれ独自の活動分野を開拓していくことが必要ではなかろうか、合宿での女子パーティ編成が、そういつた方向への基点となれば幸いであると思う。

それから、総会のたびに感じられたことだが役員と部員を対立したものと考えている人が多いのではないだろうか。役員のあげ足をとつたり、あらゆることを役員の責任に転嫁したりする傾向がみられるのは非常に残念である。ワンゲル活動を基礎として、そこから生起する色々な問題について共に考え、皆で解決せんとする努力これが我々のクラブの根本であり、伝統であつたはずである。我々はこのことを心に銘記しておかなければならないだろう。

とにかあれ、小生の如き未熟者が、まがりなりにも大任を果し得たのは、合津、池田両君をはじめ、色々な方の御協力の賜物である。最後になつたが、深くお礼申し上げます。

論説　より明るいクラブに

毎年秋になり、屋外での活動が少なくなり、新役員が決定されるころになると、「ワンゲルクラブとは如何なるものぞ」等の室内での活動が盛んになり、やれ運動クラブだ、やれ文化クラブだとか、山岳にかたよりすぎるとか、組織力がたりないとかの論議が活発に行なわれる論議されるのは大いに結構であるが、何か一つ欠けているような気がする。それはワンゲルクラブが運動クラブであろうと、文化クラブであろうと、とにかく「クラブ」には間違いのないことで、この小さな社会での人間関係があまりにも軽ろんじられているのではあるまいか。自分と反対の意見を持つ人をまるで敵のごとく思つたり、役員と平部員がまるで与野党の対立のようになつたり、更には「……情報」が乱れ飛んだりして、まるでどこかの国の国会のようであり、さびしい気がする。このような事は、部員の間でささやかれている「最近部室に出てくる人が少なくなつた」「先輩の下宿をアタックする者がなくなつた」などに通じていると思われる。

クラブ員同志の親近感が少なくなつたということは、種々の原因からくるであろう。たとえば、運動クラブとしての性格がはつきりして、組織がだんだん固まつてきて、同好会的雰囲気が少なくなつてきた、などあげようと思えば上げられるが、運動クラブであるから、大人数で組織的にならざるをえないから部員同志の親睦が犠牲になつてよいものだろうか。かえつてますます必要なのではないかと思う。クラブである以上部員同志の親睦が最も基本と考えられる。

創立当時の明るい人間関係を、我々後輩はよりよき伝統として、たとえクラブの組織や方向が変化してきたとしても、このクラブの本質としてかかげられたいものである。

以上、少し大げさに書いた所もあるかもしれないが、もつと「大学生のクラブ」である事を、充分考えてみようではありませんか。

（編集子）

ワンゲル女性に関する七章

以下、諸氏に一読願う七つの章は、比較的身近かな、しかも多くの思索の出発点となり得る「女子部員」に焦点を合せ、より強いクラブへの積極性を期待して特集したものである。

寄せられた原稿からもわかるように、夫々の人達が独自の考え方によつて対象をとらえ、そしてまた決してそこにとどまることなく更に大きな問題に対処しようとしたのである。

◇はじめに

また冬が来た。我々の頭の中から、楽しく、苦しかつた夏の想い出がひとつ〳〵消え去ろうとしている。だが、忘ている。却にまかせて、我々が直面した数々の問題をそのかなたに押しやつてしまうことは止めたい。

なかでも、合宿をめぐる様々の主張は何ら部の発展に寄与する具体的解答を残さぬままにたち消えたかの感が深いといつて、我々は徒らに残り火に油を注ごうとしているではない。来年もまた、きつと同じような問題に直面する可能性が大であることから、ムードに押し流されることの比較的少いこの期をとらえて、部員という肩書きを持つ各個人が、今からでも自分の考えをもつて部の運営に積極的に参加することが大切であると思われる。

しかし、それが小さな問題を足がかりとするのでなかつたら、仲々大きな、つまり総合的な問題への思索に発展しないものである。

つまり、この七章は部員諸氏への、一つの小さな資料なのであつて、この資料をもとに夫々各人が独自の考え方を作りあげ、部室で、そしてまた総会で、山で、野で、この章は決して一つの方向性を持つていない。各人が夫々の方向を定めてほしいのである。

（編集子）

女子部員放談会

この放談会は、特に男性オフリミットで行なわれた。時、十一月九日、生協喫茶ホールを貸切つての放談は三時間余に及んだが、これはその中から、主なる部分を抜粋したものである。

尚文中

(正)とあるのは　正橋　洋子（薬3）
(白)・・・・・・　白村　善美子（教3）
(木)・・・・・・　木下　泰恵（薬2）
(谷)・・・・・・　谷田　和子（文2）
(中)・・・・・・　中山　美津枝（教2）
(宮)・・・・・・　宮保　洋子（文2）
(高)・・・・・・　高見　与志子（教2）
(平)・・・・・・　平賀　晶子（教1）
(松)・・・・・・　松本　昭子（教1）

（順不同・敬称略）

である。

入つてはみたけれど

(木)　それでは只今から、座談会を始めます。先ず入部の動機ワンゲル観、入つてからの印象を（入る前の想像と違うところ、よかつた事等）話して下さい。

(高)　一年の時クラブに入つていなかつたから、何かやりたいと思つていた。今更他の運動クラブに入るのはどうかと思うし、ワンゲルだつたらファイトさえ持つていればよいと思つたから。でも野歩きが主だと思つていたのに山へばつかり行くから、入つた時の感じとは大分違つているんやけど。

(木)　入部してからいいなあと思つた点は、

(正)　山に入れるからいいなあと思つた。クラブ自身についていいなあと思つた事は二年生の時などみんなで色々話し合えた事、いろんな人を知れたことなど、でも今はあまり感じなくなつたわ。

甘えてるようにみえる？

(宮)　特に最近女子に自主性がない、と聞くんやけど今年合宿で女子パーティが出来たのも、上の人がそういうつもりやつたんやろう。でも私は自主性ということが

よくわからない。

(木) 男の人の考える自主性というのは、女の人が一人で行けるとか、みんなひつぱつて行くとかいうことだろう。

(宮) 自主性と自立性とは違うと思う。アノ人達が言つているのはクラブの行事に対する自主性とか・・・・。

(正) 今までの女子は甘えていた。全く女子だけでやろうとかいう事がなかつた。そんな風にしてほしいと言われても、今迄の態度から技術の点などで出来ない事だから。

今年の合宿から、色々の経験を経て、そして今度から女子だけで色々やつてほしいということだと私は感じとつたんだけど・・・・。

(木) クラブの中のいろんなことつて、山だけでなく?

(宮) 例えば山へ行く計画をたてるとか、積極的に石油コンロの練習をしたりね。

(谷) 女の子やつたら、ついて行こうとするだけで、自分で変えて行こうとするところがないつていうことだと思う。私が言いたいんじゃないんや。(笑い)

(宮) 私達がクラブに対して理想を持つていないと男の人達は言うが、そうではないと思う。

(谷) 思つているだけや。

(正) 女の人は持つているということを示せばイインダ。

(木) 思つているだけで、出さなかつたら、男の人の方もわからないだろうし、理論を持つていても行動しなかつたら、男の人から〝口ばかり〟といわれる。

(谷) 女子だけ自主性がないというのがおかしいと思う。今のクラブ全体に自主性がないと思う。

(正) だから今、私達が人に言われたから、自分達をみていけばよい。人のことまで言わないで。これを機会に私達が考えたらいい。

(谷) 女の子つて自主性がないものやという先入観がある。正確に見る目が必要やと思うわ。

(宮) 自主性、自主性とはいうけれど、クラブの目的が、はつきりしていない以上、クラブに対する理想を云々するのはナンセンス、しかし、そういう理想の面で、自主性がないと言われれば今の自分では確かだから、どうしようもないが・・・・。技術の面で自主性を高めるとはどういうこと。今年の合宿の様に女子だけで行けというには、相当なものが必要であると思うけど。

(正) 今年はチョンボくさかつたけど、何回もやつれば自信となつてでてくる。それだつて今年のトレーニング

はごまかしもある。パーワン的なものから大きな物へと発展することによつて、そういう技術的な面においても自信がつくと思う。

卒業したら連れていつてもらうもん

(木) 大学を卒業したら山登りをしない。例え行つても男の人につれていつてもらうと、考えている人もいるんじゃない。ひどいことをし、半強制的にしてもらわなくてもよい場合もあると思うけど。

(宮) 一つのクラブに参加している以上、卒業してからしないからといつて練習をしなくてもいいという訳にはいかんとは思うわ。

(正) 反対する理由はただ卒業して一人でゆくことがないということだけだろうか。

(木) いえ、女子パーティを組む必要があるが、その作り方の点など。。。。。要するにそこまでやるべきかしら。

(正) しかしいつ迄もそれを考えていたらいつまでたつてもできない。でも合宿は急すぎる。もつとパーワンや他の山行きで色んな練習をして女子が自覚すべきや。

(木) 一つの方向に決つているなら別だが、決つていないのに強制できぬわけだろう。

(正) クラブの方向に合わないならやめるか、でなければクラブの方向に従うべきだ。いつまでも自分の殻に閉じこもらぬことが必要だ。でも今年の合宿は駄目だつた、皆どう思う、合宿の後パーワンをして、合宿をどう感じた。

(谷) パーワンと言つても美ケ原だけやろ。

(高) 他に行つてないもん。

(中) 私ら楽なところばかり行つてるみたいね。

(谷) 試みは試みとしてやつてみるべきやと思う。女の子ばかりで合宿やつてみるのもいいと思うけど、試みが危険やつたら、生命の危険までおかしてやらんなんかなと思う。

(正) 今度の合宿は、そんなに生命の危険はなかつたと思う。

(木) それは結果として言えること。

(正) 富大は女子パーティを合宿で組んでいる。

(宮) 既に女子ワンゲルが出来たと聞いたけど。でも女子を分けたら、ワンゲルは、まるで山岳部の没落者の集りみたいなもんや。

(正) それは言いすぎる、ワンゲルの目的は精神的なもの

にある。

何があるノヨー

(宮)(木) 精神的なものつてなアに。
果して精神的なものかな。私の新トレの時は、いろいろ話し合つた。歌も歌つた。山へも行けるし、歌も歌えるし、本当にいいクラブだと思つたけど、だんだん変つて来た。あの頃はよかつたけど今はねえ。

(正) 上の支配する人によつて変るんや。本当にワンゲルだと思つていた雰囲気がだんだん変つて来たね。

(木) 精神的な連がりがない。山へ行くことばつかり、部室へも皆出て来ないしね。

(正) 能登の時は歌つたりして楽しかつた。だけど合宿ではほとんど歌わずつまらなかつた。悲しいことにだんだんそんな風になつてきたんや。

(木) 何故こんなになつたかわからない。新トレの頃とメンバーが変つていないのに。

(谷) 人が変らんさかいでない。慣れてしまうつていうんか、最初何か求め合おうとして入つてくるやろ、でも満足したり、求めなかつたりしてしまいに自分の殻にとじこもつてしまう。目新しい人が入つてくればいい。一年の子は部室へこない。一年の女の子が入らなかつたせいもあると思う。

(木)(宮) 上から押しつけている感じがするから萎縮してる。
高い山へ行く人が指導者だつたら仕方がないみたい。

(宮) でも精神面て何やろ、曖昧やね。

(木) クラブの性格をハツキリさせた方がよい。入る時の印象とちがう。皆のイメージのワンゲルとね。

(宮) ワンゲルには何かいいものがあると思うんやけどわからない。自分自身ただ遊びたいくせに、むりに大義名分を探してるみたいやけど。真の精神面て何のこと。

(木) 皆の悩みを話し合い、意見や、助言を与えればよいワンゲルにはそれが必要や。

(宮) でもそれはワンゲルに限らない。他のクラブだつて又、クラブ以外の友人関係においても、ワンゲル特有なもの、それが問題や。

(木) 他のクラブと比較してどうかね。

(中) 学生時代に労働者と交わることがいいと思つて歌う会に入つたんだけど、身体を強くしたいと思つたからワンゲルに入つた。でもこんなに高い山なんか登るつて知らんかつた。

(木) ワンゲルは高い山へ行かないと思つていたわけ？

(中) そう、野歩き、サイクリングの方面かと思つていた。私はまた天気図なんかも書けないから技術的に、合宿や、女子Pを考えると心配や。

しんどいもん

(平) ワンゲルの一番底に流れるものは自由に好きなところを歩くことと思つていたところがほとんど山行きの傾向や、ワンゲルはこういうものであつて、これだけの行動範囲に限るという限定はよくない。相当巾があつてもよいと思うけど、そして全員参加の合宿では中庸を取るべき。

(木) これからだが、部の方がどういつてほしいと思うかしら、やはり高度の技術を学んだり、重い荷物をかつぎたいか。

(谷) 実力以上の山を強いトレーニングで行くのはいやや、心構えさえあれば、低い山でも技術は習得できる。

(木) いつぺんにとび上る必要はないと言うことやね。宮保さんはどう、

(宮) 私は、今、自分がクラブに対してというより山に対して何を求めんとしているのかわからないから、チョット答えられない。ただ言えるのは、指導者が高い山へ行きたいからといつて皆にそれを強制するのはいけない。皆の意見をよく聞いてから方針を決めていつて欲しいということ。

(高) 私は美ケ原のパーワンみたいなのがいいと思う。北アルプスみたいな山登り、しんどいもん。

(木) 私は今年立山へサブザックで行つたけど、ものたりなかつた。昨年みたいに苦しんだ後、はじめて登つた後の快感を感じたい。

(宮) 少々苦しい山登りでもいいという木下さんの今の考え方から推すと、今年の合宿に不参加だつたのはおかしい。

(木) 私自身はね、でも無理に全体をそうするわけではない。それに合宿には他の問題もあつた。あの合宿の話はしたくない。つまりクラブの行き方がはつきりしていないからいけないのだ。

(正) はつきりさせるつて、巾を決めることか

(木) それもあるだろう。

(正) 部員の能力に応じて、それぞれ決めるんやから、巾をきめる必要がない。

(宮) でも、合宿に関してはちがつてくる。巾を認める、自由にするなら合宿の必要ない。パーワンだけでよい。

敢えて合宿をするにはきつと何か目的があるはずや。私にはよく分らないけれど、クラブが自由な行動の単なる装備の貸出し機関だつたら合宿の必然性はない。

(正) そうなるとクラブもいらなくなる。だから、皆勝手に行くのはおかしい。クラブは与えられたものでなく皆でつくるものだ。合宿を強制的と考えるのはおかしい。

(宮) しかし、合宿の為に特別のトレーニングをするのは、ひどい人にとつては強制にとれる。

(白) それでも野ばかり行くのだつたら、野歩きを合宿にすればよい。

(宮) 野ばかりでなく、いろんな人がいるから。。。。。。あーあ、又わからなくなつた。

(正) 不満な人はやめればよい。

(白) 合宿には高い山だけでなく、野原も含まれているから、両者が一致する見込みがない訳ではない。

(木) あつさり野や山のクラブがあれば問題ない。

(宮) もとはと言えばワンゲルの出発点はそこだつたんや。

(正) どつちも行きたい人はどうするんや。

(谷) あつちもこつちも行けばよい。(笑)

(正) 要するに問題になるのは合宿のみ、パーワンは今でも自由やから。

(白) パーワンがどこえ行つてもいいから合宿が問題になる。

(正) 何でもかんでもわがままゆうのはおかしい。

(お腹がすいた、の雑談、少々長びく)

(宮) 本当に分らない。合宿とは何か目標があつてやるものだと思うけど。それを意識しないで、ただ遊んでいるだけみたい。勿論自分もそうなんや、でも果してそれでいいんか。

(谷) それだから、他にチョットいいことがあると部室へこなくなる。クラブに目的があればねえ。

(宮) そうしたら少々苦しい事があつても、山登りがつらかつても我慢するやろうね。

(正) それなら何の為に山へ行くかを考えればよい。ただ遊ぶためやつたら上から押しつけられた目的などあつてもなくても一諸ではないか。

(宮) だからクラブを形成するところの目的や。

(正) クラブの目的やつたら規約に書いてある。自然に親しむこと。

(白) 漠然として抽象的や。皆んな、どんな目的やつたら満足するんや。

(木) 満足というより一つの決つた方向があつた方がよい。それが部長さんによつて変つてくる。

(白) 部長になる人は一応ワンゲルとはどういうものかを知つているわけである。そうすると、色々、高い山へ行くとか、低い山へ行くとかいう手段はちがつても、一つの目的は変らないと思う。

(正) その一つの目的つてなんやろう。

山と海との真中で

(正) 私個人の考えとしては、皆に笑われるかもしらんけど、自然に接する時感ずるあの喜びだと思う。これは山岳部とものすごく異る。山へ行こうが、どこへ行こうがこれは変らないと思う。だから部長さんが変つてもこういう気持を大切にしてくれる人だつたらいいなあ、と思うんや。

(木) 自然に接するとはいうけど、旅行に行つたつて自然に接するわけや、だけど、私は満足できん訳や、苦しみもせず行つて何も思わない。苦しんだ後に自然に接してはじめて満足を感ずる。だから、そういう人が部長になつたら正橋さんのいうようにはならない。

(正) 何んでやあ、それかて、自然に接しているんやろ。

(白) でも自然に親しむのが目的やつたら、クラブの人でなくて、誰でも持つている。

(正) 持つているだろうけど、それをクラブの中で生かしたいとすれば、それでクラブは成り立ち、そんな人が集つてできたのがワンゲルで、そういう人と一緒に行くのが楽しみならそれでいいのではないか。

(白) でも、自然に親しみさえあればワンゲルが成り立つて行くのであつたら、例えば海にキャンプする合宿だつていいわけやね。

(正) 私は山へ行く。

(宮) そこでズドンと衝突がおきる。

(木) そこで、はみだされた人は、他のクラブを作れはいい。(笑)

(白) 要するに山と海に分けるのやねえ。いや、山と海の真中でやつたら。(笑)

やつぱり言いにくいわ

(木) この問題はそう簡単に結論づけることは困難と思われますので、この辺で一つ男性論でも、まず、今年入つた人の新しい意見を、松本さん。

(松) 弱いねエ、そんなこといえるかいねえ。

(谷)ワンゲルの男性についてどう感じましたか。
(宮)(松)特定人物についてでもいいです。（笑）
私が大学へ入つて会つた男性はワンゲルに限られていて、他の男性はよく知らないから比べられないわ。
(正)（誰かしら）ホントカネ。
(谷)あまり漠然としていて何も言えない。
(高)中山さんや高見さん、男性論はいかがですか。
合宿等、通して今まで男の人とは五人しか一しよでないから・・・・。
(正)私は移り変わりはあるなあと思うね。以前はロマンチックな人が多かつた。どういおうか、今の人達と全然考え方の異る人達だつたと思う。
(宮)あーあ、昔よかりき、やね。
(正)私多分に老人趣味や。（笑）
(宮)自分より年上の人がそうみえるだけでないんか、下の子と接しないから。
(正)しかしクラブに対する考えからいつても何か異る。
(宮)どんな風に
(白)昔は詩人が多かつた。
(木)そもそも現代の人はみな現実的になつてきた。
(白)世の中がせちがらくなつたしねエ。要するにここまで来れば社会問題や。
(谷)池田さんの政策が悪いのではないか。（笑い）
(木)ところでクラブ内での恋愛について。
(高)大分生れるのか、そんなカップル私は全々わからない。
(谷)誰かが新トレの時、クラブへ入る目的に、ボーイハントというた人がいた。
(白)それはあるやろうね。もし高校時代からのいい人がいなかつたら。
(宮)クラブに入らなくても生きている限り・・・・。
(谷)でもその手段としてクラブに入るのではないわねエ。
(宮)私は全々そんな考えはなかつた。今もないけど。
(高)合ワンのテントの中に、クラブ内の恋愛は絶対いけませんという人がいた。福井の人で。
(正)その理由は
(宮)全体が気まずくなるからやて
(白)そりやあ、あるかもしれんね。もう少しカップルの方も、クラブ員も割り切つてしまえばいいのにねエ。
(宮)人間にジエラシーはつきものやて。

(正)私は別に悪いこととは思わない。
勿論
(宮)どんな風にしたらいいかを問題とすべきや。
(谷)だいたいどうしてほしい、こうしてほしいというのはおかしい。
(白)ちがう、自分だつたらどうすべきかということや。
(正)未来のこと、わからない。
(木)どうすべきやといつたつて、理性のおもむくままにならぬのが恋愛やろ。
(宮)皆、心が広いから、(笑) 何だかみんなまとまらない。けつたいな話ばつかり。
(正)やつぱり女子というのはたよりにならないのかなあ。
(木)でもね、やはり女子だけでどこかへ行きたいと思つたら、ちやんと行けるだけの雰囲気、技術にしても又クラブ内の女子の位置も持ちたい。
(正)わからん、わからんといわないで、女子クラブ員としての自覚を持つべきやというわけか。
(宮)ーまあね、でもね、かあもね。ー
(木)ではこの辺で、お忙しいところをどうも有難うございました。

座談会の大要は以上の如きものであつた。いささか焦点がぼやけてしまつた感がしないでもないが、彼女等が一体どのような考えで部活動を行つているのか、また附録として男子部員をどのような眼で見ているのかが、諸氏にわかつてもらえたら幸いである。では次に募集した原稿を掲載して、別のながめ方をしてみよう。

〃〃〃〃 寸想 〃〃〃〃

池田 進

私達の部は、大変女性が少いです。しかし、少いながらも、彼女達は厳として存在しています。部にとつて(否、数多い男性諸君にとつて)この事が、幸なのか、不幸なのか、私にはわかりません。しかし、この事に関して次の事は、はつきり言えます。即ち、全然女性がいないか、又もつと多くの半数に近い女性がいれば、部誌にこのような論をあらためて取り上げる事もなくなるのではないかと。それでは、我が部を女子禁制の部にしてしまいましようか。私には、我が男性部員諸君が、この案に賛成する勇気を疑うわけではありません。しかしこの案を実行するさらに大きな勇気と力を、私は信用出来な

いのです。（私には最初の勇気とて御座いません？）それでは第二の案、私が部を女性の洪水にする事、これは実現可能です。第一の案よりもはるかに高い可能性を有しています。我が部には、常に楽しい和気あいあいとした雰囲気がただようでありましょう。そうです、その楽しい事、部室は、天国と化します。この人口過剰の天国は、澎張します、部室が三つも四つもいります。その中では、口角あわをとばしての議論又、議論、ついには、分裂、離散、そして・・・・・・。

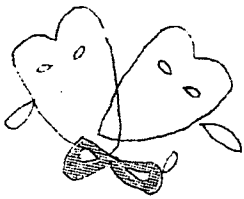
私はまつ平御面です。現在、十七名の女子部員諸嬢がおられます。それでたくさんです。

再び問題は、元へもどります。私は、現在を肯定しました。いや、現在の数だけを肯定したのです。私達は、今年の夏季合宿で、女子パーティーをつくりました。リーダー以下全員女子、我部史初めての完全女子パーティーでした。（これには十二・五パーセントの誤差があります。）しばらくの間、部はこの話題でもちきりでした。この事に関して種々、疑問、異問が出てまいりました。又、女性方自身にも問題がありました。いわく荷をかつぐ自信がない。いわく、強制的パーティーづくりはどうの。いわゆる主脳連は懸命に説明しました。「女子部員には自主性がない。それを持つには、やはり男子に頼らず君達だけで山へ行け、自分達だけの力で自然の中へ飛びこんで、始めて自然の良さがわかるのだ。強制的に作つたのではない。君達の中からその声が上がるのを待つていたのだが、一向に出てこないので、やむをえず、我々の方から提案したのだ・・・・・。」ともかくも、これは実行に移されました。もつとも、この事が原因かどうかは知りませんが、最初予定していた女子参加者が、少し減つてしまいましたが、彼女達は、自分達の山行に必要な最小限の装備と食料を自分達だけで持つて、合宿を終えました。彼女達は、とにかく自力で、北アルプスへ登つて帰つて来ました。

女性は、男性と体力的に異なります。従つて、ボッカ力が男性より劣るのは当り前であります。又その体力が原因で、自然に山に入る回数も少くなります。故に技術的にも彼女達が男性より劣るのはやむを得ません。そこで彼女達はだんだん男性に頼つて山へ行くようになります。山が高度になればなる程、なおそうであります。それが当然の事なのであれば、私達が彼女達に要求した自主性とは何なのでしょうか。私にもわからなくなつてきました。ただ、これだけは言えます。彼女達がその体力

に甘えて、必要以上に男に頼る傾向があると、もし仮定するならば、それはけしからん。ワンダラーの一人として、反省すべき事であると思うのです。私は決して、各女性諸嬢に体力以上のボッカ、必要以上のガンバリなどを要求しているのではありません。私達が行こうとする原始の姿を残す自然の中で、安全に、気持よく行動出来る、最小限の技術とボッカ力は少くも持つていてほしい。又、その時、その人なりの方法で、常に新しい自然を求める為に工夫したり、訓練したりする態度を忘れないでほしい。私は、そう思うのです、そう思うだけなのです。

力強く、男勝りの女性、それもよいでしょう、しとやかで、親切な女性、それも又いいではないですか。彼女達が部を明るく楽しいものにしてくれたら、それは、大変うれしい事です。



ワンゲルの女性にささげるものにして論にあらず

宮村宣雄

これから書く事は反感を持たれるに決つている事は良く解つている。これまで抱いてきた考えか、ついこの間考え直した事かどうでも良い。後で解る。

「初めはピクニック等をする同好会みたいものだと思つてはいりました。」ーそう思わないではいつた女はいないね。そうでなかつたらどうかしてるー、いいかげん慣れてきたら男共ととてもじやない程のヒドイところへまで行きたがる、こちらがよわるというもの。

近接する岳々の毫荘さをよきみはらしとする岳々へでも、勇敢にもほほえましく向い、且つへこたれてわがままを言うさまは、見た人でないと解らない程のカワイサ、ウレシサ、ヨロコビだと人は言うのであるが、これも全て女性の悲しさ弱さからでているのだから自業自得とも言えるが、まあ立派なものだとも考える。シャバへ出れば悪徳男性にとつてあらゆる意味で手ごわい存在になろう。まあ、そんなものにでもならなければ、ワンゲルの堆々しくもない男共も心におきたる出来心を押えるに押

えきれなくなつてしまうかもしれないと言うものだ。こちらがよわるような女性は、他の大学のワンゲルにいる様で、この間も、デッカイ荷物のかげから出ている手と足だけを拝んだりしたものだが、この時は男共の一人がチョッピリ小さい（デッカイのよりは）のをかづいていたのがヒドク印象的であつた。初めはそれを女性だと考えて、いつか前へ出て確かめようと思つたが、その必要がなかつた。そいつがバテ始めたから。

こんな女性の話しをしているだけで眠くなるから、眠くならないうちに一つしめくくりでもいるかと思つて。女子部員が存在しているだけで十分、何もそれ以上云々することはない。男性についていけるところまではついていき、女性だけでやる時は、男に生まれ変つてくれば良いのにと思われない程度にやる事、なにかの対象にも心配かけないですむし、良い事だらけでホイホイだ。でたらめも良いとこ書いて許されてね。こんな事を言つてやりたい女性が当部に出ないかなと考えているのかなあ位に思えば腹も立たないでしよう。ゴソマツでした。

ー終ー

ちよつと一言

ロ！ロ！ロ！ロ！ロ！ロ！ロ！ロ！ロ！ロ！ロ！ロ！

中川皓三郎

神の摂理によつて人間は男と女になりました。そして今、僕等の部にも幾らかの女子部員がいます。それは断固疑がうことの出来ない事実でして、そのことから、僕達の（男性）得ている知識はまことに豊富であります。しかしながら、僕達は常にその事実を意識せねばならぬのでしようか。僕は思うのですが、ここに、女子部員うんぬんという問題が出てくることは、言い換えるなら男子部員についての種々の問題が当然起つてきて良いのだろうにということであります。殊更に女子部員というパートを取り上げて、無理に何かを考えさせようとする傾向が、今度の編集に有るのではないでしようか。

若しそうだとすれば、大きな誤ちだと思います。つまり、正直言つて僕は「女子部員」について特別に何かを考えたことはありません。女子部員である前に、彼女等は「部員」なのであつて、特に男子部員と対照的に把える必要は全くなく、またそうすることが、何のてらいもなく一緒に山へ行つたり、ダベつたりすることの大きな

要素となつていると考えるのです。

今ここで、男子部員が女子部員と対比されて、両者が互いを意識するようになつたら、果して今よりもより良結果があらわれてくるでしょうか。確かに女性と共に山にゆくことは僕にとつて楽しいことでありますがそれ以上は余り考えたくありません。前にも言つたように特殊な存在として彼女等を扱うことはしたくありません。今のままで良いのです。

ただ一言、それと関係のあることで言わせてもらえば今井の合宿に於ける女子パーティについての問題であります。あの事で部内がいささかゴタゴタしたのは、実に当時のいわゆる執行部が当然、再考してみる余地があると思われます。単に「自主性うんぬん」で押し通してしまわれた感じですが、僕はもう少し部員全体にうまく浸み渡る方法をとられた方が良かつたのではないかと思います。言葉は適切でないかもしれませんが「独走」の感じがします。あのように部というものを二分（上と下に）するような事態をかもし出すのは好ましくないのではないでしょうか。あのようにスッキリせぬまま全てが終つてしまつたのは、単なる発展の過程としての一現象として済ましてしまうわけにゆかないのです。

女子部員諸君
あなた方の使命は重大だ

山田　允

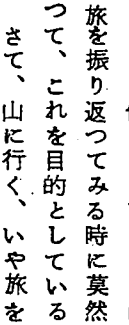
あえて筆者が、このような表題をつけたのは、単に、筆者が非凡なるフェミニストであることを諸君に明らかにする必要性を感じたからばかりではない。（勿論それは事実であるが・・・・）客観的、科学的な冷静なる目で事実を直視した時に、筆者が痛感した諸君への真実の呼びかけである。否、願望といつた方がよいかもしれない。以下の拙文が、諸君のやゝもすれば見失われがちな位置を改めて認識させ、それによつて諸君の自信と、更に、その使命遂行への努力を高めることに、また、一方では、経験の伴わない理論の先走りの悲しさから、あるいは、部運営上の困難性を免れんが為に心にもなく、女子部分離などと、口走る輩が、後で慙愧の涙をこぼさぬようにこれが役立つならば、筆者にとつてこれ程嬉しいことはない。

さて、我々の部内における女子部員の役割を考える時に、先ず、部の目的実現の為に、いかに彼女らが必要にして不可欠のものであるかを考えてゆくのが、順序であろう。我部が目的するもの、それはいうまでもなく自然に親しみ、それから、学ぶことである。しかしながら自然は、我々に決して、直接的に教えてはくれない。我々は、人間を通して自然から学ぶのである。言い換えれば自然に抱かれた状態における対人関係から何かを学ぶのである。従つてそれは、決して人間というものから分離したものではない。人によつて考え方の違いはあろうが筆者は結局のところ人間形成の過程において人間というものについて、より知ろうということ、更に、真にあるべき人間関係を探し求めようというのが、我部の究極の目的なのではなかろうかと思うのである。それが全部ではないかもしれない。しかし、少くとも目的の一つの中核を占めていることは確かだろう。こう考えてくれば、そして女子部員を全然欠いた部を仮定してみるならば、この目的実現の上で彼女等がいかに貢献しているかは自から明らかになるであろう。彼女達のいない部は、いわば不具となつたも同然である。何故なら、真にあるべき人間関係が女性を欠くことである筈がないではないか。従つて我々は、それを探究する場を失うことになるではないか。又、人間を知る為には、女性が不必要だと言え

る筈もない。勿論次のような説を主張する者もいる。即ち、彼等は、根本的には男と女というものを区別しないのである。彼等は言う。「自然の懐深く抱かれた時、我々はすべて本来の人間性を取戻し、従つて男も、女も、裸になつて同じ一人の人間として心を開いて話し合えるのだ。従つて、山へ行けば男や女の区別は全然ない筈だ」と、そして事実そのような女性が登場してくるから驚くばかりだ。（但し、我部においては、そういう傾向がさらさらないことは、嬉しい限りである。）だが諸君よ、筆者は、これらの人にどのような言葉を与えることができようか。裸におれば、男も女も同じだと信じているこの善良なる汚れを知らぬ人々に。いやいや、茶化してはいけない。真面目に説明しよう。たとえ彼等が耳をかそうとしなくても。

彼等の大きな誤りは、裸になるということが、すべてにおいて同じになることだと信じている点にある。そして、そういう方法においてのみ、真に心が通い合い真実の姿に接することができると信じる点にある。筆者は、それとは逆に裸になるということは、共通のものも異質のものも、全てが明らかになることだと考える。従つて、男性と女性の例においては、そこに共通するものは勿論互に認識し合うけれども、一方当然あるべき異つた時質も、いよいよ明確になる筈だと考える。そして、又、そういう異つた面を認めながら、その上に実現した心の触れ合いこそが我々の必要としているものだと思うのである。従つて、筆者は、女子部員をあくまでも女性として見ているし、又、ますますそうあつて欲しいと望んでいる者である。さてさて、部の目的から女子部員の役割を説こうとした為か、いささか必要以上に理屈つぽくなつてきたようであるが、実際には彼女達の必要不可欠性を述べるには、こんな理屈は必要でない。何故なら、男性にとつて女性が必要なのは当然すぎる程当然だからだ。しかしながら、こう言うと女子部員諸君は反論するだろう。「それにしては、あまり優遇されないじやないの」。いやごもつともです。確かに我部の女子部員は、その魅力に相応しいだけの当然の待偶を受けていないのが事実である。しかしながら、それは仕方のないことである。説明すれば、要するにその原因は我々男子部員の側にある。我々は、常に女子部員の一挙一動に注意を集中している。しかしながら我々は、悲しいかな、まだ彼女等を一人の独立した個性のある女性としてみる才覚をもつていない。一般的女性というものの見本として観察し、そ

こからできる限りの知識を得ようと努力しているに過ぎない。つまり、我々男子部員は、あまりに女性について未知なるが故に知識を得ることで精一杯という訳である。勿論我々の中にも勇敢にも体当りしきに知識を得ようとする者もいる。しかし所詮、彼女等は女性一般に関する知識獲得の対象であることにちがいはなく、この冷遇は男子部員の飛躍的成長でもない限り、これからも続くことは予測できることである。しかしながら、女性の象徴として彼等が憧れの目で見ていることに間違いはないのだから、そこのところを女子諸君も理解して、できるだけ多くの情報を与えてくれるならば、これ程けつこうなことはない。ところで、幸か不幸か萬が一にも諸君が男子部員の中に恋愛対象を見つけた場合を考えよう。筆者は、即座に、君に退部を進めよう。複雑な人間関係を考えるならば、それが部の運営上に及す影響が大きく、さらに当人達にとつても部員間の人間関係などと比べものにならない程大切にすべきものであるという意味からも筆者は、女性の方の退部を妥当と思うのである。部外の男性との関係は、こゝでは全然問題にならない。男子部員が、その甲斐性がないのだから、むしろ女子部員にとつてそれは望ましいことである。（とは言うもののいささかガツクリくることは確かである）以上、何か初めに書こうと思つていた事が途中で横道へそれてそのまゝになつてしまつたようだ感もあるが、日頃女子部員というものについて真剣に考えたこともなかつた筆者が、あわてゝ思いつきのまゝに綴つた、いわゆる女子部員論であることをお断りしてペンを置こう。



雑感

今井春昭

僕にとつて、山に行くことは即ち、異郷に感動を求めることに他ならない。これはもちろん、自分の今までの旅を振り返つてみる時に莫然とそんな気がするだけであつて、これを目的としているなどとは言えないのだが。

さて、山に行く、いや旅をするといつた方が妥当かもしれぬが、そんな場合、二つの方法が考えられる。言うまでもなく一人旅と多数の集団によるものの二つである。僕は良く言うのだが、一人旅をする人間にとつて、異郷の風景などは余り問題とならないのではなかろうか。大体、何かの物体を目で見て「ああ素晴しいな」と思つたところで僕には何の感動も沸かない。それを確認といお

うか、一つの明確な意識と化せしめるような手段がないからである。「いいな！」という僕の呼びかけに「うん」という極めて簡単な返事があれば、その風景は印象として永く心に残る。だから、一人旅に僕が求めるものは土地の人と仲良くなることに尽きる。その場合、土地の風物は一つの背景を提供してくれるだけであつて僕と土地の人々との最も効果的な舞台装置にすぎないのだと言えよう。自分を本当に一人にしてしまう厳格なるその舞台は、だからまた本当に人間を求めさせるのである。全く冷淡な大自然の中で、一人の人間の一軒の家庭の示して呉れる無差別の親切さが僕にはたまらない。それが一体どうだと言われてみれば、また甘い態度だと言われてみれば、それに真向うから返答できる答を持つてはいないのだが、とにかくうれしいのである。

一人旅はかような意味をもつているのだが、それでは団体登山（言葉は適当でないかも知れぬ）はどうであろうか。僕は合宿でつくづく感じたのだが、この場合、背景が、十名もの人間の暖かい心のつながりを作り出すのだと。長くけわしい径、雷雨、強烈な日射、星のきらめく寒空、みんな〳〵人間の持つている美しい心を各個の穀の中から引き出して呉れる。どんなちつぱけな行動でも、それを何の疑いもなく行える人間と、快く受け入れられる人間、僕はそれをそばで見ていると実に嬉しい。それにまた、この種の行動は、やはりある程度気心の知れた「部員」という共通の場に在る人達と何日かをともにするわけであるから、おのづと一人一人のものの考え方とか、生活態度にじかに触れることができる。他のクラブにも同じことが言えるかも知れないが、別にそれにこだわる必要はないのではないだろうか。僕等はそういう手段を大自然の中に見つけようとしたのだろうし、いわゆる運動部各クラブは一つの試合にそれを求めただけのことだから。

さて、この世に、男性と女性が居て、両者がいつの日にか結びつくことが続くであろうことから、僕等は常に異性に注目する必要がある。注目とは即ち、正確に異性を視ることである。それは多分、頭の中にいくら描いてみたとて何の意味も持たないであろう。正確に視る為には、やはり自分達の身近かにそれが存在しなくてはならない。そしてそれは出来るだけ多い方が良い。

以上、述べたことを考え合せてみれば、自づと一つの方向が定まるであろう。僕が行動に求めているものは、

むしろ大自然ではなくて、人間そのものなのであり、僕の心に大きな火をもやすのは、同じ場にあるパーソナリティに富んだ多くの人間について、いろんなことを識ることができることである。そして、その舞台が大自然なのである。勿論、厳しいこの舞台では、目をつむりたくなる様なことも、耳をふさぎたくなる様なことも起る。しかし、それを素直に認めた上で、尚、美しさをひしひしと感じられたら、僕はそれで満足である。そしてそれは決して女性を欠いた状態では意味を持たぬというわけでもない。しかし、世に男性と女性の厳然たる区別がある以上、両者が互いに他を認め合うことは是非とも必要であり、そのためには一つの舞台の上で互いの特徴を充分に発揮し、主張する必要がある。その舞台がいわゆる大自然なのであり、「部員」という言葉は、つまり「役者」ということに通じている。「女性」という特有の役を演ずるのは「役者」である前に先づ「女性」であらねばならない。このように不可欠な人達が、我々の部に非常に少いという点について、僕は前に述べたような態度から、今一度、部の在り方、方向、と女性が少いという事実を結びつけてみる必要があると思う。日頃、山行きの目標がどうも人間関係にあるらしいと感じてきた僕が先づ考えたことである。

ワンゲルの女子部員

山梨大学　中山大樹

一、女子部員の問題点

◎個人として

当人にとつての第一の問題は、ワンゲル部に入ろうか、入つた人は退部せずに留まろうか、どうしようか、と言う点だと思う。

部に留まることに決めた後も、団体行動や男に伍して何日も生活せねばならないことが、ともすれば一面倒な気がするだろう。

◎家族の心配

家族としては、娘がワンゲル部に入ると言い出したとき、遭難の心配、男女関係への危惧、ますます御転婆になりはすまいか、その他、他の部の場合には無いさまざまの心配をするに違いない。

◎ワンゲル部内の問題

ワンゲル部としては、体力の点でも精神力の点でも女子は能力が劣つていると言う悩みがあり、それに附

隨して、女子部を一つの集団として扱うか、無差別を本態として行くか、と言うような、扱い方の問題もあろう。更に、化粧や食事に暇を取るとか、特定の男子との間にカップルができた時の問題などもあろう。しかし、何と言つても女子が居ると殺風景でなくなり、男子部員としても、女子を部から排斥しようとは思わず、女子部員が質的にも量的にも大いに伸びて行くための条件を真剣に探し求めている。

二、結　論

女性の性格の中の好ましくない部分の殆んどは、持つて生れたものでなく、今消え去りつつある古い不幸な社会環境の産物である。これを変えて行くには、頭で力んでもだめで、男と同等の能力が要求される社会に、生活ぐるみ、ほうり込まれて、シゴかれるのがいちばんだ。

心身共に粘土のように軟らかい、若いうちに、こういう事を繰り返すうちに、能力と魅力に富んだ女性本来の姿が、薄紙をはがすように現われて来るに相違ない。

高い技術と豊かな経験を持つリーダーの下に良心的に運営されているワンゲル部は、このために理想的な環境を提供するものだから、友達をさそつて、是非お入りなさいとすすめる。これが部員個人の設問に対する解答である。

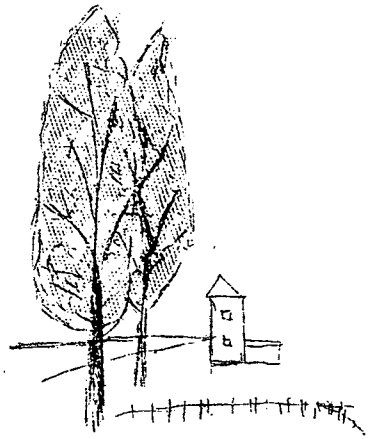
女性の欠点を持つた上に、更に男子の悪いところをくつつけたような女と、女性の欠点を洗い落した女とは全く違う。ワンゲル活動の結果生れるのは後者の方なので、家族が娘の性格の悪化と言うことを心配する必要はないと思う。また、複数の男女が民主的な規律の下にいつしよに行動する際には、年寄りが心配するような男女問題は起きないのがふつうである。これが家族の心配に対する解答である。

しかし、ひとつの心配がある。今日の日本の社会はまだ男女同力になつていないので、成人後の年月は、男に一方的に味方する。そこで、ワンゲルの行動を通じて、男性を見る目が養われすぎて、つい婚期をおくらせるような結果になると、一般的に言つて損をする。

次にワンゲルの男子部員に対する答であるが、はがゆいから、みんな自分でやつてしまつて、後で女子には何もできない、とボヤくのは御互に損である。体力の点等、早急には何ともしようがない点はカバーしてあげるのが当然だが、長い歴史を通じて女性が忘れて

しまつた自信を取り戻させるように援助するのが賢明な方法だと思う。そのためには、男女一緒の行動が原則となるが、女子だけのパーティーを組んだり、女子が特に能力を発揮できるような文化活動を取り入れたりすることも時には良かろう。

こうして、有能な女子のリーダーが出るようになれば、後は非常にやりやすいと思う。（山梨大学。ゼミより抜粋）



ある山の男の日記より

三月某日。。。。新入部員勧誘のポスター、標語を作る。ついでに新入女子部員に捧げる歌をE。Hと作る。楽しみだ。

四月某日。。。。新人歓迎会。「俺にまかしとけ」とばかり新人の荷物を担いでやる。可愛そうに何にも知らないで喜んでいるよ。

六月某日。。。。合宿だ。トレーニングは楽しい。いつも通りがかりの女学生が「頑張つてね」なんて言つてくれる。

八月某日。。。。白山アルバイト。一日七合の飯を平らげる。ニボシのオジヤは旨い。

九月某日。。。。秋だ！　人が恋しい。部室に入りびたりする時間が生活の大半を占めるようになつた。交際費出費多い。

十二月某日。。。今年も終りだ。元旦には神にちかつて可愛い娘ちやんを獲得しようと思つたのに。。。

私の本心

近頃、いや一九六三年は、ワンゲルの女子部員に自主性が無いの有るの、実力をつけて女子部隊を作る。とか、作らんとか、うるさい事であつた。しかし要するに早い話が、何と申しましようか、手短かに申しますと、女子部員の居ないワンゲルなんて、山岳部のくずにすぎないのであります。（ここで筆者、女子部員の拍手カツサイを浴びる）。思いかえしてみると、私がワンゲルに入つたのは女の子と山へ行けるからでありまして、ムクツケキ野郎共と山へ行くためではないのであります。筆者以外の野郎共は何んのかのとワンゲルに入つた理由を言つておりますが、本心は私と一しよなのであります。女子部員の皆々様ヨ、貴女方は幸福ですゾ、本題にもどります。我々のワンゲルは山岳部のくずではない。山へ行く場合、山岳部は山に登り、我がワンゲル部は山を歩くのである。山を歩く我々は頂上に立つことよりも、自然に抱かれ自然のスネをカジリ、この世の中で一番単純で複雑な人間共と話をし、時にはツメにともした灯よりもほのかな慕情を抱き、黄昏だ／　というのが目的であるゾヨ。

以上

金大ワンゲル部内　無責任協会
支部長　ウソツキ

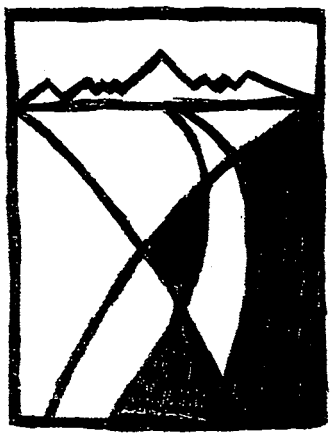
最後に

一読されて、どうお考えになりましたでしようか。本当に色々の方面から一つのものを見ることができるものです。そしてまた、そのどれもが面白いものでした。頭初にも述べましたように、この問題提起は、これを踏み台として、皆さんに少しでも部とかワンゲルとかいつたものを考えて頂ければ幸いだという意味のものであります。どうぞ冬の長夜、先輩、同志、などの家、下宿などでコタツにでもあたりながら大いに話し、今後の自分の行動の基礎としてほしいと願うものであります。

沢山の寄稿、ありがとうございました。

（編集子）

冬



金星人がスキーをしていた

理学部　三年　清野邦弘

そのスキー場は、かつては静かで人も少なく滑りやすい所でした。そのわりにリフトも完備し、休憩所もあつたし、一般には中級と言われているくらいのスキー場。ところが最近は、何とやらブームで、こゝにも多勢のスキーヤーが入り込むようになつて、リフトも列を作らねばならぬ程、それも滑る奴きりが集つているからゲレンデの方も相当な混み様、スキーをすることしか知らぬ奴等だけにその混雑も仕様がない。

スキーには見て楽しむ方法がある。楽しむというより面白く見ると言つた方が当つているかも知れぬが。

何とかこうにかリフトで上に着いたら、その辺りに暖たかそうな、下の斜面のよく見渡せる所に腰を下ろして景色でも眺める。ゲレンデは、きんだいあぷすとらくとげいじゅつ展の開催中である。つまり、モビール展である。日本人とも、地球人とも火星人ともつかぬ人物（怪物）の展覧会場、見本市である。この動く芸術？を見ているだけで、リフト代を払つて、わざわざ混雑するスキー場へ乗り込んだ甲斐がある。

真赤な絵具を体中に塗りたくつて　……と思つてよく見ると、うん、やつぱり絵具ではなかつた、真赤な股引をはいている　……いやまてよ、あれは雄だから股引をんかは履かないのじゃないかな。だがまてよ、金星人に雄雌の性別があるのかな？と思案黙考しているうちに、キャ　という犬の遠吠とも、蛙が車につぶされた時の鳴声ともつく叫び声がして、彼の人物？は、手品が如く真白に衣裳代えをしている。この見事さ、素早さ、充分プロの手品師に太刀打ちできるとにらんだ。

私はかつて、このスキー場で本場の人食人種を一度だけ見たことがある。真赤な頭、真赤な手、真赤な目、おまけに眉の毛の色まで赤い。そして、赤い血を口のまわりにこすりつけながら、あたりに沢山いる肥えたスキーヤーを物色していた。一言だけでもインタビューをしてみようかとも思つたが、急に手の指でも食いちぎられたらいかんと思つて、新聞記者らしい、でかいカメラを持つた奴にそれを勧めたら、俺は記者ではないとことわられ、そのまゝになつてしまつた。その時私と一諸に行つた友人は、元来勇敢なやつで、私の止めるのもきかないで、人食人種に近づいた。いざとなつたら、自分の命も

かえり見ずに友人を助けにとび出そうとかまえていたが何事も起らず、友人は無事に帰つてきた。私は心から友人に、その無事であつた喜びを祝福してやつた。その友人もおかしなことを言う奴で、彼奴は頭に赤い布をのせ真赤な手袋をし、赤い絵具を口のまわりに塗りたくつている日本の女だ、などゝ言い出す。それ以来、友人の目はふしあなであるという前提で、私は彼と付き合つている。

何年か以前に、何とかという映畫がはやつてから、ネグロのスキーヤーが多勢日本に来るようになつた。体の色に合わせてスキーの色まで黒いのをそろえて。しかし最近はブームが去つたゝめか、だんだん少なくなつてきたのは、目の保養には惜しいことである。特に彼等は魔術師ぞろいで、奇妙な声を発しながら、もつという間に北極熊に変化したものだつた。

もともと、スキー場とは滑る所ではないと、理解しているものだから、最近、再び真面目なスキーヤーが増してきたのは、残念なことであると言おうか、何といおうか。

近年、冬期の積雪量が少なくなつて、スキーの最大の楽しみ（今度は実際に滑る時の話）がしにくゝなつた。一晩に一メートルも二メートルも雪が積つた朝、まだ誰も滑つていないスキー場で、思い切り滑りまくる。一番上から直滑行をする。その時に下までころばずにきたらそんなのは他のスキーヤーと異る所がない。途中で思い切り雪の中にころぶ所に楽しみがある。ちらちらとまぶしい朝の光に輝く粉雪を巻き上げて斜面を下る。スピードに乗つてスキーが浮いてきた頃、思い切り横に倒れるその時のズンとしたショック、パッと急に真白な夢の世界に入り込み、首すじにヒンヤリとした雪がちくちく刺す。数秒後雪煙の中からぬけ出た時、自分の体は深く雪の中に埋つている。雪の中でも呼吸が出来るというのは事実だ、が、呼吸ができるからといつて、そのまゝ深く雪に入つてはおれない。冷い雪はいやおうなしに顔に染みてくるから。光の中に立つて、顔の雪を振り払つた時の心地よさ、以来、粉雪に滑るとどうしてもころびたくなつてこまる（自分の弁護ではないですぞ）。幸に？近ごろはこんな条件の良い雪に滑ることは殆んどない。たから、かつて一度、踏みかためられた所で寝ころぼうとしたことがあつたが、期待に反して、体は雪に沈むどころか、空中にはね上り、シリを打つ、頭を打つ、おまけに鼻の頭まですつて、自分の修業の未熟さを感じ、三々

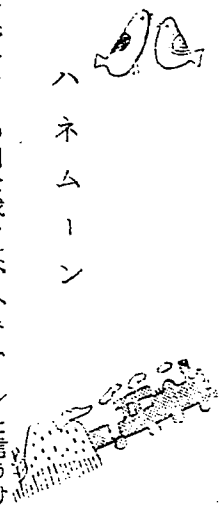
ころぶ練習にはげんだ。

こんなことの訓練ができていたおかげで、スキーでけがをすることがめつたにない。人が前に飛び出したら尻もちをついたら完全にストップする（技術的には非常に困難）し、樹木に突き当りそうになつたらスライディングストップをする。この方法以外に、最上のストップの方法など考えられないはずはない。

しかしスキーヤーにはわからない双等が多いもので、「じようずなころび方」などは、全然習おうともしない。仕方がないから、自分だけは常に模範演技を見せることにしている。まず一回目の演技をすれば、半径五十メートル以内（スキー場の人種により差がある）の人間の目が全てこちらを向き、二回目で早くも、「ころぶ楽しみ」を理解して、うれしさに顔を破壊せんばかりにやにやし、三回目以後は、こちらの意志が充分相手に通じてまわり中が、ころぶ練習を始め出す。こゝまできたら、もう演技指導する必要はない。顔に笑みを浮べながら、次の会場へ移つていく。その途中、振り返つてみた時のおかしさは想像出来るじゃないか。

こんなことが、実際に出来んものですかね。

ハネムーン



新婚一ケ月の間を我々は、ハネムーンと言うけれど、どうしてこう呼ぶようになつたのだろうか。ハネはHONEYで、はちみつのことであり、ムーンは一月、二月のいわゆる月である。さて新婚は、はちみつのごとくに、アマーイ　ものだから、そう言うのだろうと思つている人もあるでしようがさにあらず。ぐつと歴史をさかのぼつた、古代ゲルマンの社会では新婚一ケ月の間、はちみつから作つたみつ酒を飲む習慣になつていた。そこからハネムーンなる言葉が出て来たのである。ところで日本語の密月は、どうして生れたのでしようか。ハネムーンの逐語訳であるかもしれません。ミツチリ研究してごらんなさい。つきる事ない興味がわくでしよう。

スキー合宿の思い出

工学部　二年　飯田利之

十一月二日の総会に出席した時、編集委員から、スキー合宿について、三、四枚何か書いてくれと頼まれ、その時はなんとはなしに引き受け、いざ何か書こうと思案を巡らしたが、鈍感な頭では、名文がとうてい浮ぶはずがない。そこで、気を楽にして、せめて迷文でもと思つてペンをとつた次第である。また何にせ十ケ月も前の事なので最後はどうなるか保証出来ないが、思い出すまゝ書いてみようと思う。

スキー合宿は、始めから参加しようと思つていたが、そのころ経済的に、一般的にキンケツ病なる病に罹り、スキー用具は借りることにしていた。ところが、どこでどう道を間違えたのか十二月の終りになる頃には、スキーズボン、スキー靴……　と、用具一式揃つてしまつていた。全く予期しなかつたことであつた。

一月五日、目覚し時計の音で浅い眠りから目を覚す。手速く用意をして、小立野の友人の下宿を出る。前日からのみぞれもあがり、外気の冷たさが身にしみ、眠けが体からぬけて行く。時折り、静かな街をタクシーが、まぶしいライトを照らして、とばして行く。二人は話をしながら、金沢駅へと足を速める。駅には泊り組も居たせいか、もう大分集つている。全員無事に三時三十分発、新潟行きに乗り、山の坊スキー場に向つて出発する。前日より余り眠つていないので、車内で一寝しようと思うが、スチームの効いていない列車では熟睡出来ない。うつらうつらしているうちに東の空が薄明るくなつて来た。その薄明るさの中に、くつきりと浮ぶ北アルプスの眺め……　雪を頂き厳しさと孤独に耐えている眺めは、僕に威圧感を与え、身をひきしまらせ闘士をかきたゝせる。既に囲りの田畑は、白銀で覆われ冬の力強さを感じさせている。糸魚川で大糸線に乗り換える。この列車（二両しかつないでいないのだが）は、超満員のスキー客を積んで平岩駅まで行く。平岩駅で殺人列車とも別れて、だらだらした登り道をスキーとザックを担いで宿舎に着く。午後からさつそく三十六番ゼッソンをこゆで一流選手のような恰好でゲレンデに初すべりに出かける。積雪は一メートル近くらしいし、雪質も金沢地方のみぞれのような雪とは違つて、サラサラとした雪である。踏むとキュッ、キュッと快音がする。　コンデションは

上々である。全員体操をして、本格的スキーなるものを始める。何にせこんな大きなものをはくのは始めてなので、幼い頃の竹スキーのようには、自分の意志通りにはいかない。少しスピードがつくと怖くなる。何にせ止めることを知らない。止めようと思つても思うだけで止まらない。スキーにまかせるより他にはない。結局は転ぶことである。しかし、僕の場合、この転ぶことを怖つたゝめに大胆な冒険をせず、大して上達しなかつた原因ではないかと悔まれる。また止めることが下手だつたために、最初の日にして、人とぶつかつたり、買つたばかりのストックを折つたのである。

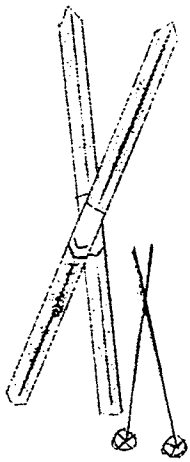
六日六時三十分起床、合宿中は六時半頃起床、十時～十時三十分就寝を続けた。講師二人について、基礎組と応用組に別れて講習を受ける。みんなで雪踏みしてゲレンデを整えて、直滑降、斜滑降、前制動、ボーゲンを練習する。

七日、一日中雪がちらつく。前日のボーゲンを主として練習する。夜は全員でスタンツを楽しむ。

八日、雪が降つたり止んだりする中でスキー運動会をする。シュテムボーゲンからクリスチャニアまでの練習をする。夜は全員でスチャー等で楽しむ。僕は「希望の年」と云うのをやらされたがだめだつた。

九日、午前中は、山の坊での最後のスキーを楽しむ。一時に宿を出て、帰途に着く。車中ではワンゲルブリッジを楽しみ、富山駅では例によつて例の如く鱒鮨を味わい金沢駅には八時十五分ごろ着き、全員「一日の終り」をハミングで歌い別れる。

合宿中は、炊事等一切は宿側に任せ、合宿の厳しさは薄れていたけれども、スキーは十分に楽しめたし、ワンゲルの目的である自然に親しむ、自然に溶け込むと云うことをスキーを通じて出来たと思う。



スキーの思い出

工学部　三年　大橋功一郎

冷いからつ風の吹く表日本に育つた僕にとつて雪に関する思い出といえば殆ど無いといつてよいくらいわずかである。小学校五年の頃近所の腕白共と土混りの茶色い雪でした雪合戦、中学三年の時近くの六百米程の山にハイキングに行き三月というのに雪に降られ、頂附近で薄つすらと積つた雪の上をブリキ板で滑つた事位のものである。フワリフワリと空から降つて来る雪片を窓ガラスに顔を押しつけて、もつと降れもつと降れ、溶けないようにもつと寒くなれと願つた僕、あの頃は小さくて、すぐ溶ける白い物が珍らしかつたのである。夕方に降り始めたのを知れば溶けないうちにと陽の出る前に飛び起きにぎりしめ、口に押し込んだ白い雪。それは今では別の意味で待遠しい存在になつている。スキー、青い空の下そう快な滑降、心地よい風……。

偶然金沢に来ることになつて何の目的もなく入つたワンゲル、こゝで僕は初めてスキーをはいた。クラブに入つていなかつたら多分スキーをすることはなかつただろう。そんな理由で道具は全部借りもの。学校から借りたオンボロスキー、破れていて中身のはみ出すゴムのスキー靴、竹のストック、よれよれ、つぎはぎの山シャツ、山ズボン、白い軍手、これが僕が初めてスキーという板の上に乗つたときの格好である。ワンゲルに入つてもクラブ行事に殆んど参加せずスキー合宿が三度目の行事参加であつた。合宿の直前までスキーに対して別に関心も持たなかつた。もちろん滑ることになるなんて夢にも思わなかつた。

その時以来、登つては滑り、滑つてはころぶこの単純な運動に魅せられた。年が明けて僕は一大決心をしたものである。次の合宿には自分のピカピカ輝くスキーで思いつきり滑つてやるぞと。一念発起、マネービルというわけである。その年の暮には念願通りピカピカのスキーを担いで白馬大池で行われたスキー部の合宿に加えてもらつた。そこまでは予定通りであつたけれど後は夢と現実とは大違い、滑つてはころび滑つてはころびならよい方で、立つてはころび歩いてはころぶ、滑つては木の切株につまずく、スキーにとつても僕にとつてもさんざんであつた。満身創い、痛む体をひきづつて山一切に宿を変えた。この時この家の人達に歓待されたことが一層僕

のスキー熱をあおることになつた。
近所の腕白共とコタツの中でしたトランプ、オヤジさんとかわした盃・真赤な自家製のブドウ酒、今も目の前に鮮かに浮んでくる。その時以来スキーを思うと、暖かいいろり、こたつ、笑つているおばさんの顔が目の前に浮び、むしように雪の上に立ちたくなる。白銀の山に囲まれた青い空、冷たい雪の感触……。

スキーをする人は誰もが処女雪の大斜面をけつてさつそうと滑るクリスチャニア・ウエーデルンを夢に描くだろう。僕も例にもれずかつこよく滑つてやろうとまずスキー術の解説書を買い入れシーズン前の練習とやらで畳の上で跳んだりころがつたり、映画会があれば今日はこと、次はあちらとかゝさず通つたものである。だけど理論を言葉の上で理解し、頭の中で自分を幾らでも名人にすることが出来てもいざ実行するとなると話は別で相も変らずよちよち歩きである。これではならじ、今度は練習量に物を言わせてやれと大乗寺山通いが始まつた。最初の頃は鈴木兵一さん、西尾さんに従い、昨年あたりは高田さん、下出さんにつれていつてもらつてほとんど日曜毎に滑つたし、天気がよければ午後は授業をサボつて行くといつた具合であつた。僕の下宿に来てスキーがずらりと並んでいるのをみれば分るように、仲間はいるし、下宿のおばさんも理解があつて、スキーに行くといえば弁当まで作つてくれたものである。それにも拘らず足前の方は相変らず上達しない。けれど下手は下手なりに楽しいもので、今のはあそこが悪い、こゝがよかつたと分つたようなことを言い合う。全く楽しい。終えて帰りが又々楽しみである。冷えた体をストーブで暖めながら食べるあのぜんざいの美味さ、みちたりた気持、これだけでもスキーに行くかちはあると思う。スキーは楽しというわけである。

クラブに入つて三年四年となると大きな山行というのはだんだんおつくうになつてきて、何となく高原歩きとかスキー等に引かれるようになつた。トレーニング不足で体がついて行けないという理由もあるかもしれない。しかし何となく違うような気がする。

今年ももう初滑りの声が聞かれた。周囲の山も白銀につつまれ、雪ももうすぐだ。スキーを出し、エッジをみがく、靴に油をつける、ストックの皮をしめる、トレーニングもそろそろ始めなくちゃ。準備完了、あとは雪の降るのを待つばかりである。

差し入れ強盗始末記

教育 学部　三年　紺清敬一

あれから早や一年が夢の如く過ぎ去つてしまつた。本当に夢の如くという形容が今の僕には一番ぴつたりしている様に思われる。人間は年と共に変るが、少くとも僕の感知する限りに於ては、山は変わらない。そして山ヤは其処に何かを求めつゝ黙々と登つていく。昨今、又アルピニズム論争が世論を騒がせている様に思うが、そんな事は議論の好きな連中にやらせておけばいい。僕にとつてはそういうことはどうでもいゝことである。僕には山はスポーツでも趣味でも言い表わされない。何か、こう、はつきりとは、わからないが、今の僕にとつて、一番ぴつたりしたものが、山のようである。

ワンゲルが冬山をやるという事に対しては、一つの問題があることはあるだろう。僕はかつては、岩登りに強い憧憬を抱いていた時期も有つた。だが所詮、俺は岩に縁がなかつたんだと諦め、たゞ黙々と山を歩く事に専念した。しかし自分が徐々に尖鋭になつていくことは否定出来なかつた。夏山を歩くことで満足出来なくり、情熱期の山への衝動が徐々につのつていつた。夏山もいい味を持つている事は否めない。残雪とお花畑の取り合わせなど、一種独特のロマンテシズムをかもし出して胸に迫つて来る。しかし一度、雪山に足を踏み入れると、もう其処からは仲々這い出せず、それに憑かれてしまう。まるで、そうなる事が運命であるかの如く……。

今回の山行に参加した六人が全て僕の様な視点から参加したかどうかは知らないが、冬山をやろうと誰かゞ言い出したら、ヤロー、ヤローという野郎が直ぐさま集まつたことを見ても、同じ穴のむじなであることだけは間違いないだろう。かくしてラッシュ・タクティックとボーラー・システムを混ぜ合わせた様な、我々独自のシステムによる、冬山トレーニングを兼ねた大門山アタックが敢行される運びとなつたのである。今は我々が恵まれた国立大学々生である事も忘れ、貴重な？授業を何の未練もなく捨て、我々は若き日のエネルギーを存分に発散させるべく大内山へと向つたのである。

以下山日記をひもときながら、楽しかつた一言に尽き

る五日間を回想して見る事にする。

十二月十二日　雪のちくもり

八〇〇全員部室に来る。初雪が舞う。九、四〇　駅前池田がもし漕難した場合、後でワイワイ言われると俺達の名が泣くといつて、テルモスを買つて来たが、よく調べて見ると不良品であつた。バス時間が無いのでそのまま出発する。こんなテルモスを買うようになつちや哲学者もオシマイだ。一〇、四五　芝原発　学校の庭に可愛いゝ犬が居たので撫でると、尻尾を振りながらついて来る。エス、ジョン、タロー、ポチなどいろんな名を呼んでみたが、シロと言つたら、こつちを向いたので、以後シロと呼ぶ事にする。十六、三〇　下小屋から一時間程いつた所からラッセル開始である。六十センチ程のラッセルであるが相当キツイ。十七、二三　不動滝取付に設営。夕食の豚汁、非常に旨し。

十二月十三日　晴

三、五五　起床　合津はシロがテントの中で暴れた為眠不足。朝食の後、いよいよ長いアプローチから開放され、アタック開始である。ブナオ峠の尾根はロスが多い為、バリエーション・ルートをとることにする。壊れた橋をとても女の子には見せられない様な無様な格好で渡り、いよいよ尾根に取付く。八、三〇　急登にかゝり直登不能となる。しかし巻こうにも格好な所が見当らないので止むなくザイルを使用する事にする。合津が苦心してこの急斜面を登る。下ではブーリンの結び方で議論百出。上では合津が早く来いと奴鳴つている。結局小出式ブーリンで合津にジッヘルされて登る。急斜面の上、合津が雪を落としていつたので笹が顔を出し滑つて実に登りにくい。雪がミトンを容赦なく濡らし手が冷たいというより痛い。四〇米程を急登するのに二時間を要してしまう。尾根へ出たところで昼食をとる。雪化粧の医王山が美しい。通常ならこゝで、テルモスの暖いお茶が喉を潤し我々にこの上ない喜びを与えてくれるとしるところだが、池田が変な奴を買つて来て、それを俺が岩に当てて増々変にした為、もうそれはテルモスの用を為さず、その口からは氷が入つているのではないかと思われる程の冷たいお茶が出て来るのみである。後輩諸君よ、俺達の切実な経験だからよく聞いて異れ給え。冬山へ行く時はがんじようなテルモスを買わないと駄目だぞ！

昼食後、ワッパを履いても、なお膝まで来る雪に悩まされながらたゞ黙々と登る。十四、〇〇　適当なC_2設営地を見つけ設営する。太陽は出ているが非常に寒く、外

に有るものは何んでもバリバリに凍る。十七、〇〇夕食 二〇、〇〇 就寝

十二月十四日 晴のちくもりのち雨

二、五五 起床 四、三〇 出発 冴えた残月の下、無踏破の雪上を黙々と行く。五、〇〇尾根に出る。この時俯瞰した景色は忘れる事が出来ない。茜色の東の空の下に北アの長域が遥かに望まれ、富山の灯が下界へのノスタルジアを誘う。柔らかい雪ひだに粧われた嶺が山肌手が届く様である。そして残日はその光を一瞬でも絶やすのが惜しいかの如くキラキラと光つている。赤い大きな流れ星が長く尾を引いてはかなく消え去つた。

最後の急登である。俺の心が完全に無になる時間がある。其処には苦しみがあるだけで意識された自己の存在は消えてしまつている。この時が俺にとつては一番幸福な、そして人生に於て一番充実したときであるように思われる。定かではないが、俺の心はこの一瞬の為に山へと惹かれるのかも知れない。

七、三四 大門山山頂。シロは恐らく積雪期大内山の初登攀大であろう。そういう意味では歴史的一瞬である。

八、〇五 尾根の取つつきから直ぐに右へ切り込んで谷へ入り新雪をけたてゝ駆け下りる。九、一八(2着 一休止して〇時まで下りる。五、四五 夕食 冬山のアルバイトは相当にきついので食べる事のみが唯一の楽しみである。(これは冬山に限つた事では無いが) 俺と池田が食糧係だから、およそ豪な献立でしかなかつた筈だが、みんな胃袋がどうかしているのではないかと思う程、良く食つた。夕食後はアタックの緊張感から解放されたのでブリッジ開帳となり、実に明朝三時迄、六十回戦を消化した。

シュラフに潜る前に池田と今井が裸足のキジ打ちを敢行する。勇んで帰つて来たのは良かつたが、奴ら、キジ穴にランプと山日記を落として来た事に気付く。迷わずキジ穴へ。穴を堀り返して取り出す時は、本当に怪しかつたことだろうと思う。「怪しかつたなあー あの時は」と言う彼等の声が聞えてきたそうである。二人共どんな顔をして堀り返えしているのか見に行くべきだつた。

不覚!

十二月十五日 しぐれ

十一、〇〇 起床 昨夜 温暖前線が南を通過した際の雨で、ウインパーの中は洪水の様相を呈し、水の中にシュラフが浮いているといつた感である。足を動かすとシュラフがボチャボチャと音を立てる。沈澱するにも居

心地は最低である。懐しのメロディを口ずさんだり映画の話や女性論で一日を明かす事にする。

十二月十六日　晴

長いアプローチを足音軽く一路芝原へ向けて出発する。横谷の部落をすぎた所で誰かゞ「口紅をつけたネエちゃんが見たい」と言い出す。そういえば我々男性が愛し、そして愛されるべき女性という動物には五日間全くお目にかゝつていなかつたのである。芝原でバスを待つ間に誰かゞ「おい　女だぞ！」とまるで生まれて初めて女の子を見た様な声を上げた。振り返ると、助手席で彼氏とおぼしき男性に寄り添つた一人の美しき女性の乗つた自動車が走り抜けた。「うん、女だな。それにしてもチキショー」と誰かゞ呟いた。「イイカラ　イイカラ」……

こうして我々の五日間の山行は終つた。出発の際、ひどい奴が居て、親愛なる部員諸氏諸嬢より差入れを強要した為、帰つた際、差入れ強盗なる物騒な名前をいたゞいた事は甚だ心外であつた。

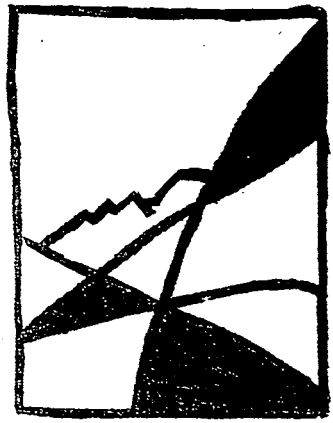
好天に恵まれ過ぎたきらいがあつて、これで十分のトレーニングとは言えなかつたかも知れないが二年生の二年生たるところを遺憾なく発揮した山行であつた。そしてその　話の一つ一つは我々の胸に大学生活の楽しい思い出として残ることになるだろう。

岳人のうた

一　星が降るあのコル　グリセードで
あの人は来るかしら　花をくわえて
アルプスの恋歌　心ときめくよ
懐しの岳人　優しかの君

二　白樺にもたれるは　いとし乙女が
黒百合の花を　胸にいだいて
アルプスの黒百合　心ときめくよ
懐しの岳人　優しかの君

春



『冬の詩』

理学部　四年　河合英明

冬が来る
冷酷な冬がやつて来る

北風が身体を吹きぬける
涙と偽善を吹きとばせ
霊が肌につきさゝる
醜い心を洗い去れ

冬が来る
澄んだ冬がやつて来る

純白の雪が世界をうめつくす
無限の静寂とその微かなぬくもりで
俺の魂をやさしく包んでくれ
デモンが姿をかくすまで

冬が来る
厳しい冬がやつて来る

春の木曾駒ケ岳

小松武文

春山、それは厳しく冷く荒れ狂つた冬山に終止符を打ち、ひよつこりとすこしばかりの笑顔を見せ初めたばかりの自然の姿であるかもしれない。しかしそこにはまだ依然として猛威の痕跡を残し、必ずしも俺らを温いまなざしで仰えてくれる山ではないであろう。ワンゲルの行動範囲にしても、春山というと疑い深い目でみつめる者が少なからずある。現に今年の春休みも、準合宿だ、パーワンにすべきだ。意見合まみえるうちに、高三郎行きが決定。底付テントは冬山用に直し、準備も着々と進んでいたのに、今冬の例年まれにみる豪雪のため、ついに中止となつてしまつた。それじやどこかへ行こうということで信州伊那の谷で産声あげた久島さんの計画は、比較的積雪量の少い中央アルプスであつた。

金沢駅を後にしたのは、三月二十九日午後九時四十分

隊員は、久島（伊那市より同行す）稲葉、大橋功、合津、池田、小生の六名のメンバー。延々十五時間ばかりの汽車の旅。富山、岐阜、豊橋を通つて、飯田線の伊那市の駅に着いたのは翌日正午はもう過ぎていた。北アルプスと違つて中央アルプスは前山を持たず、鉄道線路から直接山にとりかかる感じ。お陰で麓の交通はわりと発達していない。我々も駅前よりもう、久しぶり肩にぐいとくい込むザックを背い上げた。頭の見えない六つのザックは市街地を通りぬけ、伊那の谷をひたすら動いて行つた。後を振りかえる。次才に小さくなつていく街、ザアザア流れる沢の音、小鳥のさえずり合う声、そして一人の農夫が話しかけてきた。何を見、何を考えたところで、のどかで平和な山麓の生活が感じられてならなかつた。幅の広いタンタンたるトラック道であるが、小黒川発電所もすぎ、今日の設営場所、かつらこぼキャンプ場についたのはもう夕方であつたろう。

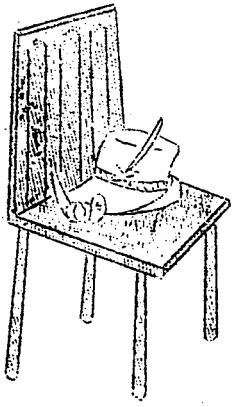
翌朝三十一日、食事、撤収、パツキングあわただしい朝の一時はすぎた。久島さんをトツプに歩き出す。雪どけの、赤茶い泥肌が顔を出し、木の葉のへばりついたどす汚い残雪の上を、足をすべらしながら歩くのは、全く不愉快なものである。小さなピークを越し、蓋根道のみえる展望のよいところへ出て、先ほどの不愉快な気分が

ふつ飛べば、今度はいよいよカンジキをはいてのラッセルが始まつた。純白のヴエールを覆つた山並を眺めながら大樺小屋までは、案外あつけなかつた。この調子なら伊那小屋まで大丈夫と、全員馬力をかけて前進。しかし、この附近からの積雪道のものすごいこと。木陰の多い樹林帯の中を腰までもぐつてのラッセルが続いた。一歩ふみ誤まるとそれこそ大変、胸までもぐつて落し穴に落とされたようである。まるでさかさまになつた亀のようにもがく有様。急勾配な崖根すじの一本道、白樺の樹木を春の陽を浴びているとはいえ、肌着まで奪われたような寒さを感じさせる。交代でトップを切つて進むうち、もうそろそろ薄暗くなつてきた。時計は四時を回つていたかもしれない、もう四月といつても日の暮れるのはまだまだ早い。稜線への最後の登り、一気に登り切る。茶臼山、行者岩からの宮ノ越道と一致して視界はひらけた。

西の空はもう夕日に輝き、木曽の谷の上にぽつかりと浮んだ片雲をたそがれ色に染めている。何となくロマンチックな感傷がわいてくる。しかしこの稜線上に立つた一瞬から、雪粉を強烈な勢いで巻き上げ、パンチをくらわすかのように、ほほとなく、顔となく、体中に体当りしてくるあの強烈な突風の前に立ちすくまねばならなかつた。この氷るような冷い風に吹かれ、もう大分疲れ切つた体には、西の空を見上げたときの感傷も、いつ[illegible]間にか、幻想の中に消えていつた。これからのはつきりと覚えていないが一時間か二時間の行動は、大自然が何の手心も加えることのない強烈な力とさし向つて必死に前進した。露出した岩があるかと思えば、雪の吹きだまりがあり、ハイマツが顔を出している。踏み落した石はカラカラ音を立ててそぎ落ちた谷へと落ちていく。カンジキのままでは危つかしくて、とても歩けない。はずそうと岩かげに少しでも風をよけてすわり込む。カチカチに氷ついたカンジキは、どうしてもはずれるはずがない。仕方なく、思い通りには進ませてくれない風に、一生懸命抵抗しながら、歩き出す。「小屋だ」かすかに一足先についた、合津、福島両氏の呼び声を耳にする。ほんとうに暗くなつた斜面のすぐ真下にみえる小屋に転り込んだ。小屋といつても、すき間や、破れた窓から吹き込んだ雪にうずもれているのだから、小屋は単なる風よけにすぎなかつた。小屋の中を整地、ウインパーを張る。十二時間ばかりの今日の行動、暑い紅茶でようやく一息つく。外の風はまだおさまらぬ。でも星だけは、清れた夏の夜北アルプスで眺めたと同じように輝いている。早目

にシュラフにもぐり込む。

翌朝は、まぶしい太陽の輝きには目をふさぎたくなる朝であつた。しかし依然昨夜来の強い寒風に、泥酔者のように足をふらつかせながら、ピッケル片手に頂上アタック。細い稜線を登つたり、降りたり、時たま、グリセードを楽しみながらついに目的地駒ケ岳頂上である。突きさすようなかつこうで宝剣がそびえ、中央アルプスの他の山々も続いている。南アも見える。十二月大門山の頂上から、朝日を浴びて、だいだい色に輝いていた白山とは又別の感激であつた。少々山ぼけしている道中へ、池田の新し出した「富士山の高さは……」全員真剣に考え出したが、何と今日は四月一日とは、まんまとしてやられたものだ。天候に恵まれたか、強い風に悩まされ、でも、新しい雪山の魅力に感激し、下山の途についた。



若きワンデラの集いに参加して

沢田孝雄

＝関西合ワン＝

岡山県津山市泉源高原において、全日本ワンダーフォゲル連盟関西支部主催の関西合ワンが開かれたのは、四月も半ば、十八日からの三日間であつた。我校は、未加盟故に招待校として参加した。八月の北陸合ワンの視察を兼ねて、その委員の千葉と、私そして宮本の三人である。京都駅の一番お粗末なホームから、一番カツコの悪い汽車に乗つて、未だネオンの光もまばゆい京都の町を後にしたのは、夜の十時ごろ。列車の中は、各地から集まつたワンダラーで一杯である。皆んなさすが、旅なれた者らしく思い思いに席を占めている。ひつそりと寝しずまつた暗闇の山陰線を走り、上井駅に着いたのは、午前四時ごろ。未だひつそりと静まりかえつている待合室も、我々ワンダラーの登場で急に、にぎやかになつた。各校揃いの山シャツが、あちこちにかたまり談笑している。

青あり、赤あり、黒あり、縞模様ありで、まるで山シャツの展示会のごとく色とりどりだ。ウチのクラブは、ユニフォームには、余り関心を示さぬ。各自様々なのを、着ている。それはそれなりに良いと、思うのだが、揃いのユニフォームの、パーテイを見ると、そこに、規律と団結、そして、自分のサークルに対する誇りがある様な気がして、うらやましく思う。概して私立大や部会の大学は、パリット揃え、国立大や地方の大学は、バラバラだ。八時ごろ数台のバスで羽出に向う。まるで修学旅行の気分で、途中の、ウラン鉱で有名な人形峠や、映画「秋津温泉」で有名な、奥津温泉などを、物めづらしく眺める。羽出からは、キャンプサイドまで、二時間ぐらい歩く。大きなノボリを先頭に、総勢四五〇人の大行進である。大きなザックに大きな靴の遠々たる行進は、なんとも言いようのない奇怪な感じだ。ペースは各校まかせなのでその歩きぶりは、各校の性格が出ていて、おもしろい。山岳部まがいの服装で、ボカボカ歩くK私立大、赤いシャツに、赤い帽の可れんな姿の京都のS女子大、ボロのごとき山シャツに、地下足袋姿のS大など、互いに意識し合つてハッスルしている。僕ら三人、少人数故のんびりと、北陸とは趣の変つた、明るく晴れわたつた青い空、なだらかな新緑の山々を、ながめながらの歩きである。キャンプサイドは、丘のごとくなだらかな山間に、広がつた牧場かと思われる様な、広々としたところで、一面に芝生が生い繁り、清らかな冷い水が流れている。とつてもスバラシイところである。四五〇人の大人数もさして多くとは、思われぬくらいだ。芝生に寝ころぶと、眠くなる様なのどかさだ。大きな円陣をつくつての開会式での各校のあいさつは、又印象的で、「オース」とばかりに男性的な勇しいのもあれば、「よろしゆお願いします」と、これは又女性的な京都弁での挨拶など、若きワンデラーの集いらしい明るいなごやかなものであつた。連絡や進行などは、スピーカーや、トランシーバを使つての機械化ぶりである。班に分れて、設営、夕食の準備にかかるころは、皆んなすつかり溶け合つて、ワンデラーらしい雰囲気が出て来た。例の歌で始つた食事では、皆んなよく食べるのには、驚かされた。京大のS君なんか、他校に食べまけては、学校の名誉にかかわるとばかり、バンドが足りなくなるくらいつめこむのである。夜は、テント内ミーテング、クラブの活動や、悩み迷いなどについて語り合う。その中でも名大のH君は、さかんに、ワンダーフォーゲルの文化面や社会性を強調

していた。又、アメリカではやつている、一昼夜歩きつづける歩こう会をやつているのもいた。京大なんかは、釣りざおに、毒石や毒板をもつて野山にゆき、気にいつた場所で、幾日も毒をうつて暮すんだそうだ。それからトーレニングについては、他校特に私立に多いのだが、週二日ほど、定期的にやつている学校が多かつた。二日目は、周辺のワンデリング、若草山の様なだらかな草の山を、遠くに大山の山々を眺めながらの、そ　決な、ピクニックの様な気分のワンデリングである。歌をうたつたり談笑しながら、キャンプにもどつたのである。その夜は、僕らが一番、注目していたファイアーである。山の上に立てられた、タイマツの合図とともに、〃燃えろ燃えろ〃の大合唱にあわせて、ヤグラ状に組まれたマキに点火された。ゲーム、歌、踊り、寸劇など楽しい雰囲気の中で次々に進まれた。

各校のスタンツの出し物は、ユーモアたつぷりの、底抜けに、明るく、楽しいものだつた。民謡などの紹介も、ユカタを着ての本格的なものだ。ウチのクラブでやる、スタンツや、ミーテングなどとは、月とスツポンの違いだ。なぜだろうか。純朴な山男で、哲学的な、落ちついた人々が多いからかもしれぬが、私が思うに、皆んな、スタンツとか、ミーテングとか云うものを、余りにも、深刻に考えすぎると思う。深刻そうな顔をして考えこみまるで、試験問題でも、といている様な雰囲気では、おもしろいスタンツは、生まれつこないと思う。ユーモアラスな、気楽な談笑の中にこそ、おもしろいスタンツは生まれると思う。今後も、スタンツや、ミーテングをやるんなら、まず心がまえから一考すべき点があると思う。まだまだ続けたい気持が強い中に〃ホタルの光〃の歌によつてファイヤは終り、三日間の合ワンを終つたのである。とかく合ワンを、気楽いしがちな、ウチのクラブではあるが、視野を広くし、幅広い活動を行うためにも、この様な対外的な催しには、積極的に参加すべきだと思つたのである。

毒草

高山にありふれた草で強い毒性を持つものがある。代表的なものはホソバノトリカブト。茎は細く高さ五十センチから一メートル、葉はほぼ五角形で三つにわかれ、先はとがつている。エボシのような青紫の花。根の汁はアイヌが毒矢に使つたという程の強毒。また花の美しいミヤマキンポウゲ、コバイケイソウも毒草とされている。

新入生歓迎登山のころ

高見　よ志子

医王山にて

秋の夜長に、日記を読み返していましたら、ワンゲル入部の当時のことがいろいろ書いてありました。

「四月十九日、お童に中山さんと真剣に話し合つて、ワンゲルに入らずに、おとなしく書道をやろうかと思つたが、キャラバンシューズも買つてしまつたことだし、また歓迎会に行く気にもなつてみる。生来決断力のない方だが、最近どうもぐらぐら心が変わつて困る。

新入生歓迎登山の前日、私は真新しい青のキャラバンシューズを抱えて、行こうかそれともシューズをあつさり返してしまつてやめにしようかとさんざん迷つていました。夜雪のあとで山は寒いたろうし、はじめ野歩きをするクラブかと思つて入つたら主に山ばかりだというし、ちよつと早まつたかなと思いました。でも一応歓迎会に行つてみて、それから決定することにしました。

「四月二十日、新入生歓迎登山、最初から、雪の残る医王山とくるから、あとは推して知るべしであろう。小立野でピッケルをもつた男ましい人や、尻に毛皮をぶらさげた奇妙なスタイルの先輩と一しよになつて、見上のキャンプ地まで歩いた。そこでは先輩達が夕食をこしらえて待つていてくれた。ところどころ木の葉なんかが入り混つている豚汁をすすつて空腹をみたした。食器の下洗におこげがあつて食べられない。でもおいしかつた

夜、キャンプファイヤーを囲んで、自己紹介のあと、各班ごとにスタンツ。私達の一班は動物園と称して、飼育係の亀田さんから、ノミやミミズ、鬼、羊、河童など怪しげな動物が鳴きながら、それぞれ注待の芸をもらうことにした。私の羊がもらつた芸は、きじ氏ということだつた。雰囲気からあまり上品なものではないことがわかつたが、何のことかはつきりしない。大笑いのうちに各班のスタンツが終るとあつちからこつちから山の気がわきあがつた。ファイヤーを囲んで円陣をつくつている人達の顔が赤くちらちら浮きあがる。青、黄白時代に思つ

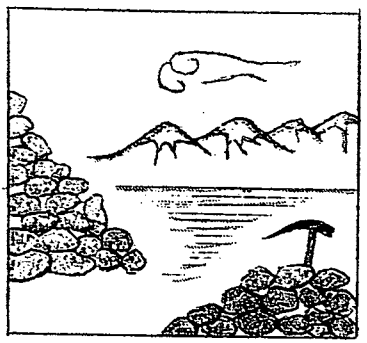
たように楽しげに大声をはりあげて歌つている。私の中になにかしらなつかしいものが湧きおこつた。」

歓迎会のキャンプファイヤーはほんとに印象深くて、今でもはつきり思い出します。又この日、先輩部員が口にすることばで珍しいものがたくさんありましたが、今では私もだんだんその意味がわかつてきました。スタンツの時私がたべさせられた紙と同様のライスものを、パーワンにしろ合宿にしろ、せつせと作つてきているのですから。

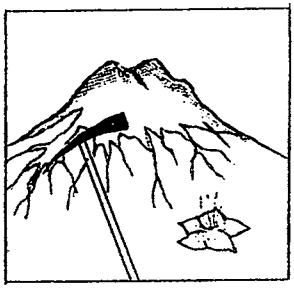
「四月二十一日　五時半起床。冷い。山がうす橙色の空を背景に浮かびあがつている。六時から三蛇へ向つて歩き出した。覗きで雪渓すべりを楽しんだ。九時半にとんび岩に登る。ずい分傾斜のある岩を一歩一歩あがる。踏み誤まつたらおそらくあの世行きであろう。私はやもりみたいにへばりつく。母のことをちらと思い浮かべる。はいつくばつて、とんびの嘴のさきにあがる。こわごわ下をのぞく。どれだけあるかわからない。崖の下に残雪を集めたようなこぶしの花がぽつかり咲いていた。白元に向かつてまた歩く。ざらめのような雪の上をさくさく歩く。時々雪を食べては先輩に叱られた。

中山さんとキャラバンシューズのままでドタドタ帰つてきた。くる時は大きなくつで恥しくて小立野でわざわざはきかえたものだが、今はちつとも気にならない。おまけにそのへんじゆう泥んこである。顔も少し焼けて白が白くなつてみえる。」

歓迎登山から半年あまりたちました。キャラバンシューズをはくのが恥しかつた私も、パーワンや合宿についていつて自然の大きさ、美しさに今さらながら驚き、献立をたてて、ものをコトコト作るのが好きになりました。北アルプスの峰々や、梓川のほとりの白樺、それから歓迎登山の時みた真白なコブシの花などを思い出しています。



医王山



宮腰　由美子

四月二十日（土）晴　医王山登山の日だと思うと午前中の講義ももどかしく思われた。午後、沢田さんと二人ハイキング気分でサブザックに風呂敷包みという姿で小立野に向う。ワンゲルの部員と思われる人達が沢山いて、ほとんど盛然とした登山向きの服装をしており、軽卒な気持で来た自分達を恥ずかしく思つた。早速、ザックを借りて詰めかえする。これから遠々三時間も歩き続けるのかと思うと急に腓腹筋、ひらめ筋が異常をきたした如く変になつた。どんなに疲労しようかと心配しながらも約三時間で見上登山口についた。脚も以外と強くて、自信を得た様な気がした。夕食を摂つた後、キャンプファイヤーを囲んで自己紹介や他称紹介、スタンツ等で賑わい十一時頃、これも借物のシュラフで生まれて初めて眠ることが出来、いつもテントの中では寒い思いをするのに暖かく熟睡できた。

四月二十一日（日）晴　五時半に起床、すぐ準備して出発だつた。ラジオ体操をすませ、本格的な山登りが始まつた。あたりの山々が朝もやでぼーと霞んで見え、木々がみずみずしい若葉をつけて、冬が長かつた山々にも漸く春が訪れかけていた。あちこちに咲くこぶしの花も又格別美しく見える。そんな中を残雪を踏んで一列にずつと長く続く姿はまるで絵のように美しかつた。本当に来て良かつたと思つた。所々、木の枝々が狭い道を覆つたり、残雪のためか折れた木も多く、私達の歩行訪問となつた。木々をくぐりぬけ、雪道を力強く踏んで一歩ずつ登るのも実にすばらしいと思つた。しかしこれはほんの一時期のみですぐにそんな雪道や木々をくぐりぬけることは、私にとつて非常なアルバイトを必要とした。

どの位歩いたろうか、相当長時間黙々と歩き続けたように思つた頃、雪渓にさしかかつた。皆、急に元気をとり戻した様にグリセイドしてゆく。スキーにでも乗つた如く上手に滑り降りてゆく。上手な人は二度も三度も往復している。又ある人はころころとあたかも薄がころがる様にとめどもなく転がり落ち下方で多人数がかりで、止めてもらつている人もある。四、五人、十人、二十人

……降りてしまい最後に私達女性三人となつた。降りようと試みるが下方をみるとあまりの勾配に戦慄を覚える。借りた靴皮を裏にしたり、表にしたり何度もかえてみるかどうもうまくゆかない。だんだん胸が高まり、心臓亢進を覚えて仕方がない。三人一緒に降りることにしたが、なかなか決断できず、「さあ降りよう」といいながらも誰も滑らない。下からは「早く降りてこい！」との声がかかる。なお一層ドキドキしてくる。

念仏を唱えるようにして一、二、三、で滑り降りた。非常なスピードを出してちよつとしたスリルを感ずる。しかし上体は怖さのためか下体との均衡がとれなくなり中途まできて完全に倒れてしまつた。そのままころころ……立上ろうとするがなかなか起きれずとうとう下で二、三人がかりでとめてもらつた。あまりの恥ずかしさのためお礼を言うのも忘れていた。ここで改めてお礼させていただきます。それから又、皆、何にもなかつた様に黙々と木々を押し分け、雪道を登り続けた。九時近く三蛇が滝に着いた。ここで朝食を済つた後、今度は鷲岩の登りだつた。ここは又難関の一つだつた。一班が前進後、五分して次の班が登るのだ。私達は三番目に登つた。最初の人はもう登りかけていた。必死で岩にしがみつくように這いあがつてゆくという感じがした。

そうこうしているうちにもう自分達の番だつた。「連をつけてはいけないぞ！身体をもつと右から離すのだ！余所見するんじやない！」との注意を上下方から聞いて岩に手をやる。崩れまいかとあらぬ心配が先立つ。しかし岩は砕けるものなら砕いてみよと言わんばかりにがんとしていた。ただ手足の置場を何処にしたら安全か、全部員に迷惑をかけないように足を踏みはずしてはならないと考えるのが精一杯だつた。約十五分も、いや二十分程も続いたろうかやつとのことで鷲岩の頂上についた。

ここでの空気は格別美味しかつた。しかしそこはまだ両方とも絶壁だつた。ひどく緊張が要るものだつた。

その後、又雪と木の間を黙々と歩き続けた。最初にあれほどすばらしいと思つた雪も今となつては苦痛の一つであつた。十一時半頃、頂上に着いた。非常に重い荷物が肩からおろされた様な気がしてほつとした。周囲の山々の残雪の白さが陽に照らされて一層美しく輝いていた。本当に登つて良かつたと改めて感じた。雪渓と岩登りが私にとつて忘れることの出来ない体験であつた。

帰路のコースは以外とスムースに終り、心身ともに爽れていた身体も何となく快いものであつた。

一昨年のベルクハイムを部室で読んだ時ほとんどが山についての記事ばかりであつた。当り前だと思う。でも私にはそれを描く何らの能力をも持ち合わせていない。又余りにもたし又今まものにしてで述べよう

随筆

山は私にとつて偉大過ぎで行つた山を自分だけの置きたいのであえてこことは思わない。ただ漠然と私の思つている事を記そうと思う。

まず大学に入学して最初に考えた事

自分はこの広い無限の空間の一体どこに居るのか。

そして毎日何を考え、行つているか……である。

同時に何かやりたい私だけのワクの中にちよつぴり閉じ込もりたいと考え校内を歩いていた時「ワンゲル」のお兄様、お姉様方の健康そうな顔に惹せられました。高校時代及人達とよく山野を放浪しましたので足の方には少し自信がありましたので、「自然の中に入り失われつつある人間性を取り戻す」のがモットウであるらしきこのクラブに籍を置いたわけです。足の方は全く裏切られた感じです。ワンゲルの人達の強い足にはただぼんやり見

自然と共に

石橋日　淑子

とれるだけでした。「自然」私はこの言葉にすごく魅力を感じていました。同時にこれこそ自分を知り、イジメツケル最良の手段だと思つたのです。私は四方を山と海で囲まれた私にとつて最高の自然の中で生まれかつ育つたのです。でもそこにはきびしさというか私をイジメツケルものがなかつたのです。あつたとしても半分又はそれより少ししか私はそれを感じなくてよかつたのです。なぜなら両親が私と共に悲しみ苦しさに耐へてくれたからです。でも金沢へ来て下宿生活を送つている内に自分の弱点等をいやというほど思い知らされました。叔子は弱い弱い人間なんだと感じました。それは山へ行つても同様でした。常に最初にバテルのが私でした。でも一度山へ足を踏み入れたらもう自由な世界です。この山をどれだけ深く愛そうが又憎悪しようが誰も私を非難する権利を持つていません。又何を考えながら歩いていても何の障害にもぶつからずそのまま考えつづける事が出来ます。又頂上で休んでいる時突然山がぽつかり口を開いてみんな吸い込まれていつたらおもしろいな……とかなんとか想像をしてもそれをとがめる誰も居ないしとがめられるはずもないと私は思う。だからバテても誰

の援助も受けられないのが当然なのかもわからない……？

自然は容赦なく私につらく、きびしくあたります。私はむしろそれを望んだのですが意志薄弱な私にとつて余りにも自然と私との距離が大きすぎたように感じるのみです。だからもうそれにハムカウ力を持つていない事を知らされた現在ただ自然に私すべてを託す事に努力しようと思つています。それは一層困難な事かもわかりません。しかしもうこれ以上自分の無力を知るのはイヤです。

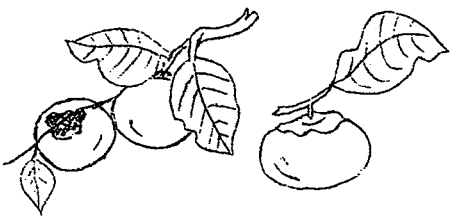
自分に忠実であると共に自然にも忠実に生きようと思つています。

でも気になる事は他の人に非常に御迷惑をおかけする事です。貳面でこれまでの登山で非常にお世話になつた方々にお詫び致します。

無題

藤井信靖

晩秋の枯れ葉が　一葉一葉帝たい秋風に
吹き落ちていく様に
僕の心の光も　一つ一つ消えてゆく
僕のいとしき人も　一人一人去つてゆく
山に向う僕の無事を　祈つてくれてた女も
風と共に消えていつた
晩秋　全てが去つてゆく　人も夢も
晩秋　晩秋　晩秋



ふるさとの山白山

青山修司

白山は石川と岐阜の県境にある。それなのに福井の人にとつて白山は季節と共に何かを与えてくれる大切な山である。なぜなら白山は福井の方から実によく見える。身近に感ずることでは外一から知れない。今でこそ山に行く人は非常に多くなつたが僕が中学生のころには同級生で白山へ登つたという人は聞かなかつた。もちろん僕もそのころは毎年海岸でキャンプをはり或に過ごされたことを思い出すだけで山に登つたという記憶はない。今新しく建つた中学校の屋上からは一面に紅葉した山々の上にうつすらと雪化粧した白山が見えるだろう。高校の運動場からも白山は正面に見えた。遠くから見る白山はやはりその名のごとく白く見える時が一番きれいだ。特に若葉のころ白山を除くすべての山々が一面若葉に覆われた中であくまでも白く輝いている白山。実に高い、だけど近い。白山が良く見える日は体操をするにも気持が良かつた。それでも今日は昨日より白山がきれいに見えるなと思われた次の日には決まつて雨がふつた。このことについては僕のおじいさんに聞いてなるほどそうだと思つたことである。又白山神社というのは僕の町にも非常に多い。

このようにいろいろな点で白山は生活に結びついているのがよくわかる。今の人達はただ登るというだけが頭にあるようだが白山は、そのまわりに住む人々の中に深く根を降ろしている。僕の家は中学校から六キロ谷間の小さな部落である。ここから白山を見ることは出来ないが三〇分ほど山に登れば白山は良く見える。山へ遊びに行つた時も仕事のために山に登つた時も白山は候達を向えてくれるように雄大な姿をみせてくれた。一時間近く登るとそこは戦国末期福井の中心として栄えた朝倉氏の城のおもかげが少しばかりのぞかれるところに出る。一の丸二の丸三の丸と小さな山のふくらみが連なり五〇〇メートルほどの高上しかないのになかなかはすごく良いところである。三の峰あたりから四塚まで白山連峰がずらりと眺められ、ここは僕の白山を眺めるのに好きな場所の一つである。山城のほぼ最後のものであるが山を愛する人にとつて山城も又良いものであつただろう。その付近はほぼ一つの大きな峰になつているのだがそのすぐ下

にすごく水量の豊富な泉がありその水はそのころ以来一度もかれたことがないとか。近くに仕事をしに来た時はいつもそこまで水を汲みに行つたものである。又そこにある地蔵さんをいじると雨が降るという伝説がありこのことについて変な偶然に出合つたこともある。そこからさらに奥へ入つて行くと七五〇米ぐらいのその付近での最高峰に達する。去年行つてみて自分の近くにこんなに良いところがあつたのかと思つたものである。位置的には医王山と良く似たところにあり、山の感じは全然違う。そこには佐々木次郎に出てくる一乗滝を始め小さな滝が無数にありそれ故に道はけわしく医王山のように人が入りにくかつたのかも知れない。道がよく整備されたなら最近のブームに乗つてきつと人がくるようになるだろうと思つている。そういえば家へ帰ると良くハイキング姿の人達を見かけるようになつた。ついこの間は僕が山の上で仕事をしていた時すぐ近くを通りすぎて行つた。ふるさとの山にやつて来てくれる、それは絶対に悪い感じではない。しかしうらめしそうに眺めているのいはいい気持ではなかつた。とにかく白山は大好きな山だ。小さい時から確かに白山は富士よりも身近なところにあつた。今年は、夏も、秋もついに白山に行かずに終り、こんなことを書きながら無性に白山に登りたくなつてくる。

春のパーワン三題

〃妙高〃雨・後・晴

花木　宏

まだ明けやらぬ朝、雨雲が重々しくたれ下がつた越後路を蒸気機関車とそれに連なる客車は進むそうに、まただるそうに一息一息あえぎながら登つていつた。

五月三十日午前〇時五十九分発の急行「日本海」で金沢を発つて、直江津へ着いたのが午前五時丁度、直江津駅のホームで金沢以来ごいつしよしたOBの田村さん、それに薬学部のお仲間達と尾瀬へ行かれる正橋さんとにお別かれをして、僕達のパーティーは信越線を一路関山へと上つた。このようにして僕達の「否」女性の方が半数弱いらつしやつたのですから私達と云うのが適当でしよう。とにかく私達の妙高パーワンは

このようにして始まりました。とうとう雨が降り出した。水滴が窓ガラスを打つそしてガラスを伝つて窓枠に流れ落ちた。ようやく汽車の内も外も眠りから覚めてきた。夜行であまり眠れなかつたためと雨のための両方で、気分はすぐれなかつた。汽車は六時〇三分関山駅に着いた。ここからバスで燕温泉まで行くのである。バスは関山の町並を過ぎて、一直線の道路をエンジンも焼ききれるバカリにあえぎあえぎして走つていつた。無理もない、関山と燕温泉の標高差はおよそ六〇〇メートル、勾配は相当急なのである。車窓の景色は雨とガスのためはつきりとは見えなかつたが、一面の草原であるようだ。そして所々に新緑の若葉をつけた木々が散在しているらしいのがわかつた。道は悪い。お客は私達の他は二、三人しか乗つていなかつたのでまるで私達の貸切バスのようであつた。バスはそうしているうちに燕温泉に着いた。雨は相変らず降り続いている。パッキングをしなおして、リーダーの出発の合図を待つ。いよいよ雨中行軍が始じまつた。完全武装はしているものの、雨は容赦なく私達五人に降りつけるので、顔や手や足は云うまでもなく、胸のあたりまでずぶぬれになるまでには大して時間は要しなかつた。リーダーをのぞく他の四人は次第にバテて来た。妙高山への登りはかなり急であつた。三十分歩き五分休むというペースで、ゆつくりゆつくり登つていつた。途中血の池とか称名の滝とかいうものがあつたらしいがそんなものは全然目に入いらなかつた。妙高の地獄谷を登りつめて行くといよいよ雪に出くわした。リーダーがステップを切りながら進んで行く、私達はその後に続いた。だが、なさけないことに、リーダーがステップを切つて行くその早さに、私達は付いて行くことができなかつた。医も他の三人もそれ程疲れていた。自分でもなさけないと思つたがどうしようもなかつた。その日は台を登りつめたところでテントを張ることにした。あくる日昨夜よく眠つたせいか気分はいたつて良好、きのうバテた疲れもどこかへふつ飛んでしまつていた。だが天気は相変ず悪い、雨は降つていなかつたが、雲は早く晴れそうにはなかつた。昨日は見えなかつた頂上がガスの晴れ間に時々顔を出した。見た所それ程遠くはない。はりきつて出発した。急坂を登つて尾根に出た。風は強く冷たくガスがかかつて今日も楽な山歩きではなかつた。時々ガスが晴れて、頂上や近くの山々・上越国境の山々を見ることができた。上越国境のあたりは晴れているらしかつた。雪は思つたよりも少なく、頂上はすぐ近くに見え

るのだが中々そこに到達しない。頂上の一歩手前に急な岩の坂があつた。鎖を伝つて慎重に登り、そこで大休止をした。ガスがほんのちよつとの間晴れて壮大な景色がながめられた。また出発し、頂上を過ぎて妙高山二重式火山の火口原に下つた。その火口原で昼食を食べてから今度は外輪山を完つた。この外輪山の登りがかなりひどかつた。急な雪渓をステップを切りながら登つた。一時間の悪戦苦闘の末、外輪山を登りきつた。あとは下りのみで、黒沢池までまつしぐらに下るつもりであつたが、途中僕の不注意で道をまちがえてしまつた。さいわいにリーダーの適格なる判断でことなきにいたつたが、みんなにすまないと思つた。黒沢池のテント地は非常に広く草原の中に沼が点々と散らばつていて、また水芭蕉も咲いていた。尾瀬を思わせる風景がそこにあつた。その日は風が強く、まるで黒沢池の風を一手に引き受けているようであつた。おかげで夜中に支柱が折れてさんざんな目にあつた。あくる日は前日までとはうつてかわつた快晴、昨日登つた妙高の頂上も、頸城アルプスの火打山も焼山も見えた。まるでハイキングのような気分で黒沢池ー高谷池ー黒沢岳ー笹ケ峰牧場とリーダーの好引率のもとに、単々と歩き回わつた。その翌日はまた快晴、笹ケ峰牧場にみおくられて、牧歌的感じのする妙高の中腹をダンダンダン歩いて杉野沢部落へ、それから途中野尻湖に遊んで金沢への帰途についた。後半の二日間は前半とはちがつて本当に楽しい山歩きでした。私達の妙高パーワンはこのように途中幾多の苦難にあいましたが、無事予定どおり終ることができました。またリーダーに対していろいろご迷惑をおかけしましたことをこれを機会におわび申し上ます。最後に昨年のオープン以来僕と活動をともにしてきたI君がこの砂高パーワンを最後に部をやめて行きました。ただ「疲れた」と一言云つて。僕の他方面でのご活躍を祈つてこのおはづかしきペンを置かせてもらいます。

大門パーワンのこと

山村嘉一

いやはや困つた事になつた。もう半年程も前の山行きついて書け、というのだから、最近とみに記憶力が衰えはじめた僕には、頭のイタイことである。〃四十過ぎたら〃の保健薬も、ある人種には有用だろうが、十代が最高だという記憶力に関しては、人生の下り坂にむかつた我々に〃二十過ぎたら〃というクスリもあつてよいのではなかろうか。とにかく困つた事だが、その上、ダレカサンが書くべきこの原稿が、都合によつて僕にまわつて来たのだから、チイートばかり腹が立たない事もない。しかし〃ものは考えよう〃でありまして、その人のかわりに、ハナハダまずい僕の文を採用してもらえるというのだから、喜んでいいようでもある。とかくこの世の出来事などというのは、一概にあれだこれだと、決めつけられないようであるが……。とにかく数時間内にはこの原稿用紙に、何かの足あとのように文字をばらまかねばならないのだから、今さらグチをならべたてても仕様がない。

この大門パーワンは、いわゆる開学記念祭を利用しての春のパーワンの一つであつて、五月三十日ー六月二日の四日間に行われた。この時は、猷迦登山、新トレについで、ほんの三回目の山行であつたし、まだ入試合格の甘い甘いムードが、我家をフンワリとつつんでいて、山行に対しては、ほとんど苦情は出ていなかつた。ただ僕のパトロンの一人である祖母に「開学記念祭とかに城内を案内してほしい」と頼まれて、ちよつと困つたけれども、これからは毎年あるのだからということで、納得してもらつた。

出発前夜は、おそくまでかかつて、苦心に苦心を重ねてパツキングをやつた。ダンボール一箱の食料と石油コンロであつたので、大へんかさばつたけれど、カツコウよく出来上つた。翌日何時に起きたかは忘却のかなたに去つてしまつたが、何でも雨のふる中を一番電車で金石を出たように思う。次の駅で、稲葉さんが乗られたが、サブと、ニワトリ三羽入りのダンボールという軽装？で僕のオーバーパツキングを見て、僕は氏のスモールパツキングをちらりと見ては、互いに苦笑すること数回にして北鉄駅前ターミナルに到着した。

一人バスに乗り遅れたため、稲葉さんが駅にのこつて

我々は若清さんに引率されて雨の中を出発した。コウモリをさして歩いたのであるが、それを手に持つと実に、邪魔だし、ザックにのせるようにしても、いつのまにかすべつてころがり落ちたりして頭を悩ました。それでも小矢部川にかかつたゆがんだ橋を渡る頃には、やや小雨となり、そこの川原で昼食をとつた。ニワトリも窮屈だつたろうから、解放してやろうということに衆議一決したが、三羽のうちの一羽をのぞいて他は、はねまわるので、足を紐引きでくくつて石にゆわえつけた。ところが出発しようとして、ニワトリを再びパッキングしようとしたら元気な方の二羽が、それぞれ一個づつの卵を生んでいた。川原の石の間にころがつていた。まだあたたかい卵を手にして一同は最初単純な気持で、おどろきかつ喜んだ。しかし考えて見れば、彼らは今晩我々の手で命を断たれるのであるから、今度は逆に、ちよつとシュンとした気持になつた。いかにも卵で命乞をしているように思われたからである。

さてこのあたりまでは、みんな順調であつた。雨がふつていたので、キンチョウしていたためかもしれない。ところが晴れるとかさを持たなくてよいかわりに、ノドのかわきや、肩の痛さなどがやけに気になるようになつた。しかも若清さんは意地悪くも、適当に水がながれている所を通り過ぎてから休けいするので、何度も、うらめしく流れる水を見過ごして、ツバをのみこんだ。下小屋に近づく頃、疲労は極に達しはじめて、休むと眠くなつていたのが、歩いていても眠り込みそうになつた。いよいよおれもバテてきたのかと悲壮な気持になり、なんとかガンバロウと、必死に歩いた。下小屋を過ぎてからの休けいで、足のうらに火がついたような熱さにたえかねて、ついにクツを脱いだ。そしてゴロッと道に横になつたとたんに、スーッと眠りに落ち込んだ。しかし「かつげー」の声で〃くもの糸〃はプツツリ切れししまつた。しぶしぶクツをはきなおして、最もつらい最後のピッチに入つた。実に苦しかつたが、みんなも相当疲れていたので、互いにハゲマシあつて、どうにかキャンプサイドまでたどりつ

いた。しかし、どうしても体を動かす気になれず、長い間、ザックの上に横になつていたが、ヨウカンを食つたりしているうちに、フラフラしながら水をくみにいつたりして、ヤウヤウ元気を回復して、設営も終了した。稲葉、大崎、平木の各氏も到着して、夕食の準備となつた。ニワトリを料理するにあたつて、純情可憐な紅顔の美少年達は、はたと当惑したが、背に腹はかえられず、涙をのんで、三羽の冥福を祈りつつ、ナタと包丁を手にしたのであつた。しかし、事実を客観的に陳述するに、うす暗く、ゆらゆらほのめくロウソクにてらされた黄色のテントの中で、口のまわりを、赤いチチャップだらけにして骨をしやぶつている図は、一種、異様な光景であつた。

三十一日は大門に登つたが途中雨にふられ、一日は、やつぱりあやしい天気だというので沈殿と決定。パーワンののんびりした気分を味つた。歌を歌つたりしていたが、手ぶらでブラブラ不動滝まで歩いた。帰る途中で、最後の晩だからファイアーストームをやろうということになり、みんな思い思いにマキを持ちかえつたが、十分でないので、今度はマキ集めオンリーにして出かけて、準備はととのつた。カマメシの夕食後、盛大なファイアーガはじまつた。我々ロマンチストの詳は、星を見上げ月をながめ、それぞれの胸にヒメたる思いにふけり、谷川の水の音に耳をかたむけ、美声をふるい、真赤な炎にセイジュンなヒトミをかがやかせたのである。月が山の端にかかるころすべてをもやしつくした炎は、次第に衰えて、心残りのうちに夜半のファイアーストームは終りを告げた。この実に素晴らしかつたストームは、大きな思い出の一つとなつて胸の奥深くにきらめいている。

二日の下山の日はよく晴れて、歩くとすぐ汗が出た。しかし、荷物も軽く、調子は上々であつた。部屋に到着して、のこりの米をたいて、ささやかな昼食のゼンを囲み、ビールの決い乾いに身をまかせ、最後まで楽しいパーワンであつた。

最初、近来のベルクハイムに見られないメイ文を書こうと意気込んだが、悲しいかな、それとはうらはらに、実につまらぬ拙文と相なつた。

「もの書けば、指さきつめたし
秋の夜半」

といつた今日この頃である。

尾瀬から小諸へ

黒瀬一夫

尾瀬の初夏はあの白い水芭蕉ですべてを言い尽くしてしまえそう。

山あいの雪が溶けてその花になつたかと思われる潔癖な姿け・・・それにも増してあの泥の中に咲く様は、そこを通る人間の感覚をすべて吸収してしまいそうだ。

三平峠の雨も、燧岳の風も、みんな去つた。さわやかな空気をいつぱい吸い込んで我々パーティは歩く。みんな楽しそう。うしろに燧、前に至仏の山、背中からは「元気で行けよ」。行く手から「よくいらつしやいました」とあたたかく見守つていてくれる。この時はじめて「来てよかつた」と・・・・・・

金沢を出てから三日、天気らしい天気に恵まれなかつたパーワンも、やつと陽の目を見る事が出来る。ポコツとつき出た景鶴山が真横にきた時大休止をとる。スケツチブックを黒くぬりつぶす者、カメラを手にして跳びまわる者、みんなその景色を自分のものにしたいと思つている。豊かな水量の沢が沼から沼へ音もなくとうとうと流れ、その流れを吸い上げるかの如く花は咲き、初夏の尾瀬を見事に再現していを。

山の鼻までのコースは絵葉書に出てくるような板一枚をひいた一本道、折からの日曜日、どうしても単線では衝突がおこる。そこは機知のあるユーモアをモットーとする我々先頭同志のジャンケンで優先権を決定する。このコース、十数組のパーティーに出合つたが負けたのはわずか二回と記憶する。そんな事をしながらの行動約二時間、陽が大きく傾くようになると同時に山の鼻キャンプサイドにすべり込む。至仏山の傾斜が沼の前にくい込み雪渓の溶水が流れる静かな草原に設営する。さて今夜の夕食は何かな、いい匂いが鼻をつく。さて食事の時間になると献立表にはない代物が頭を出してきた。何だろうおもむろに箸でつまみ上げてみるとどうやらよもぎのバターいためらしい。食糧係さん、緑黄野菜の不足からそこらあたりにあるよもぎを摘んで料理に変化をもたせてくれた心づかいであろうと思われる。それがまた大もてで日頃の何倍かを平らげたであろう。

その日が尾瀬での最後の夜だつた。テントからもれる静かなコーラス、サワードトーンの満月、黒いシルエットの至仏、美事に調和して神秘の世界をくりひろげていた。

時折聞こえるせせらぎも、もはや音としてでなく一つのメロディーをかもし出すかのようである。

あまりにも昨夜のムードにひたり過ぎたためか今日の起床はずい分遅れた。さあ最後のコース鍋待峠を越えよだけだ、山の鼻を出発すると沼は全く見えなくなる、みんな夕べの睡眠不足のせいで少々バテ気味。峠への最後のワンピッチで先頭の足が急に速くなる。前の者に着いて行こうと神経だけは働いているが足が言う事をきかない。そのうち一米、二米と間隔ができる。「チキショー先頭の奴、荷物が少ないと思つて味な事をしよる」、みんなこんな事を思いながら歩いていたのだろう。そんな強行軍も約二十分で鍋待峠に着く、あとは下りばかりでスイスイと言いたいがそうはいかない。パーティにはいろんな人間がおるもので、石ころ集めを仕事にしている者も居る。やつぱり人が拾うと自分もという事になつてつい重い石をザックに入れてしまう。その石の中にメノウか何が入つているか知らんがどうせ拾つてきたつて実用になる物ではない。下りのドスンドスンで肩にやたらと喰い込んでくる。戸倉のバス停へ着く頃には道の石を見ながら恨めしそうに歩いていたものだつた。

予定を一日延長して長野・小諸へ足をのばす。

雨の小諸城は訪ずれる人も少なくそれだけに藤村の昔を肌で感じとる事が出来そう。古めかしい城郭から望む千曲川も、今はダムが出来ているとは言えやはり何かしみじみとした詩的情緒は多分に残されている。自ずから「小諸なる古城のほとり……」が口に出る。

長野の町は金沢にないような、ゆつたりとした幅の広さが感じられる。まず何と言つても善光寺が長野を代表するであろう。あまり広くない境内も、この寺の全国的な名声のせいか間口を大きくして目に入つてくる。

牛にひかれて善光寺まいりもこの寺で終りをつげ、我々もここがパーワンに於ける最後の訪問地になつた。山門を出て駅にむかう足は来る時より大きく成長していた。

カタン、コトン、汽車の揺きと共に深い語りにおちいつてゆく……

行動中の悪天候、至仏山に足を踏み入れることができず残念だつたこと、利根河原の石ころ、長野駅でのリンゴ……　……ほんとに「楽しかつた」、この一語に尽きるパーワンも終つてしまつた。

汽車の旅

理学部三年　石塔　貴

私は、汽車の旅が大好きである。

鈍行の二等車のうす汚れたシートにもたれて、前に足を伸ばし、窓ぎわの景色をぼんやり眺めたり、山間を走る電気機関車の物悲しそうな汽笛を聞いていると、やはり旅に出て良かつたと思う。一人旅は気楽である。自分の好きな時に下車できるし、行先を自由に変更出来る。最近の様に急行、準急が多くなると、鈍行は優遇されて、ちよつとした駅には二十分～三十分の停車時間がある。こんな時にはホームに降りて、名物のソバを食べたり、改札口を出て、駅前をぶらつく。かつて、長野駅では町へリンゴを買いに、又鳥取駅ではデパートに行き屋上より市中見物としやれ込んだこともある。こんな事は旅を急ぐ人には向かない。乗客も鈍行と急行では客種が違う。鈍行はローカル色に富んだ人達が多い。だから方言も様々聞けるし、思わぬ人と意気投合することもある。九州の旅の時に、一人のオッサンと仲良くなり、その晩はその人の家に泊つたことがあつたし、奢母西線では、老医師に、是非今晩一泊まつていつてくれと頼まれたこともあつた。これは子供に男の子がいたく寂しいからと云つていたが、数えあげたらきりがないがとにかく様々のことを経験出来る。

開聞岳

九州、薩摩半島南端に美しいコニーデの開聞岳がある。今年の十月の秋晴れの日に頂上に立つことが出来た。薩摩富士と異名のあるように、その姿は誠に美しい。近くの長崎鼻海岸から仰ぎ見る夕映の景色は今も強く心に焼きついている。標高は九二四米、開聞町登山口より二時間に頂上に達する。道はなだらかで、中腹より樹々の間から長崎鼻燈台、その向うに横たわる大隅半島、さらに池田湖、桜島が遠望出来る。各地に富士と名のつく山はたくさんあるが、開聞はその中で一番女性らしい、やさしさのある山である。

故里の山

医王山が金沢の人々に愛される様に、所潟には五頭連峰がある。一般には五頭ー菱ケ岳と呼んでいるが高さも医王山と相似たりであるが五頭山から菱ケ岳まではかなりある。頂上からの展望は、新潟市、佐渡、北東に飯豊連峰が望れた日には一大パノラマが開ける。この山は開

合に天候が変り易いと云われている。過去に、遭難も出している。特に親子の遭難は有名であろう。私は毎年夏に帰省すると妻を連れてこの山に行く。村杉温泉から登り出湯温泉に下り、一風呂浴びて汗を流すのは最高に気分がいい。

仙台の近くには蔵王連峰があるが、やはり手軽に行く山に泉ケ岳がある。仙台駅前から根白石行きに乗るが休日には、泉ケ岳ヒュッテまで車が入る。ヒュッテの前は一面の草原で秋にはススキの穂でうまり、蔵王、面白山、船形山がアーベントロットに輝く。泉ケ岳の隣りに北泉ケ岳があり、更に船形山へと続く。医王山、五頭山に、比べて、眺めもよく沼もあり変化に富んでいる。又何日か、この山を訪れたいと思つている。

「さすらい・星のささやきが……」

宮村

夜の静けさを歩き
町ゆく光をすぎる
何が躍動するのだろう
こんな時　つきあたる光
呼びかける光
天から降つた星のささやき
全ては消えるそのまたたきな
宇宙はねむつている
「あなた達の小宇宙に私が要るの？」つて

偶然か私は一人

全ては消えるそのまたたきに
悲しきひびきか　その呼びかけは
私を夢にひきこんだ
「悲しき人よ　あなたには光がない」
雲は月を追いかける
全てはヤミー
夢なんだろうねー

ふと足をとめる
黒　かつては青
しかし黒い　みにくいー　何が
何があつたというのだ
かつて見た人である

「ツアラトストラを読んでいるかね？」
黒がしやべる　月はかくれ
星はねむる
天から落つた星からは
「あなたは夢をみてるのよ」
全ては消えるそのまたたきに

黒は続ける。光を苛むかのように
かがみこんだままで
「楽園の音楽だ　聴えるだろう？」
ああ、かつて見た人は
私のあこがれを
かなたに、はるかなかなたに
忘れてきたのか

永遠への愛

星はそれを知つているのか？
永遠　汝を愛する事は
小宇宙における必然か

星は何なのだ
どうして降るのか
全ては消えるそのまたたきに
宇宙はねむつている

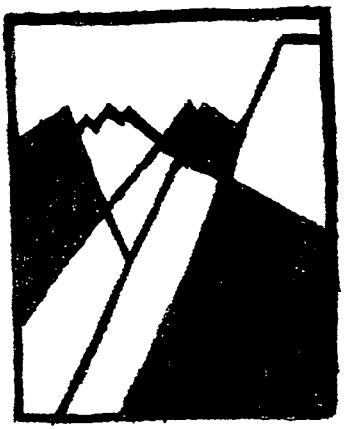
「あなたは夢をみてるのよ」
そうかなあ？

夢じやないよ
今　私の目がみえないとしても

私が、通りすぎる光を
むやみに明るく輝いていると
驚きつつ歩いている

だれも通りすぎる人はだれも
何も気づかないだろう

夏



学内オープンワンダルング

例年の如く今年のオープンは七月十二日より十四日まで白山に於て行われた。六十名近き学生が万才谷に集まり二日間を楽しく過した。天候もまずまずで帰りのバスは少々もたついたが、無事終えることができた。

— ボッカ隊 —

初めての白山

法文一年　玉野　暁世

ボッカーとしてオープンに参加。初めての白山、初めての二千メートル級の山行き、これだけでも身が引きしまる思いがするのに、石油入り一斗カン二つを背負つてである。何と緊張した事か。第一日目上飯場小屋泊り。

朝六時起床。外へ出てみた時、一面に広がる雲海、その上にちよつと頭をもたげている山の緑の美しさ。唯かがアイスクリームの様だと言つた。——それに別山の雄大さ。初めて山というものを見たような気がする。黒ボケに向う途中も振り返り／／、別山を見ながら進む。二時間位たろうか、頭の方に大きな岩が見え、その上に立つている人が小さく見える。叫び声も聞える。早く着きたい、白山を見たいという念が急に起つてくる。幾つかの曲折を経て黒ボケに到着。着いてみれば、意外とつまらないものであつた。だが、重い荷をかついで、ここまで来たのだ、テント地はもうすぐなのだという満足感が心に充ちてきた。弥陀ケ原に足を踏み入れた時も感激した。何か心が浮き／／してくる。足も軽くなる。弥陀ケ原という名がはじめて実感としてわいてくる。

万才谷に到着。日はさんさんと輝いてはいるが秋の日ざしのように柔らかだ。ザックを投げ出して寝そべる。御前峰に続く這松の緑、山肌の白つぽい茶色、空の青、そして予想にたがわぬ、いや、それ以上の白山。これらが一諸になつて、今まで味わつたこともない満足感、幸福感が心を支配した。だがこの幸福感もすぐに破られた。「テント設営！」。まるで楽しい夢から一つぺんに現実に帰らされたようなものだ。「唯だ！つまらぬ事を言うやつは」と、無しように腹が立つ。

ボッカ隊は六十人からの食事の用意をしなければならず、なかなか忙がしい。この為御前峰へ行くひまがなかなか見つからない。それでも御来光だけは見に行かせてもらつたが、最つとゆつくり大池、千蛇ヶ池等と回つてみたいという願いもかなわず、朝、昼、晩と水くみ、米とぎ、食器洗い等、何度雪渓を往復したことか、そして何度頂上へ行つてみたいと思つたことか。目の前にあるえさを食べる事も出来ず、むなしくガスのかかつている白山を降りねばならなかつた。

その後、有名な雪の平に入つたが、あの白山で受けた感激、御前峰がすつぽりと包んでくれ、嵐からをも守つてくれるような隠やかな感じを与えてくれなかつたことが改めて、白山の良さを強く感じさせた。

山と谷を越え
迷いに迷いをかさねたのち
再び広野に出るが
そこはまた広すぎて
いくばくもなく
また新たに迷路と山を求める

ーゲーテ

ー本　隊ー

思い出の白山オープン

教育養教　沢　田　豊　子

気にされていた天候も、私達の出発を祝すかのように十一日の朝にはからりと晴れ始めて四十名あまりのお客さんの医療係りという大役をおゝせつかつて白山登山に出かけることになつた。朝まだ早い早朝の街を、真新しいキャラバンシューズの音に心をとどろかせながらスポーツセンター前へと急いだ。こゝよりバスにて市の面まで行き、後歩いて砂防新道を登つた。別当の出合いで持参の弁当にてエネルギーを貯えてまた登つた　しかし上飯場の手前頃より足が思うように前へ進んでくれなくなり、その分までと心臓が二倍も三倍も早く動いてくれるのを感じるにつけ痛わしくなつたが、しかし今日はクラブの医療係りバテてしまつては面子がたゝないと心に叱打ちながらヨチヨチと歩いていると「ひどいなら荷物を持つぞ」という石橋さんの声、その声に足の方はすつかり気をよくしてしまいますます動いてくれなくなり倒れては面子も何もあるまいと割りきつて石橋さんの小さなリックと換えてもらうことにした。なお動きが悪いのは

使い方にもよるということで、台津さんの後を歩き少し歩行練習をするうちに自分の歩調が保てるようになつた。

その後は上飯堤よりの階段道は大部ひどかつたが、だんだんと慣れて無事爾陀ケ原迄登つた。途中の延命水は冷く喝きつた咽喉を潤すと生きかえつたような心地がし心ゆくまで飲みたかつたが実際には十名近くの班員にコップ七部目位しか与えられず、これを全部でわけて飲みそれ以上はだめとのリーダ中川さんの厳命であり、帰りには沢山飲ませてもらおうと自分を慰さめて水と別れた。爾陀ケ原では清楚なコバイケ草がひときわ目立ち、ピンクの可愛いイワカガミやミヤマコザクラ、ミヤマキンバイ等が可憐さを競つていた。私は早速家より楽しみにして来た伝説で有名な、かの情熱の花黒百合をさがした。それは白百合のようにスツキリと大きく、真黒でビロードの様な手ざわりの花だろうと想像しながら一生懸命に探した。けれども指し示された黒百合は色あせた黒色の貧弱な花でその臭は変質したビタミンB_1のようでありいささかがつかりした。

こゝまでくるとテントも近くハイマツの間を往来するボッカ隊の人達の姿もチラホラと見られた。こゝで全員の到着を待ち、又少し歩いて、夕食の準備もすつかり整えテントの前に並んで迎えるボッカ隊の笑顔に迎えられて元気に着いた。待望の白山頂上を目前にし夕暮れを待つその雄姿にみとれていると、クランケ第一号との知らせがあり、すは！お役目と一瞬ハッとしたがまもまあみてからと落着いてゆくと、お客さんの男の人だつた。途中で倒れたそうであり顔色が悪く、ぐつたりした感じだつたので、まず元気をつけねばと思いアルコール入りの熱い茶を用意してもらい手持ちの強肝内服液と総合ビタミンを与え温くして休んでもらつた所、その後は何ともなかつたようである。その後も何人かの頭痛や不快感を訴える人があり結構我々は繁昌した。夕食後は沢田さんの司会でワンゲルお得意のアルプス一万尺の歌の披露や愛の砂丘他七・八種の歌唱指導等で静かな山に歌声を響かせた。そして夕闇がテントをすつぽり包む頃より各班テント内ミィーティングで興じた。翌朝は未明に起されて風の吹き上げる頂上に登つた。各自持つているだけのものを皆、まとい、まきつけて異様な姿で岩かげに隠れながらあかね色の地点に目をすえつけていた。あたりは一体に白つぽいむくむくした雲が敷きつめられ、その間所所にうす暗く青味がかつた木曾の御岳山や薬師岳つるぎの連々が見られ全体に紫がかつた感じをしており、雲海

と空の境界の一地点が巾広く細くあかね色を呈して、その様子は静寂で尊厳でさながら日本画のようであつた。見張つているうちに、だんだん赤さ明るさを増し大体丸さも整つた頃神主さんが朝日に向かつて立ち両手を天にさし上げて声をはりあげながら「平和日本国万才」と唱えられたので私達もそれにならつた。実に清々しい感じだつた、その後の朝食もおいしかつた。しかし朝食の後はガスが強くテント内でカンパンをかじりながらトランプや合唱に興じた。そして早くガスのはれることを願いながら過した。

ー一般学生ー

ばてた時のこと

薬学二年　藤井由紀

ばてた時のことを書くようにと言われてとんだ事になつたと思つたが、実際程度はどうあればてたのだから仕方ない。二千メートルを越える山にはまだ一度も足を踏み入れたことの無かつた私にとつて二七〇二というその数字を読むだけで未知な物に対する不安を感じた。登山の一週間程前クラスでキャンプに行つた折、七夕を作つて短冊に一人一人がめいめいの願事を書くことになつた私はつい何も構わず〃白山から無事に帰れる様に！〃と書いてしまつた。友人はこれを読んでそんな事を書くのは私ぐらいの者だと笑つたが、しかし私はその時真面目に心にある事を書いたつもりである。自分の体力の限界さえ解つていればこんな心配はしなくていいだろうにと思つたが、そうなると何事も決りきつてしまつて面白くない。限界が解らないからこそ可能性を信じ、人は目的に向つて邁進する。そこに妙味があるのだとも思い直してみたりした。何と言つて準備するでもなく、白山について何ら知識を持たないまゝ、列から離れない様にということにだけは注意して登ることにした。市の瀬の登山口からあたりを見廻した時、〃低い山のなかにも深山がある〃云々という詩を犀星が読んだのはここかしら？と思いたくなる程、そんなに高そうな山は見当らなかつた。歩みを進めながら落伍者にだけはなるまいと心に決めた。初めのうちは道が広々として歩き易かつたが、私達が一歩一歩と歩いて登るわきを車がガタガタと石を蹴飛ばさんばかりに走り過ぎて行くのに失望した。段々と道幅が狭くなり周囲の木々が灌木になり始めた頃からむしようにに時間が気に掛り出した。歩き始めて数分しかたゝない

内からもう休憩にならないかしらと思う始末。そうこうしながら登つて行く内に甚之助小屋という所に着きしばらく休むことになつた。もう頂上に近いということを聞いてホッとした。その為か今まで飲みたくても控えていた水を多目に飲んでしまつた。この場所からは道も一段と狭くコロゴロと石ばかり多かつた。坂は急な上に階段になつていた所が続いた為とても呼吸しにくゝ、もはや時間のことを気にする余裕も無く、足だけが慣性の法則にでも従うかの様に動いているという具合いだつた。次第に足の力が抜け、自分の体の一部ではない様で単なる神経の通わない付属物の様な気がした。階段に足をかけるとリュックもろとも後ろへ引き下げる何物かの力が働いているかの如く感じられた。頭は自然に垂れて来る。私は坂道を重荷を引き頭を低く垂れてあえぎながら登つていく馬さながらであると思つた。いくら足に力を入れようと努めても全く神経が切断されてしまつたかの如く意は足に通じない。足がふらつき膝がガクガクと折れそうに思えた。胸がせつなくなり心臓が驚いた時の様に速く鼓動し顔がほてり始めた。雲の低いあの日の天気は重いリュックを下に押すかの如く尚更重く感じさせた。道傍にどんな植物があるか等にかまつて居れなくなつた。目はたゞ足元の石を[illegible]として見ているだけ。石は前日に雨が降つたとは思えない程カサカサに乾いて潤いの無い様子を呈していた。高く登るにつれて空は晴れて益ゆいばかりになつた。もうすぐと聞きながら一向に目的地にはつけそうにもない。足は増々力無くふらついてくる。仕方なく他の人にリュックを持つてもらう破目になつてしまつた。今まで肩にくいこんでいたリュックがなくなると体が浮き上る様でそれからはフワフワと歩いて登つた。万才ガ原に着いて夕日が暖かく山肌を照らしているのを見た時来てよかつたと思つた。高い山だけに風も強く可愛らしい花をつけた高山植物が片時も休むことなく揺れているのを見、山の厳しさを感じた。それにしてもどうしてここでは、こんなにまで太陽は暖かい光を投げかけるのだろうか？　山は夕映えの中でお互に語り合つている様だ。しかし局外者の私に対しては依然として近づき難いものを持つている。冷気があたりに流れて山々はお互に夜の準備をし始めた。私はここまでこれた事を喜ぶと同時に感謝した。

－第５回－

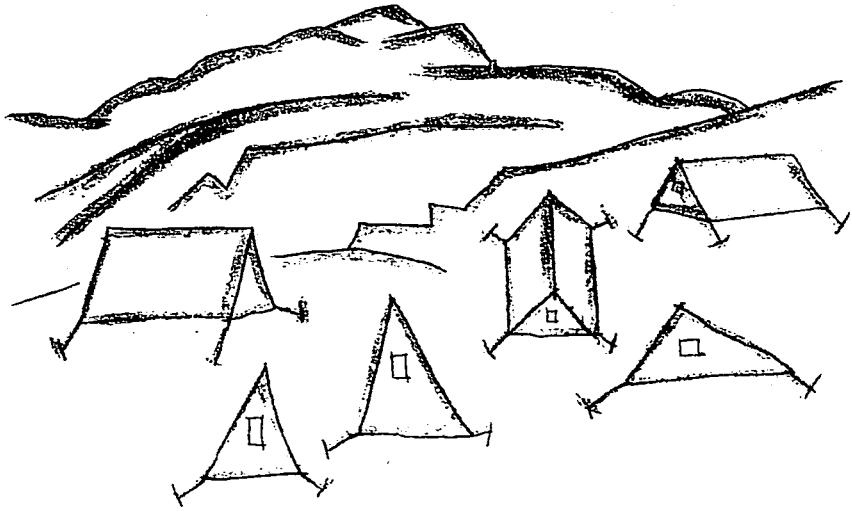
夏期合宿　　７月18日～27日

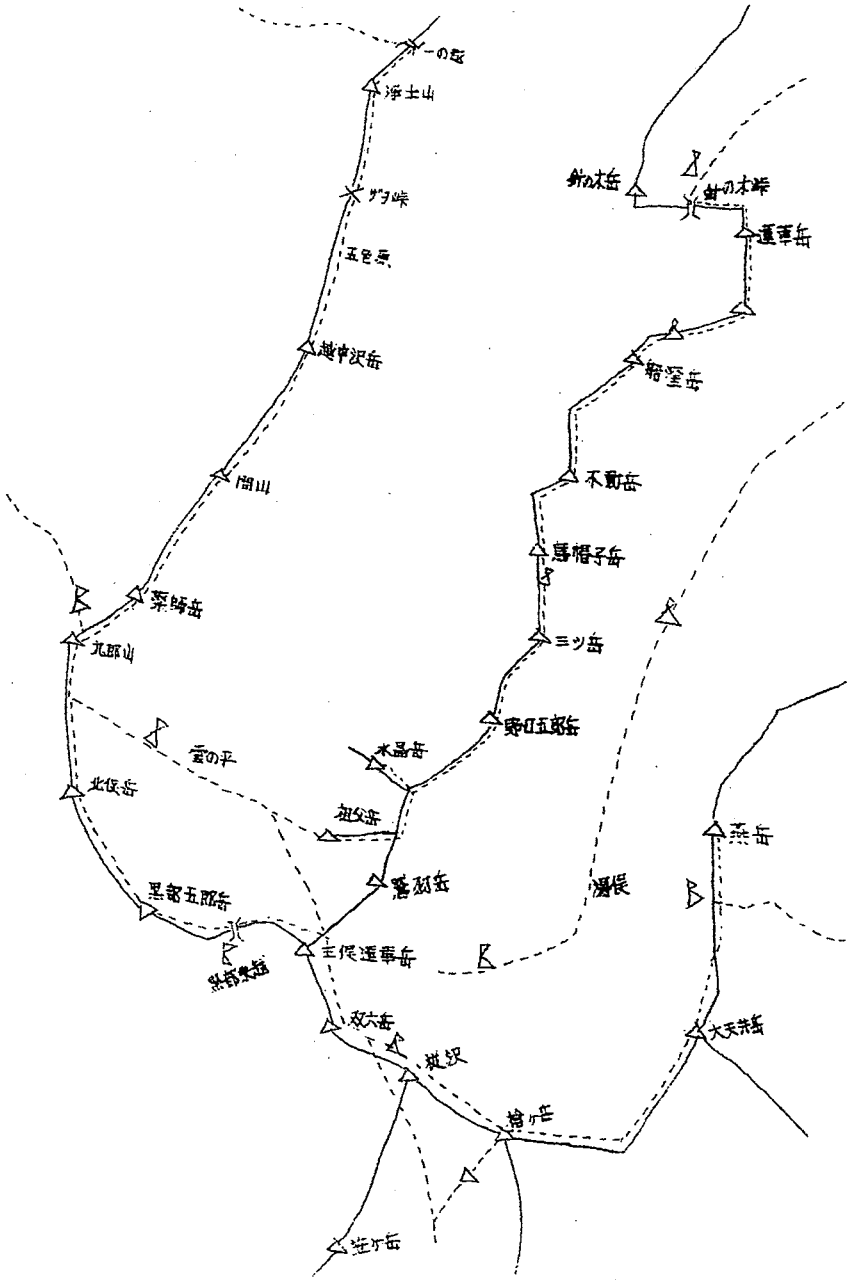
やあコンニチワ　五郎サン
御気嫌よろしゆう　湯俣サン
ひどかつたでしよう　薬師サン
皆元気ですね　斜の木サン
長い径だつたでしよう　燕サン
相変らず騒がしいね　槍平サン

高原に咲く　十のテント
延々と続く　ワンダラー
空は青いし　夕焼は赤いし
ああ　僕等は若いんだね

水晶拾いの　無邪気さも
サンショウオつりの　楽しさも
夜まで歩いた　想い出も
カゴ乗りスリルの　面白さ

バテた上級生もいたつけな
寝言のすごい　女の子も
イビキの音も　懐しい
夏のある日の　遠い想い出




一の岳
浄土山
ザラ峠
五色原
越中沢岳
間山
栗崎岳
丸部山
雲の平
北俣岳
黒部五郎岳
黒部源流
主俣運車岳
双六岳
槍沢
槍ヶ岳
涸ヶ岳
水晶岳
祖父岳
鷲羽岳
鷲岳
ミツ岳
鳥帽子岳
不動岳
船窪岳
運車岳
針の木峠
針の木岳
燕岳
大天井岳

合宿雑感

工学三年　合津　尚

山登りをする人間なら誰でも、一度は行つてみたいと憧れる北アルプス。そこへ我々は蟻の様に山中深く紛れ込んで行つた。先導したのは言うまでもなく、昨年の夏に雲の平で変な事をやつていた三年の悪者達であつたが、どうにか雲の平の一隅にテントの花を咲かせる事が出来た。北アルプスとはどこにあるのか、と日本地図を開いた者からもう嫌になつた、という者まで雑多な人達なのだから当然感想も異なつた物だろう。しかし北アは意外に簡単だというのは止めてほしいものだ。確かに簡単だつたかもしれないが、それはトレーニング、パーティ、天候その他の条件が良かつたからで、もしその内の一つの条件が欠けていたら最悪の場合には、時々新聞紙上を賑わすという事もあるのだから。自画自讃ではあるが、今年の合宿は成功だつたのだろう。計画通りに行動が完了したという事よりも、事故が無かつたという点で。最も部員の相互理解とか北アを知るという点から考えるならばいささか疑問ではあるが。ともかく我々の努力が危険な要因を遠ざけたかどうかは不明であるが、幸にもそれに遭遇しなかつた事は確かである。

今年の合宿の特色を思いつくままに書いてみよう。最初に天候が良かつた事。計画はある程度悪天候を前提として作成されているからあまり良すぎると、逆にマイナスの面が心配になつてくる。次にトレーニングや医学の研究がかなり良く行われた事。その結果かどうか病人、怪我人が無かつた事は、例年この事で悩まされていただけに特筆に値すると思う。第三、集中後の行動がうまく行かなかつた。これは毎年起る問題なのだが、私の連絡の仕事の拙さに、さらに集中したという安心感、疲労、パーティ意識等が原因になつているのだろう。この辺の場所をどこにするかよりも今後の合宿で解決しなければならない点だ。第四、最後までチーフリーダーが行方不明だつた事。今回の最大の失敗だつたが、どうしても部員よりも学生である事の方が優先するものだから学校の事情に振り回されてしまう。一番必要な準備期間中にCLが決定せず合宿会計の赤字の原因となり、合宿不参加の人達にまで御迷惑をかけた点深く御詫びいたします。最後に変な野郎が一人交じつてはいたが合宿で女子パーティが初めて試みられた事、その善悪はわからないが、

合宿全体の行動の拡大という目的は一応達成された。さらに女子部員の自立という点からも意義があつたと思う。最も男女ともにその必要性を認めないのなら話は別であるが、ただ残念な事は決定に際し何かと不明瞭な点があつた事である。しかし一番の問題は両者の間にP・W・はやむをえないとしても、合宿についてまでも行動に関して協調性が失われ出したという点にある。行動の拡大という美名の下に別行動ばかりになつたならば我々のクラブにおける女子の存在意義がなくなつてしまう。ワンダー、フォーゲルを名乗つている我々にとつて行動の拡大ばかりが目的ではないはずである。だからともすれば行動のみに走る傾向のある我々には女子という緩和剤が必要なのではなかろうか。

最後に合宿とは部の最大の行事ではあるが最高水準の物ではないという事を考えた時、今年の北アルプスは果して適当だつたのだろうか。参加人員が五十数名だつた事は少し気になる所である。次の合宿地も近いうちに議論されるだろうが、北アでも南アでも比較的まともな合宿は出来るとは思うが、多数の人間が参加出来る場所という条件を忘れたくないものである。

偵察と合宿と

池田　進

自然は意志そのものである。その意志が神によるにせよ、科学によるにせよ、とにかく意志そのものである。しかも、その意志は強固である。ある時は厳しく、又ある時はやさしく、その意志を強行する。我々はその意志に挑戦する。そしてそのやさしさを求める。その愛を求める。我々は山へ苦しみを求めに行くのではない。その美を、その幸を求める。しかし、それは苦しみをともなう。苦しみなしに、自然は己れを与えはしない

価値あるものは全て遠くにある。それが、より高き価値をもてばもつほど、遠くにある。人は、第一の価値を得れば、第二の、さらに高き価値を求める。それも手に入れれば、さらに第三の・・・・。それ故に人はつまづく。しかし、つまづくのを恐れては人生は表面的な何も価値のないものとなる。

社会は、時の流れと共に、変貌する。否、時の流れと共に発展する、進歩する。自然は永遠である。それは変化するが、我々の歴史のスケール内においては、過去を

舞り去る事はない。しかし、社会は自然を変える。自然は社会に対して、相対的にその価値を減ずる。

○　○

部は、合宿を北ア雲ノ平周辺で行うと決定した。六コースからの集中と、二コースへの分散の形式である。部が未踏のコースは、針ノ木～烏帽子間のみである。私は四十万と共に、夏休み開始と同時に、このコースの偵察に出た。偵察とは、官費の山行きである。このコースが特別に、恐るるに足るものとは思わない。しかし、安全を旨とする合宿においては、それに対する最低の保証が必要であるとして、見聞の為に行つたわけである。とにかく、行けない場所があれば、もどるまでのこと、私達には、特別の緊張感はなかつた。

×　×

私は、合宿でも、このコースを歩いた。二度目である事の安心感は、私に、余裕と、退屈を与えた。天候に恵まれたこの山行は、もし、私がリーダーでなかつたなら遊山旅行になつてしまつたかも知れない。

×　×

針ノ木の雪渓を登つた時は、雨だつた。私達は、五十分、十分のペースで、ゆつくり歩いた。「のど」は、急で雪が固く、キックステップは入らないので、カッテングを必要とした。落石の危険、沢の出入など、考えながら歩いていると、風景どころではなかつた。マヤクボ沢に雪がないのには驚いた。今年は、高所で雪のとけるのが早かつたという。この調子では、水に苦労しそうである。マヤクボ沢出合から上は、もう少し、もう少しと思いながら歩くと、意外に長くかかつた。意外に苦しかつた。案の定、峠には水がなく、合宿の時は、マヤクボ沢出合に張ろうと、心に決めた。雨の中でテントを張り、メシを食つて寝たが、コンヤノテントは、床上浸水で、一晩寝られず、明日の行程が思いやられる。しかし私達の役目は、偵察である。しかも合宿までに、ほとんど日はない。とにかく前進をすることである。

×

一年生は、予想外に強かつた。私達のパーティーが相当の体力を持つたメンバーがそろつている事は、わかつていたが、それにしてもいささか驚いた。最初は三〇分十分、後に、三十三分、七分のペースとしたのであるが、とにかく、早いし、バテないし、驚くべき連中である。裏銀の綾線など、私の歩巾で一分間、九〇歩程度、黒崎や、松浦は、一体何歩歩いた事やら。私は、危険な場所

以外は余りセーブしなかつた。とにかく行くにまかせた。天気はよし、パーティの調子はよし、気分のよい事、この上もなかつた。

×　　×

二日目は、正に絶好の天気、針ノ木の頂上でノタル事一時間、ようやみ暖をあげる。

昼頃からガスがかかり、ガスの中を七合のがけした綾線を行く、地図は暖につけ、磁石は、手にもつたままである。二人とも、　睡眠不足でバテ気味。ガスの中をただ歩く歩く。

三日目は、ガスと雨。南沢の下りの砂礫の中で踏跡を見　　道さがしをする。ガスの中で、砂礫の中へ出るとまるで雪原にいるよう、頼るのは、磁石と、かすかな踏み跡だけである。

ガスのかかつた鳥帽子池は、まさに仙人郷、これをこそ幽幻というのであろう。実に美しく印象深い場所である。（ブロッケンを見る。）

四日目は種々の都合で、午前マイナス〇時半に起床しプラス〇時半に出発する。真暗な中を、ブナ立尾根をどんどん下る。河原へ出た頃、ようやく夜が明け始めていた。

▼空きじ

音楽性、それは如何なる楽器でも醸し出し得ない音階と音色を持つ。バス・バソトン・テノールなどの比ではない。またそれは固有の音色を持つていて了度同じ波長のバケツと鐘を叩いたとき各々その音色で違うようにその音色を異にする。

臭気性、　成分インドール・スカトール硫化水素、果物、人参、ごぼう、卵、栗（いも）いわし、うなぎ皆、異なつた固有のそれを有す。

空きじの大小はエンゲル係数に比例しその臭気は逆比例する。つまり貧乏人は安価な炭水化物や繊維素をたくさんとるので音は大きいが臭気は少い。一方贅沢な人間は、タンパク質をとるので音は小さいが臭気性大。

なお、その比重は、〇・五五で空気より途かに軽く、それ故空気中では……

また燃焼性は確からしい。

―愚知―

義務と責任の山行だつた。時間におわれ、天候にはばまれ、景色を見るのではなく、地形を覚える為に歩いた。

×　×

天候は毎日良かつた。花はいつぱい咲いていた。鳥帽子は相変らず気持よく、南沢は、素晴らしい展望台だつた。どんどん歩いて、たくさん休んだ。いつも、誰もバテなかつた。兵事はずつーとうまかつた。鳥帽子の氷アズキはもう一度食べてみたい。全てが順調だつた。順調すぎて、もの足りなかつた。順調すぎて恐かつた。山はいつもこうではない。北アがいつもこうだつたら、私はもう北アへは来ない。

しかし、とにかく楽しかつた。全く快調だつた。

○　○

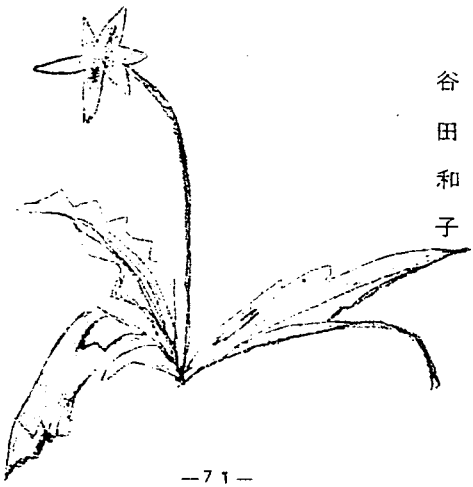
自然は強固に、その意志を主張する。あるときは、我々を苦しませ、あるときは楽しませる。我々はいつも、その最悪の事態に備えねばならないのだ。

北アは美しい。しかしどうやら、この山脈にしがみつく時代ではなくなつたようである。日本は広い。自然はどこにでもある。

▽湯俣パーティ△

おんなのこ

法文二年
谷田和子



女子部員論がさかんにかわされている折に、やつぱり俗にいう〝ついて行く〟方が楽だ、なんて本音を吐いたら叱られるかしら。

合宿が間近になると、〃山〃までが私を脅し始めました。ザアザア降りの山、濃霧の山、強風の山、山、山。どれもこれも〃どうするのだ〃〃自信があるんだろうな〃〃ただ単なる自己試練では駄目だね〃〃お前のつまらない意地つばりの場にはそれこそ場違いというものだ〃等々、威圧するように、嘲笑するように繰返します。しまいにはガイドブックの吊橋の写真が脅迫状にみえだしました。意地悪な人がこの写真を机の前に粘つて、朝晩、拝んだらとからかいましたが、本当にそうでもしたい心持ちでした。

信濃大町で汽車から降りる時、松本まで行く燕パーティの人達の〃ガンバッテクレヤ〃の言葉にようやく〃ヨシキタ〃とは思つたものの、睡眠不足でこの荷物、今日はどこまで行けるやら、といささか心細かつた。でも、フイと姿を消した我が女子パーティの守り神であり、私達に言わせると両手、両足にも余る〃花〃を持つたワンゲル一の果報者と思つたが、認識不足の輩に言わせると哀れな犠牲者であつた。合津さんが再び姿を消した時、スイカをぶら下げて現われたのを認めては、鼻の先にニンジンをぶら下げられた馬の如くに歩かざるを得ない。そのかいあつてか、なくてか第一日目は予定よりもたくさん歩けて、どうなることだろうという心配さは、何とかやれるだろうという自信に変える事が出来ました。

第二日目は二、三十米後に見えがくれするスイカをひかえて快調なペース。ずーつとあんまり聞いた事もない山と山の間の川をさか上る。チラッと一つ覚えの歌が頭をみせて嬉がらせたかと思うと、すぐにいよいよ待望の〃ツリバシ〃。一番先頭に歩いて来た以上恐いと言う事もならず、何気ない顔付で渡つたつもりだつたが。。。合津さんに〃あとの吊橋は〃と聞くと、〃うん、まあこんなもんだ〃と言葉を濁す。時には無知も幸福である。とにかく次のツリバシを見るまでは安心して歩けたから最後のつり橋を渡つた河原に、ザックを降して、何はともあれ気懸りなスイカを種子だけ除いて残らず始末しました。このスイカの皮の漬物は雲の平で針ノ木パーティに差入れしてあげたんだけど、食べてくれたのかしら。

第三日目、前日までとは打つて変つて登りの多い道。ゆつくり〳〵かたつむりがはうように進む。三俣山荘のあたりで、槍平、五郎のパーティと再会し、競争して祖父岳を登る。へばつて休んでいる男子パーティーズの目の前をサッソウと通り過ぎる時の心地良さ！

それからは少々みくびつてノンビリ歩いたのでタッチの

差でかろうじて雲の平のテント地に一番最初にザックを放り出す事が出来た。

後は御存知の通り、なんとなく過ぎて二十日には、新穂高温泉に足をひきずつてたどりつき、スカートをはいた女の人になつかしさとわびしさを感ずる。早く家へ帰りたい。

先刻白状したように〃ついて行く〃のはいかに安易な事であるかをしみじみ感じました。同時にそれだけでは自分の未熟さ加減を自覚する事もないのだという事もしみじみ感じました。おそろしい事だと思います。山を知らないため、慣れないための色々の失敗を思い返すとヒヤリとします。だから私には今年の想い出としての合宿（女子パーティ）なら終りよければ全て良しですませますが、来年の基石としての合宿とみると今後直ちにこの規模を発展させるにはいささか心もとないものがあつたと思います。もう一度出発点に戻つて、今度はあいまいな机上の空論としてではなしに検討してみる必要があるのではないかと思います。

◇針の木パーティ

思い出すままに

吉村弘二

すべて遠い昔の楽しい思い出のような気がするのも現在の虚無で満ちた生活故であろうが、一つ／　振り返つてみると、さらに思い出が美しく楽しいものとしてよみがえつてくる。

七月十八日、眼前に後立山から裏銀に続く山脈が屏風のように高くそびえている。針ノ木大雲溪が直線的にその屏風を峠の下方で二つに別けている。雲溪に足を踏み込むまでは、今までと変らぬ行程だつた。雲溪の上は空気が冷たかつた。そのせいではないが心の引きしまるのを感じた。皆一歩／　ゆつくりではあるが元気に登つた。一番雲溪が細くなつている「のど」と言う所が最も急勾配だつた。その下で一休みして写真を取りまわりを眺めた。峠に向つて右側が後立山の終りを告げるかの様に峻嶮が見上げた高さに連なつていた。雲溪はでこぼこで尻セードはおろかグリセードは全くできぬ状態であつた。さて、急なのどをピッケルを振りながらキックで足場を作りながら慎重に足を運ぶ。「急ぐな！」「足場に気をつけろ！」等時々聞えたが、皆緊張の中で冗談を言いながら登つた。十二時近くテント場に着く。雲溪におちる水の豊かな所だつた。翌日の峠からの眺めを期待しながら、満腹でシラフにもぐつたのは六時過だつた。

七月十九日星がきれいだつた。

二時起床。なべの上に大きなナメクジが二、三びきいた。こんな寒い、高い空気の新鮮な所にもあのじめ／＼したが下界の動物がいるのには大いに驚いた。暗い中のローソクのもとで、「一と二と三と・・・・」

峠に着いた時はもう朝だつた。一時間ばかりの急な苦しい気持が、この広々とした眺めの美しさの中にとけ込んだ。　槍が岳を中央よりやや左にみて燕岳、赤牛岳など北アルプスの大きさをまざまざと見せつけられた。針ノ木岳のこの峠の上の頂上はガスがかかつてみえない。あれほど合宿前はこの山に登ろうと思つていたのに我々は峠から眺るだけにとめた。ここから眺める我々の行く末は蓮華岳が横にそびえているほか北葛、七倉と、この峠よりだん／＼低くアルプスとは思えぬ木々の青々とした山波を下方に連ねていた。烏帽子岳から雲の平まで平均二千七百米を越える縦走路ははい松を除いて木らしい木がなかつただけに、ここから船窪岳までの北アルプスとして最低部を行くことが我々の縦走にバラエティを持たせたことは今思うに確かである。

蓮華岳は頂上が広くから／＼した石の間にこまくさがあちこち咲いていた。そこからだんだん下り小さな岩場

を鎖にたよつて下りまた登り。。。。。。船窪小屋の下方のテントサイドに着いたのは三時を廻つた頃だつた。うわさの小屋の娘はいたには居たが、別人だつたのか皆あてがはずれたのでがつかりした。何を喰つたのか記憶にないが満腹で放心状態で例の話が後をたたなかつた。世の中が男だけだつたら、こうも話が落ちるものかと思つたことだけ記憶にある。その日の夕焼はみごとだつた。それぞれが、ブッシュを分け、深い不動沢の灰白色と暗くなつた山と夕焼の空のなすコントラストを眺め用をたした。

七月二十日、船窪岳は三つのピークを持つ森林帯の山だ。不動沢を左下に見て緊張しながら登り下る。森林帯と言つてもトウヒ、シラビソであるが、木の間から見る立山、薬師はまた格別な趣があつた。不動岳は喬木限界線を越えはいまつのトンネルをくぐり久し振りの北ア的山頂だつた。南沢の頂上で昼寝。烏帽子、水晶岳などが近くにそしてまた遠くに眺められた。疲れが出ていたのか、そのまま眠つてしまいたかつた。アメを食つた。

烏帽子池で顔を洗う。偽烏帽子の雪渓でテントをはる。水はそこだけなので色んな人間が集つて来た。あの時の氷あづきのうまかつたこと。ちよろ／＼水を長い間待つたこと。

七月二十一日、今日は雲の平口着くと皆はりきつた。他のパーテイを走るように追い越したのもそのせいか。野に五郎岳だつたか、女性の一群に会う。下界の化粧の香がしたがやはり山には山の香が最も適しているのか、反発したのはオレのみだつたろうか。水晶岳を往復し雲へ向う。祖父岳の下りにテントが点々と下方に見た時、何とも言えぬやすらぎと、疲労感を覚えた。

峠に立つてぱつと開けた展望を眺める時の気持、そして夜の満腹感。俺にはそれらのものしか記憶にないのが残念だ。パーテイの中の一人として何をやつたのだろうと考えてみると何にもない。しかし、とりとめのない話の中に、そして黙々として皆と歩いた中に何かしら本当のよろこびを感ずる。

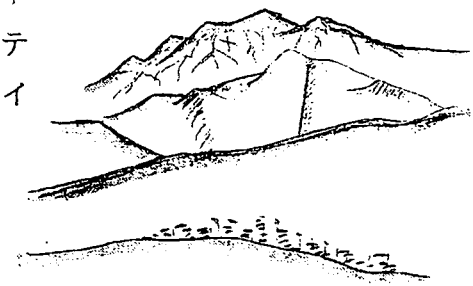
自然の秘密の深さは測り知れない
そこに永遠の魅力がある
その魅力のため、われわれは繰り返し自然に
ひきつけられ、繰返し新たな観察と発見とを
試みる

ーゲーテー

薬師パーティ

薬師岳

富永浩之



薬師岳 m

金沢駅を汽車が出たのは夜中の三時、メンバーは、リーダーが紺清さん、サブが僕、四年の久島さん、二年の福田君、新谷君、一年の伊予、井上、柳川、小栗、諸君

汽車はゆりかご、眠るには最高だ。目がさめれば富山といいたいところだが起されれば富山駅に着いていた。「それ急げ、急がんと電車におくれるぞ！」と紺清さんだが皆んなノンキ者ぞろい、急いでも、そう早くはないとうとう電車が一台おくれた。千寿ケ原に電車が着いた。「それ急げ、又ケーブルにおくれるぞ、」ああ無情、又もやケーブルに乗りおくれた。同じ様にしてバスにも乗りおくれたが、神は我々を見捨てなかつた。ザック一個につき三十キロを超えると八十円余分に取られると分かつたので、ザックから三、四キロづつポリタン等を取つて減らした。その結果、大体二十七、八キロ、ひどいのは二十九、五キロというわけで九×八十円もうかつた。

バスの終点美松からは泥んこの悪い道とボッカにかつがれて山を下りる道路工事のハッパでやられた人夫の血にまみれた顔が印象的だつたくらいで室堂へ来てしまつた。そこで昼飯となつたが寒くつてかなわない。ガスが切れて少しでも太陽が顔を出すと未開土人の太陽崇拝の者になるから面白い。両手をさし延べて太陽をあおぐの

である。でもこの時程太陽の有難たさを感じた事はまだない。

一ノ越で営林所の人達に会う。我々の先を行くらしい。営林所の人達が行つてから我々も出発だ。私は小屋の売店のアルバイト女子学生とつきぬ別れをおしんでいたが決心をして小屋を出た。彼女は最後に一言僕に言つた。「ありがとう御座いました。」と。風に吹かれ、水バケツを交替で持つて我々はその日のキャンプ地に着いた。龍王が目の上である。霧の中から龍王に登つている人達の声が聞えて来る。

あくる日、起こす役目は僕だつたが目がさめてみると一時間もすぎていた。めざまし時計は完全に鳴りきつていた。気圧の関係で耳が悪くなつたのかな。今日もガスつている。ガスの中を我々は調子よく歩いた。すごいガレ場を下つてザラ峠、午前中に五色ケ原に着いた。まだ薬師は見えない。越中沢岳のゆるい斜面を登る頃、ガスが時々切れて、太陽の金色の光が我々を包む様になつた。おお！太陽様々、アリガタヤアリガタヤ！調子にまかせてスカ〳〵歩いている内にスゴの頭に着いた。と・・・前方に巨大な薬師がガスの切れ間に見えるではないか。いやはや、このオドロキ、このカンゲキ、その巨大な姿は眼底に焼きつけられた。それ以来私は目が悪くなつてしまつた。オーバーな。しかし今まで上がつたり下がつたりしてきた山々が急に記憶から遠ざかつたのは事実であつた。明日はあいつに登るのだと思うとファイトが腹の底からわいてきた。

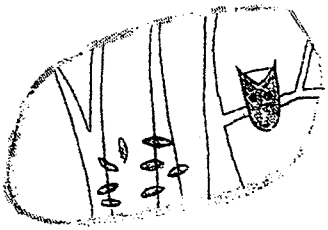
明日になつた。間山から北薬師岳までの間の長い事、幾つもピークを越え次こそ北薬師だろうと思いながら登るとまだ前にガスにかすんでピークが見える。それに比べると北薬師岳と薬師岳の間はあつけなかつた。前にこりていたので「今登つているのは本峰の手前のピークだろう。」といいながら登つて見るとそれが本峰であつた。

薬師岳は一般に女性的な山と言われていますがそれは太郎小屋方面から見た薬師であつて、間山から薬師本峰の間は岩がごろごろしていてとても女性的とは言えないと思う。白つぽい岩、黒いザラザラした岩、斜面全体が黒い岩のゴロゴロしたやつでおおわれているのや細長い岩が風化作用でうすくはがされ乱立している様はガスがかかつていたためもあつて、さながら墓場の様であつた。この様な岩のごろごろしたやせた尾根の何キロも続く山が女性的な山とは言えないと思う。僕は別に女性的な山はいけないというのでは有りませんから女性の方々くれ

ぐれも誤解のない様にお願いします。アーメン。

こんな事をいつている内に我々は腹も満たされたので本峰を下り始めた。赤茶けたこぶし大の石ころの道をジグザグに下つて行くと下から女の子が一人で、でつかいザックをかついで上つてくるではないか。本当に一人かと思つてその前後一キロにわたつて四つ目で捜したが、どうも一人らしい。なぜ一人旅をしているのか、愛大生の家族か。どつちにしても女一人でスゴの小屋まで行けるだろうか。心配だ。ついて行こうか、だが現実は厳しい僕の後には、ものの情けなんて全然解さない連中が八人もいる。しかも歩くスピードを上げるとは。

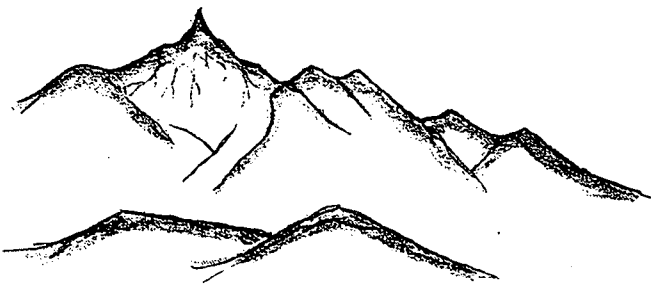
サヨウナラメチコサン。



合宿　槍平パーティ

宮本則夫

我槍平パーティ通称「糞平」には当時雲の平にその名を馳せた「ブッシュドクター」あり、キジ打ち名人あり、カラキジ名人ありといつたように多彩な人材が今井リーダーの元に集まつたから、テントの中は常に活気に満ちていたとか。このパーテー歩みが鈍かつたのか、休憩が多過ぎたのか知らない



が、初日と二日目は予定時間をはるかに越え、日の暮れるまで行動せねばならなかつた。でも要所要所はしつかり締め、特に雲の平へは定刻通りに着いた。今、合宿を振り返つて見るに一番印象に残つているのは槍平から双六までの行程であろう。七月二十日、天気晴れ、槍平の素晴らしい黄昏時を目にし、蒲田川のせせらぎを耳にしてシコラフに潜つた昨夜、今朝の晩光は涸沢、穂高の俊烈な山並を赤銅色に染めぬき、我々に希望の光を与えてくれる。あたり一面にたち込めている朝霧は、せせらぎの音、食器を後かたずけする音、時に起る話し声を吸ひ取つていくようで、どこでも静寂を保つている。それから数十分後一行十名は槍を目ざして行動していた。断続的に押し寄せてくるガスは一瞬にして北アの美景を覆い隠してしまう。槍の肩と言われている飛弾乗越までの登りは厳しいジグザグ道である。

誰をもいら立たせ、歩調を乱したり、立ち止まる輩には、後の方から容赦なく叱咤の言葉が飛び、休んだ毎にニギリを頂戴する。特にバテ気味な者は空腹のせいにして、よく食べる。「もうワンピッチ」この言葉が数度繰り返えされた後、ようやくにして槍の肩を目にする。全くどうしようもない位長い登りである。槍の肩に着くとガスの切れ目より、突然、槍とおぼしき物が現われる。すぐ目の前に、人を圧するように、大きな姿を見せているではないか。！壮大とも神秘とも形容し難い槍のたたずまいが！しかし上から下まで人の列、我々にとつてこんな槍に登る自尊心も時間も持ち合わせていない。「槍は登る山にあらず、眺める山なり」事この際に当つて、名誉の断念を余儀なくされ、複雑な気持でペナントを買う。それより飛弾乗越で打つキジが日本海へ流れるか、大平洋に流れるか興味深々、ここ三千メートルの峠は分水領であり、人生の岐路ならず水の岐路である。一時間も休憩したであろう。槍の俗化した姿を横目でニラミながら、いよいよ問題の西鎌尾根に突入する。行く手に長く西鎌の稜線が曲つて延び、赤岳がその名のごとく、レンガ色の無気味な姿を見せている。「怖い」という先入観に因われ過ぎている為、なんとなく緊張する。ザックを背にしては下れないと思い、ザックを一つづつ細引に結んで下したガレの難所を後から来た女子パーテーが事もなげに通り過ぎるのには、全く穴があつたら入りたい気持ちだつた。しかし「我々は常に絶対安全を要求されている、いたずらな勇猛心は遭難の原因となる。。。。」とか。次から次へと小さなピークの連続である。ガス

は晴れ、快適とも思われる一萬尺近い屋根歩き、眼前に開ける展望は大自然北アのパノラマである。ハト、振り返つて見ると、先刻通過した槍が、又槍から鋸歯のように乱立した北鎌尾根が、灰白色の空に黒々とスカイラインを描いている。ハイピッチの歩み、しかし硫黄沢乗越を過ぎた頃から、パーテー内に疲労の色がみなぎつて来て、大屋君が軽い捻挫を起すが、なんとか歩けそうで事なきを得る。あたりの山々は除々に紺青色を帯び、今こそ白いベールが北アに一日の終りを告げんとするかのように、山の斜面をはい登つて来るガス、我々は槍沢の登りにさしかかつている。皆ひどく疲れているようだ。転んだまましばらく起き上がれない糸魚川君、元気だつた彼までがこの状態である。彼にヨウカンを与えいつきに登り切る。七時十五分、到頭我々は双六に着いたのである。日はとつぷり暮れ、双六池周辺のテントからもれる明りは、やさしく我々を向えてくれるようである。

ひそかに清く自己を保持せよ。
自分の周りは荒れるにまかせよ。
君が人間であることをより多く
感ずれば感ずるほど
君は神々により多くにてくる。

ーゲーテー

燕パーテイ行状記

沢田孝雄

表銀座コース、今度の合宿中はなやかさの点では、一、二を争うことは間違いなかろう。人の多いこと（特に女の人）、道のよいこと。槍の頂上に立つたこと。などにおいてだ。しかし、華かさの反面には。。。とかあり言うがごとく、その期待したほどハデで良いことばかりあつたわけでなかつた。山はやはり山であつて、どこを通り、どこを登つても、それ相応の楽しい思い出、そして、苦しさはあると思う。それだからこそ、編集委員も、各パーテイごとに、拙文を強制するんだ。小

生も、その御要望に応たえて、雲までの、楽しく、そして苦しかつた思い出を、つづることにする。

七月二十日　雲一つない上天気なり。

眺めの全くない、かなりきついジグザグの道を、大きいザックも気にせず、いやその重さを、のろいながら燕岳のキャンプサイドに着いたのは、末だ太陽の強烈に照りつける、お昼ごろだつた。づつと樹林帯を、あえぎあえぎ登つたせいか、頂上と小屋との鞍部に、出たときのあの雄大に、ひろがる北アルプスの山々は、我々の目を心を、はづまさせた。槍も大きく見える。そして我々が明日から行こうとしている双六、三俣の山々も三日間でゆけるかなと思うくらい、はるかかなたにそびえている。テントを張りおえて頂上にゆく。岩峰を白砂、そして、それを色どるハクマツの緑、全く神秘的だ。地上の楽園と言われるに、ふさわしい美しさである。その頂上に座つて、ふとしたキッカケで知り合つた大阪のお嬢さんと話をし、歌を合唱した。あの感激の幸わせな時間は、楽しい思いだ。又ここでは水一杯百円だつたが、先程のお嬢さんを通してうまく手に入れたことなども。しかし食当で先に帰つたI君が、水と石油を間違つて飲んだことは、I君にとつて苦しい思い出で、あつたろう。夜は、テントに遊びに来た彼女らを、ヨウカンで歓待す。

七月二十一日　昨日に劣らぬカンカン照りの上天気。

いよいよ今日は槍に向つての出発だと思うと、やはり心がはづむ。天気も小出予報官どおりの快晴だ。大天井までは、たいした登りもない、自動車が走れる様な、立派な道だつたので、自然サブリーダのピッケも上る。一年生も、皆頑張る。ただ先述のI君だけは、不安そうだつたが、頑張り切る。東大天井との分れ道あたりで、あつたろうか、パーティ中、岩石と花にかけては、随一の物識のT君が、高山植物の女王たるコマクサを見つける。一本だけポツネンと咲いているのかと思つていたがそこら一面群生していた。ガラガラの岩場の間から、ピンク色のきどつた形の花をもつた十センチメートルぐらいの、この花は、やはりその貫録十分なくらい美しい。摘みとつて持ちかえりたい衝動にかられる。途中の感激は、コマクサばかりでなく、左手に見えた常念の笠の様な形の美しさ、又富士の山の華麗さも強く印象に残つた。しかし、このコースでは、何と言つても、槍の姿が、四十見えることであり、進むにつれて、だんだん大きく近づいて来ることだ。カメラ係りのF君は、休憩の度に、シャッターを切る。大天井は登らづ左に巻いて西岳小屋

に出る。ここから大きく水俣乗越に下り西鎌尾根に、とつつく。途中水は、充分ないので話は、水とビールのことばかりであつた。湯俣川や、槍沢の水は、全てビールに見える程に水に飢える。鎌尾根は、きつくもあつたが槍への登りと思うと不平も言えぬ。殺生の手前、大槍ヒユッテでは、先述の大阪のお嬢さんの団体に、紛れこんで、チャツカリお茶を飲む。こうゆうところは、皆要領がよい。殺生では、小屋の横でテントを張る。ここでの設営は、保健所から禁止されているらしく、黙つていたら、とんだことになるところであつたが、リーダが、うまく話をつける。ここでのテント生活は、全くイカスものであつた。目の上に大きく槍がつゝ立つており、夕焼けに染つたそれは、何んとも言えぬスバらしさであつた。そして、槍のふところの様なここでの食当も苦にならぬ。夜、雲での、ミーテングのスタンツを考える。〃燕良いとこ、一度はおいで。。。。〃

七月二十二日　ガス濃く、雨が来そうだ。

朝から天気が、おかしく、ガスが、かかつて先が案じられる。槍の肩まで三十分、末だ明けきらぬ、ガラ場を登る。肩に荷物をおいて、槍の穂先に向う。六時ごろだつたが、その割に人が多くなかつた。逆層になつた岩場を、ヘツピリ腰で上る。ガスが濃く穂先にいつて、何も見えぬかもしれぬと思いつつも、やはり心がはづむ。二十分ぐらいかかつて、やつと念願の穂先に立つ。三メートル四方の大きさで、避雷針と、方向盤がある。ガスで視界はきかぬ。ガスの晴れるのを祈りつつ三一八〇メートルの気合にひたつていると、一時的にガスが切れる。穂高連山の黒々した山塊や、八ツケ岳、南アルプスの山々など全国の山々が、白い雲を従えて、そびえている。オー。声ならぬ声。皆んなその素晴しさに、嘆息す。あの山は、こちらの山は、と言つている間に又ガスの中に隠れてしまつた。「帰るか」と皆腰を上げた時、ガスの中に突然くつきりと、まんまるいニジが現われる。そしてそこに、僕らの姿が影絵のごとく浮び上がつているのだ。「アツ、ブロツケンだ。」だれもこの神秘的な光景に、声をわすれたかのごとくぼうぜんと見入る。しかし長くはつづかなかつた。肩から東鎌尾根、樅沢岳、双六と、三日間の疲れも知らないが如く、つ走る。三俣蓮華に近づいた時、右手に遠く、一昨日いた燕岳が、雲の上に白く浮んでいた。「ここまで、良くきたなあー。」ヨツパシオガマの咲く、お花畑に、体を休めて皆そう思つた。三俣小屋の近くで昼食を、食べ、雲の平への登りに

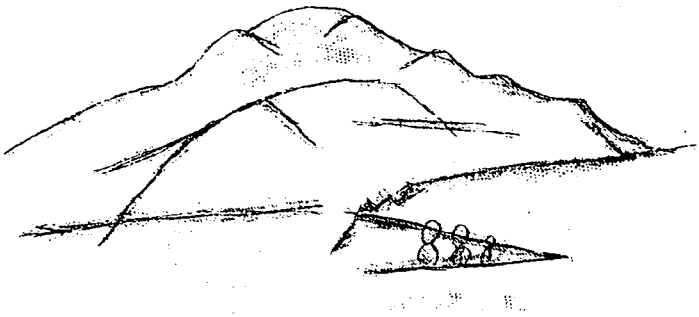
かかるころ、雨に会う。大きな雨だつた。でもワンピッチで登り切り、平らなところに出る。「ここが雲の平か。」雨が降りガスが、かかつていたせいか、大いしたところと思わなかつた。「もうすぐだ。」と言うリーダの声も中々現実化しない。中々テント場らしきところは、見つからない。皆な、疲れを感じたらしく、列が乱れる。大きな岩のゴロゴロしたところに、さしかかつた時、ちらつと黄色いものが見えた。「あそこだ。」皆、ピリッとしたらしく、急に元気になり、隊列を整えたりして気取り始めた。その内に、二つ三つと、テントが見えはじめた。「オーイ」と声をかける。テントから、出て来た皆んなが、手をふつている。キャンプサイドに入る。皆拍手で迎えてくれる。テレくさかつたが、うれしかつた。「元気か。」「ごくろうさん。」とうとう着いた。胸にジーンと来る。今合宿における最高の感激の時であつた。

イタリーの登山隊がアルプスに登つていて道に迷つた。その時隊員の一人がやおら地図を取り出して研究した結果いつた。「我々の現在地は向うに見える山の頂上だ。

五郎パーティ

マスコット

四十萬　利之



黒部五郎岳　m

当初の計画では、バスが有峰ダムまでしか入らず、折立で一泊する予定だつたのだが、バスがスイスイと折立まで入つてしまい「これでは太郎小屋まで前進しなけりや申し訳無いだろう」という訳で登り始めたが、先夜は全員金沢駅泊りでほとんど睡眠不足で、皆は「明日は精々二時間も歩けば折立に着き西瓜を食べすぐ寝れるだろう」と考えていたのだから五時間も歩くと皆たまらない様な顔付だ、おまけに太郎平に入ると道はぬかるんでいて非常に歩きにくいと来ていた。その上歩けども〳〵太郎小屋は見えず、最後にはるか彼方にポツリと一点になつて見えた時、皆はもう喜ぶこともなく黙々と歩くのみ、それでも太郎小屋に着くと、前方には集中地点の雲の平が広がり、左手には雄大な薬師岳が腰を据えていてそれらが夕日に映えるのは見ものだつた。

この様な昨日の悪戦苦闘とは打つて変り、今日のコースは、常に雲の平を左手に見て、それを中心として円運動をしたようなもので、登りと言つても黒部五郎岳への登りだけ、おまけに黒部五郎岳を下つた所で一時間程の大休止を取り、ゆつくりとグリセードを楽しんだので皆満足して黒部乗越しに到着。

楽しく又騒しい夕食のヒト時も終り、いよいよミーティング、ミーティングと言つても今夜のは、明日の集中地乗込みを前にしてチョツトばかり変つている、というのは我が班のトレードマーク、つまりマスコット作りである。

原案は、三年生のO氏に任されてあつたが我々としては、O氏の常日頃の言語行動より察し、期待と一抹の不安を懐いて待つていた。出されて見ると、その図案は此れは又驚いたことに少女雑誌（マーガレットとかいう本だそうで、小生としてはこの様な本があるという事は、初耳であつた）の中のいともつぶらな目をした可憐な少女の図なのだ。この様な絵は、小生のいと幼き日、どこかの本屋の店頭で立ち読みした漫画にあつた様な絵で、少女達の永遠の憧なのだろうか、その上、この絵の少女は御叮寧にネクタイを結び、頭にはハチマキ（向こうの言葉ではヘヤーバンドと言うのだろうか）を締めているという凝つたものである。

此の様な本がどうしてO氏の手元にあつたのかいささか不思議に思いながらも、よく探し出したものだとO氏の御努力に皆感謝した。

皆も大賛成なのでいよいよ描く段となつたが、描くといつても、いやしくもパーテーの「錦の御旗」だからおいそれと描けない。互に譲つていると、一年生のA君敢

然と筆を上げ。。。いや敢然とマジックインキを取り上げて描き出した。

しかしここで小生の悩裡に一抹の不安が浮んできた（以下A君は五行程飛ばして読んで下さい）つまり一般的に言つて「人物を描く場合、どうしても描かれた絵がその作者の顔に似て来る。」ということを以前に聞いたのを思い出したからです、ァァ此の可憐なる少女の絵の上に作者の面影が浮んだらこの絵はどうなつてしまうだろう。。。。。

彼はそんな心配を知つてや知らずや少々緊張に手をふるわせながら二十の目の見つめる中で描いて行く。

しかし僕の心配が杞憂であるという事がすぐ納得できた。なぜなら絵の回りを囲む二十の目の玉は、自分で自ら手を下さぬとなれば気楽なもので「二本足の馬」に早変り、この野次馬達のうるさい事といつたら、マァ匹適するものがこの世にあるとすれば、選挙に出馬した「候補者」という馬位のものだろう。ヤレ首が長いの短かいの、目が気にくわぬ、口が大きいの小さいの、ばてはマツゲの数まで注文がかかる始末。

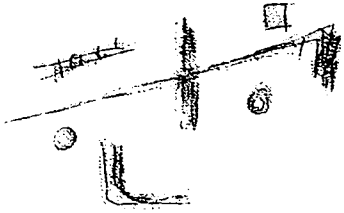
御蔭で、幸（？）にも絵は図案通りに描かれていつた。心もとないローソクの炎と懐中電燈の光の中で額に汗して描いているA君の姿は、十人の債権者の前で、借金の証文を書いている人、あるいは試験監督に囲まれた学生の姿を思い出させた。

A君の大奮闘と皆の適切（？）な助言により旗は立派に出来上り、翌日旗は雲の平に翻翻と翻えつたのであつた。

詩

落し書き

山



西田良穂

太陽が頭上からほほ笑みかける日は

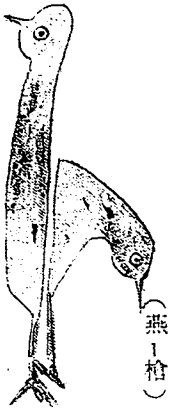
合宿役員の反省

裝備雜感

新谷正喜

夏期合宿をやつてみて感じた事を思いつくままに書き綴つて見たいと思います。裝備の仕事全般を通じて今度の合宿中に果して自分は何故山に登るのかと考えざるを得ない気持になつた。重い荷物を背負つて、テントを張れば忘れものはないかと心配し、風が吹けばポールは大丈夫かと気をつかう。山を降りて裝備を部室に返すまで安心できない。裝備係からしてこれだけの心配をする。まして全行の責任を持つて山に登つているリーダー、サブの気苦労は測り知れないであろう。果してこのように気を張りつめて山に登る事にどれだけの意味があるのだろうか。それが社会に出てからの徳となり、社会に働きかけるよき力を耕うというだけで、そこに山行きの意義を見い出すには何か物足りない気がする。しかし、それとは別に山からおりてくると又無精に山に行きたくなる。そして最近は特に一人唯ぶらぶらと山を歩いてみたい

山に上がるとすべての物がロマンテックに思える。
遠い山、目前にせまる山
青い空、流れる白い雲
すべてが〃オイ、オマエは今しあわせか〃と
話しかけてくる様だ。
汗をかきかき登つて来た道はもう山影に隠れ
前に白く長く続いて延びる縦走路は
〃サーここまでくるんだ〃と
つゝけんどんにどこまでもどこまでも声をかける。
急な坂だ、あごを今にも出しそうだ。
槍が上から高笑いをあびせる。
沢が今にも足をひきずり込みそうだ。
三十キロの荷物がやけた背中にくいこむ。
ふと左を見ると華れんにコマクサが一輪
女王様の様にほほ笑んだ。
僕はただたたずむだけであつた。



（燕―槍）

気持に時々なる。何だか自分で自分の気持がわからない。今度の合宿装備をやつて自分の収獲は今まで生半可に考えていた、この問題をより真剣に考えさせる結果となつた。

これから後は、ごくありふれた事を書く。装備の仕事を通して一番感じることは装備を大切に取り扱つてほしいことである。この事は装備を長持ちさせるのみならず装備係に協力し、ひいてはパーティの安全を守るということになると思うからです。現在ある装備の中で部品を失うとなか〳〵手に入らないものも少くない。特にプリムスの部分品などはそうである。最後に今年の合宿で装備の計算の手違いから赤字を出したことをあやまつておきます。そして今年の装備のやり方にもいろいろ不備な点があつたと思います。たとえば、石油使用糧の計算は全体の装備が全パーティについてやつたらどうかなどの問題です。そして今年の失敗は二度と繰り返さないでほしいと思います。また合宿予算作成の際は、その時の装備状態を調べて装備予算を組む方がより安全な山行きを約束するように思います。

食料係

大磯岩雄

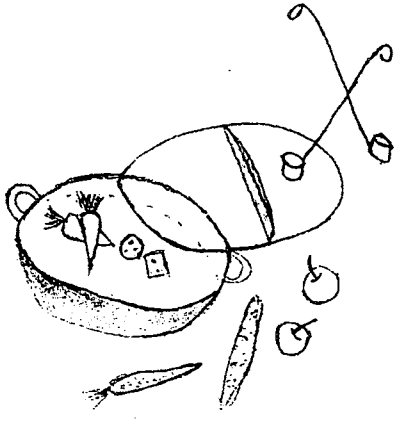
夏期合宿における全体の食糧係を経験した中から、気付いた点を二、三話してみたいと思います。まず初めに全体の食糧係の存在の意味について考えてみたい。当然のことながら、各班には食糧係がいて、その班で要求される食糧係としての仕事を受持つのですが、形式的には彼らの上に各食糧係を統率し、指導する全体の食糧係がいる訳です。したがつて各班の食糧係のよき相談相手となる者、つまり食糧についてのさまざまの知識に通じている者でないと、全体の食糧係というものを置く意味はないと思うのです。もしそれがただ名を持つのみで、実質的にはたいして助言もしてやれずに、すべてを各班の者にまかすというのであるなら、全体の食糧係の存在を疑いたくなります。これは僕自身、そうであつたので痛切に思うのです。今と違つて全体の食糧係にされた当時は僕の不勉強と経験の無さから、食糧についての知識をまつたくと言つてよいほど持ち合わせていませんでした。各班への助言などとても出来ない状態でした。参考書を

すこしかじつてみましたが、とても追いつかない。頼り無い食糧係であつたことを深くおわびします。それと共に、これからの全体の食糧係の人選には、ぜひ一度以上何らかの食糧係を経験した二、三年の方にやつてもらいたいと思うのです。

次に統一食の問題があります。つまり一同に会した場合は、各班平等に同じものを食おうという訳です。これを完全に実行するためには、全体の食糧係がメニューだけを規定するのでなく、統一食を一括して購入し、各班に分担ボッカしてもらい、集中場所で再度集めて六〇人近い人々の食事を一度に作ることだろうと想像します。しかしこれは明らかにムダが出るでしようし、各班における融通もきかないでしようし、五郎班の食糧係も兼ねていた僕には手の回らない仕事でした。このようにしてまで統一食にする必要があるのかどうか、（もちろん合宿においてですが。）一考に値すると思います。ただしミーティングにおけるオヤツ欠乏の失敗、謝ります。助言を受けたらよかつたのですが。

さらに僕の失敗の経験から、これから全体の食糧係になる人に老婆心ながら、付言しておきます。各班の食糧係への伝達をうまくやることです。たとえば今年度のような統一食のやり方を採るのでしたら、プリントを配布してメニューばかりでなくその作り方まで十分に知らせたらいい。（当然でしようが）さらに各班の食糧係は全体の食糧係の命令をキチンと守るべきです。僕が最もてこずつたのがこの事です。各班の者は与えられた仕事に対してもつと積極的であつてほしかつた。せつかく計画を立てても各係が協力的でなければまつたくお手上げです。このことが食糧に関して何も助言できなかつた僕の場合だけで終るのであれば幸いなのですが。

（以上）



合宿医療係を終えて

平賀晶子

合宿に参加するとなると、当然の様に医療係がまわつてきた。免許証こそ持つてはいるけれど、まだ机上の知識ばかり、それも充分なものでなく、実際の経験というたらそれこそ無いも等しい程なので、今でこそいうけれど、一体どうなることやら見当もつかず、不安でしようがなかつたのである。だからくたびれたカツコながら、どうやら駅頭に帰りつき、「遠き山に日は落ちて」とハモツてみると、よくもまあ、何事もなく帰れたもんだと何でもかんでもむやみやたらと感謝したくなるのも、新米医療係にしてみれば無理からぬことといわねばなるまい。体がもとでだということは一般によく言われることだけれど、自然に接しようとする我々にとつて健康の重要さは今更言うまでもないことでしよう。ところがその重要さが時として第二義的になるということも、又ありうることで、殊に合宿などといつた一大行事には参加したい一心で多少の異常はおしてでもと無理する傾向にあるんではないだろうか。以前の合宿で手痛い経験をされた役員の方はその点においては神経質なまでに心配して既往症や健康診断の結果を検討されて、係として大変助かりました。

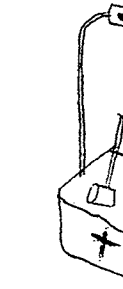
合宿申し込みと同時に記入された、既往症や現在の健康状態などを参考として健康診断がなされた訳ですが、やゝ形式的な感がしないでもありません。現在の項目に更に肺活量、検尿、心機能検査（特に運動時のもの）など、加えたいし、十パ一からげ式でなく、もつと余裕をもたせて個人個人に適したものでありたいと思います。何にも頼ることのできない山での事故に対して、適切な処置が講ぜられる様に、一人一人が正しい知識と技術と学ぶことも大切でしよう。その意味で谷パーティのリーダー、医療係を対称として、医療講習会なるものを前後二回にわたつて開いたわけですが、何しろ山での医療となると特殊ですし、設備の整つた病院でのことを述べてみてもはじまらない訳で、バテてしまつて、死んでも動きたくないという者をそのまま寝かすべきか、それとも力ずくででも引張つてゆくべきか、もし寝かすとすればそのまま死んでしまうのではないだろうか・・云々。

経験のない臨時講師は、参考書片手にほとほと困つてしまつたもので、皆の実際的要求にどれだけこたえられ

ただろうか、甚だ疑問です。又こういつた講習会を開く機会があれば、そのときは、山の経験も豊かな専門家にお願いしたいものです。それにもつと多くの人が受講できるように、又積極的に受講しようとする人があつてもいいと思います。医療箱の準備は、例の如く保健部から貸り出したものに加えて、ビタミン錠、抗生物質、胃腸薬、軟膏、アンモニヤ、湿布薬など、それに風邪薬、ビタミン等の注射薬を用意しました。利用の点からみると赤チン、軟膏絆創膏といつた外用薬は、やはり何といつても多く、又食事摂生が良くないとみえて、胃腸薬が良く売れました。その他風邪ひき、疲労などのため、注射器のお世話になる人も少々ありました。まあこれといつた事故もなかつたのですが、過度の疲労、不眠のため全く食欲をなくして二日程ボーとしていた人がいて、少々手を焼きました。全体的にみて皆薬に頼りすぎるんじやないかと思われます。腹一杯つめこんで、やれ胸ヤケだ胃痛だのといつて薬をのんでいるんですがそれもそんなことを言う人はいつもきまつているようです。なぜそうなる前にコントロールしないのでしよう。誰のものでもない自分の体でしよう。もつと大切にすべきです。

それには日頃から自分の体の状態をよく知つて、あらゆるストレスに絶えうるように、絶えず適応能力を広げる努力が必要でしよう。一部に医療費がかさみすぎたという向きもあるようですが、それは済んでみて初めて言えることであつて、魔法の鏡でもない限り先のことまで見透せないんだから、あらゆる場面を考えて、出来る限りのことはつくすべきでしよう。医療費の行方がすべて有効であつたと言い切る自信はないけれど、それほど医療の面にウエイトを置かれた今度の合宿を有難いことだと思つています。今後も医療費をけずるなんてケチくさいことをいわずに、沢山用意していつて、使つた分が少なければ少ないほどよろこびたいものです

とも角、未熟ながらも、皆の協力によつて、どうやら医療係としての役を果すことができましたが、山についての経験の乏しさ、クラブ員の把握が不充分であつて、やることなすこと尻切れトンボで、まとまりがなく、要領の悪い仕事ぶりだつたと反省させられる次第です。



合宿会計の任務を終えて

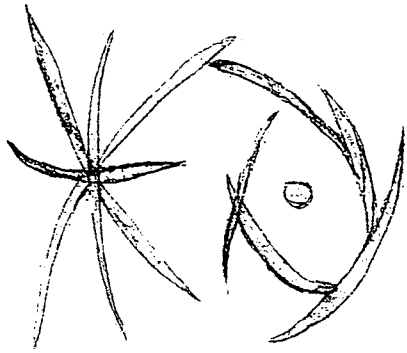
宮保洋子

簡単に大まかにやつてしまおうと思えば、いくらでもそれが出来、又、慎重に厳密にやろうとすればきりがない。まさしくこれが合宿の会計です。私の場合は全く前者に属します。というのは、私は予算編成にタッチしない会計でしたし、話の様子から判断すれば、単に参加者から弐千九百円也を徴収して憎まれ、装備、食糧係から要求される金額を出すだけでした。

しかし、いざ合宿準備が始まると、そうはうまくゆかなかつたのです。交通費は調べればわかりますし、食糧費、医療費は予算内でやつて欲しいと言えばいゝのですが、問題は装備費です。装備費一人二百円という予算は何拠からでてきたのでしょうか。備品の破損物や購入品を予め調べた上の数字でしょうか。というのは装備には石油や、メタノール、ろうそく等、合宿に於ける消耗品もあれば、石油コンロや包丁等、後にクラブの備品として残るものもあるのです。後者の方を購入する際どの程度まで含めるべきかがハッキリしていないのです。勿論私達自身気付いている様に、最近、備品の扱い方が、すごく乱暴になつてきている故、合宿一、二ヶ月も前に調査する事は困難だとは思います。その上、合宿直前に催されるオープン登山が曲者です。パーティ毎に、整理されている装備が、これでもう滅茶滅茶になり、出発前日の装備の争奪戦は見苦しき限りです。従つて次々と不足品とおぼしきものがでてき、出発を目前に控えていては落着いて探す暇もなく、つい財布のひもがゆるみます。ぐんぐん予算をオーバーしていくのに気付いていても、予算にアンタッチな会計は、単なる注告しかできず、いちいち装備係に向つて、買つていいとか、いけないとか口を出す権利があるのかと疑いますし、又そんな時間的余裕もありません。

自分の事ながら、会計報告は誠に曖昧なものでした。何も事故が起らなかつたら当然残るべき予算費が装備費の方に回つてしまいました。しかし、黒字、赤字は前述の如く、消耗品と非消耗品との調節如何によつて、どうにでもなり得るのです。全員参加がたてまえの合宿である以上、装備費はクラブ費から出すべきでしょう。そうすれば、前述の如きゴタゴタはおこらないだろうしその上、合宿費が安上りで参加者も増えるという訳です。

自分の会計報告のチョンボ臭さを楯にとつて、随分言いたいことを言わせていただきました。気づいてみれば新年度の会計という、大役をおおせつかつていました。まるで自縄自縛してしまつたようです。
ついつい調子に乗るのが私のいけないところだと、よくわかりました。



§一人の山行き§

夏の思い出

藤井信晴

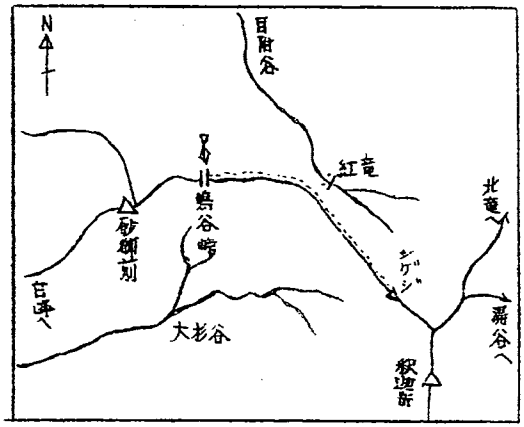
夏休みのある日無精に山に行きたくなつた。帰省してから二十日あまりたつた、ある日、僕は鈴鹿山脈の一つ御在所岳と鎌ガ岳へ向つてふいに飛び出した。毎日の惰性の目的もなく生活している中に自分の存在を確める事、目覚める事。そして、それが僕の生活にある道標となつてくれる事を願いながら。。。。ナップザックに弁当リンゴ、傘、水筒、それだけの持ち物であり山に対する知識も前日ガイドブックで調べただけだつた。五時何分の始発電車で出発し、登り口の湯の山に着いたのが？時始めて一人で始めての山に向う時の気持は心細くもあつたが、とにかく行ける所まで行こうという破れかぶれの心もあつた。鎌ガ岳までほとんど沢登りで約二時間半、初めの一時間程の間は人もまばらに見えたが、その後は全く一人ぼつちになつた。左右から樹木が沢を包み青空も見えない所もあつた。水の流れと時折聞えてくる鳥の声の他は何も聞えない。
一人ぼつちの世界、一人ぼつちの時間を黙々と歩く。

ケルンと誰かが付けた赤い布切れをたよりとして長石谷を登りつめると鎌ガ岳近くなりやつと人声を耳にした。鎌ガ岳の頂上に立つた時うれしかつた。自分の力で未知の山の頂に立つた事が、自分でもやれば出来るという事が改めて感じた。身体にこばりついていた全てのアカが久しぶりの汗で流されたようだ。頂に立ちガスの流れをながめていると、ガス自体が、山自体が一つの生き物であるかのように思えた。沈黙した起生物、一つの山には一つの顔を呼吸を持つている。そして泣く時、笑う時、怒る時もある。しかしそんな感情を表わしても山にはそれに答えてくれるものはない。山は孤独だ、一人ぼつちの山。燕岳で見た停滞したガスと今ここで見る急流のようなガスは本質的に同じでありながらどうしてこうも違うのだろうか。ふいに方丈記冒頭の言葉「ゆく川の流れは絶えずして。。。」が思い出された。鎌ガ岳から二時間ほど尾根づたいに行くと御在所岳に着く。湯の山から御在所岳にロープウエイが二、三年前出来、二十分程で登れるので山頂はハイヒールにスカートという都会風の服装が見立つた。

帰省してにがい思い出の多い中に唯一つの楽しい思い出だつた。

白山バイトの一日

柳川　徹



「起床！起床！」大将の怒鳴る声で我々はいやおうなしで油の切れた目をこじ開けて「フー」と大きく一呼吸して今日もまたかくあらんと思ひつつ、しぶ〳〵腰を上げ、シュラフをまるめるだけで隅によせ、猫よりも悪く顔を撫でず飯を食ふ用意だ。食事の用意は、女子の食事隊がやつてくれるので本当にありがたいと思つた。増してや我々初年兵は平生ならば古参兵よりも先に起きて。というところだが、。。連日の重労働とはいかぬけれども慣れぬ仕事の我々は朝食からもうガツガツで少しでも盛りの多い方に目を光らす。この光景とやら人間の本性ともいうべきか。。。。無心に食事をむさぼり、食後の何とも言えぬ幸福感をしばらくの間味う。一日の中でもこの時が最高であろう。やがて出勤時間となる。

昨日の夕立で濡れたのを再び着る。今日も御前峰に雲がかかつているから雨がくるであろうと思いながらも誰も雨具を持つていくものもない。ナタ、カマ、ノコギリ、クワをもつて山賊の一行が現場へ向う。昨日までつけて来た道を踏みしめて、よくもこんな所に道をつけたものだと自ら感心する。途中で一人二人と列からそれて消えていくのは、キャンプサイドのキジ場よりも朝日に照らされて、絶景を眺めながらキジを射つ心地よさからくるのだろうか？作業場まで本当に遠い。ビークブラジヤー（或る人が命名した）、シゲジの馬鹿野郎を越えて一休止、途中で消えた数人を待つこと三十分、満面に笑みを浮べて全員がやつとのことでそろう。中でも遅いのがM氏か。現場での作業はカマ隊とクワ隊に分れて行う。朝のすがすがしい空気をすいながら仕事をするのは本当に気持がよい。下界の人々よりもはるかにしあわせといふべきだろう。大将の偵察が前を進み、だいたいの目標を定めてあるのでカマ隊は身も埋る様なブッシュの中とか、勾配のきつい所などを刈りながら進む。ものすごく切れるカマなので満身の力で少し太めの木をすつぱり一刀のもとで切つたときの心とか、太い木をノコギリでザザーという音のもとに切り倒すのは何とも言えぬよい気持だ。また白山の熊ざさの大きいのには驚ろいた。自分の背以上で手を伸ばしたくらいで一度その中に入ると歩きにくくてまたカマもなかなか振りにくいのには困つたでもササは、一番カマには切りがいがある。この様に道のない所に新しい一筋の道を切り開くのであるから、この精神たるやニューフロンテアスピリットにつながるだろう。クワ隊の方は案外進まぬようで進むものだ。巻き道をつける時などのクワはたいへんだ。勾配がきついう

えに足場がないので道を切るのは、なかなか容易でない。その上に大きな岩、木の根などがあると全く頭にきてしまう。大きな石を谷底へ一機に転がして気分を晴すこともある。「かあちやんのためなら、エンヤコラ！あの娘のためなら・・・。」とクワを振つたりもした。作つた所を二、三歩歩いてみて快々と進む。時々振り返つて一筋道ができているのを見るのは何となく楽しい。十時と一時頃との二回戦に分けて飯をくう。でつかいにぎりを合わせて五個もかぶりつく。それでも満腹感がなかつたのだから全くあきれてしまう。仕事中にスツパイゲツプが出るという奴が数人いる。これでいても飯となるとガツガツ食うのだ。一人一日六合か七合たべるというから驚ろきだ。五時頃やめて引き揚げる。変な空模様と共に突然スコールの様な雨と雷がくる。「ピカツ」と光つたと思うとズドンと近くに落ちるのが判る。全身ゲツシヨリ雨にぬれ雷の音をそばに聞きつつテントへと急ぐのは全く生きた心地がしない。ナタガマは危いというので置いて行く人もいる始末。テントに着いてホツとする。さつそく着替える。着替え終えた頃に雨がやむのだから憎い。さつそく飯だ。たべることが一番楽しい。連日のブリツジにも飽き早くシユラフにはいり、そこで議論が繰り返される。僕の方は黙つて聞いていたけれども、それも本当によいと思う。中でも「恋愛、自殺」とが度々話題に上つていた。この様に十二日間もすぐに過ぎてしまつたが、僕にとつては、いろんな面で本当によい思ひ出となつたと思う。

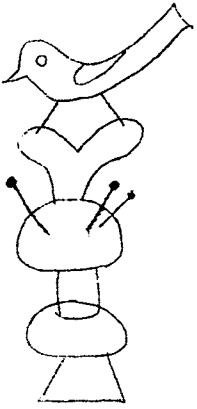
◇北陸三大学合同ワンダルング◇

合ワンをふりかえつて

亀田　武

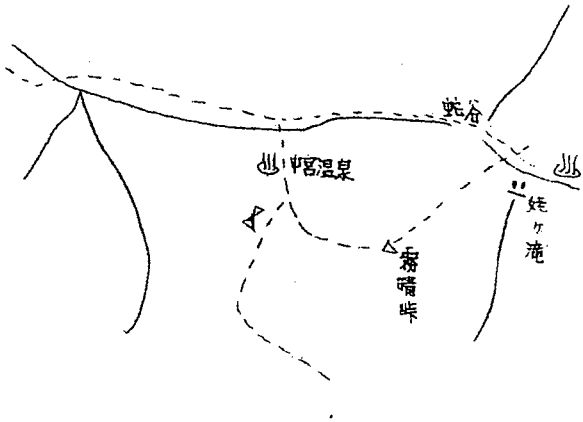
参加者五十数名の北陸三大学合同ワンダリングも迎えて六回目、その内容をふり返つてみると不信に思われる点が多かつた。そのいくつかを思いついたままに書いてみようと思う。

まず第一に開催日の点については八月下旬から九月一日に行われた事が参加者の数や準備の点で多くの問題点



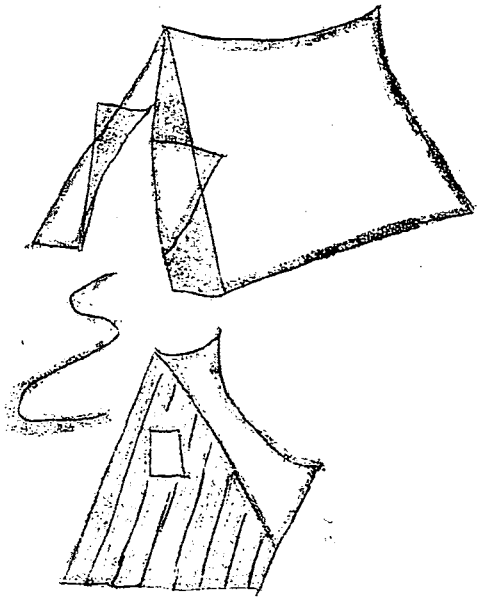
を残したと思われる。富大、福大の方々には九月からの開講に都合が悪かつたと思う。

参加者の数は予想していた数よりも少なく以外に思われたが開講日との関連に於て考えれば当然の事の様にも思われる。何故なら金大だけを例にとれば七月下旬の合宿、パーワンと行事が続き、十分活躍し、九月下旬の前期試験に備えようと思う時期の合ワン、それも合ワン後まだ一週間の休暇があるとすれば、金沢近辺の部員以外は考えるのは当然だろう。



さらに実行委員会としても偵察その他の大切な準備が春のパーワン時や合宿準備時と重なり思うように出来なかつた。この点で他の行事に迷惑をかけた事と思い、この誌上でお詫び致します。

七月の合宿準備期間と重なり、実行委員会としても他



の部員が合宿準備に忙しく、八名がフルに動いてもなかなか思うように進行せず、前宣伝も足りなかつたと思う。その為か一年生の参加が少なかつた。

一方目を当日に向けて見るとキャンプサイドは整つたものの二日目の雨の為いろいろと迷惑をかけ、参加者の方々には準備不十分の為申し訳なく思つています。実行委員会としましても水の状態等については出来るだけの情報を集めたつもりでしたがやはり不十分であつたと反省しています。しかし二日目夜のファイアは今井、沢田両君の努力で新しい趣向をとり入れ、参加者の皆さんに楽しんでいただけたと思います。

その他キャンプサイドまでのアプローチ、行動範囲等の諸問題があるが、参加者皆さんの考えを聞けばやはり一考を要すると思う。

しかしキャンプサイド整備や各係の方々に協力していただき不満足な点が多いにもかかわらず、事故もなく無事に終了出来た事を部員の皆様に感謝致します。

私個人としては実施する以上はより良い合ワンを行いたいと思つていました。そしてその為にはいろいろの忠告や援助、協力を期待していた。しかし実際には私が期待していた援助や協力は期待が大きかつただけに以外と少ないように思われる。

以上は私が合ワンをふり返つてみて思いついた事を羅列したものです。この中には私の日記帳から引用した文もあります。ワンダーフォーゲル部は大きなクラブであり部員も多く、又仕事も多い。合ワンはその行事の中でかなり大きな位置を占めるものと私は思います。これだけに誤解も多い。（おそらく私が誤解している点の方が多いと思うが）この文をお読みになつた皆　んが私の誤解を解いて下さる事を最後にお願い致します。

当日の蛇谷

福田繁機

本隊が蒼くと待ちかまえたように雲行が怪しくなつてきた。招待校新潟を交えた三大学合ワンはジンクス通り今年も雨だ。四月以来、偵察という名目で白山に来る事数度。蛇谷、霧晴という線に決定し、当日のために先発隊は数日前に中宮に陣を構え、キャンプサイド、ルートファイヤーサイト、水場等の整地を行なつたのだが・・・・・。中宮近くのワンデリングに予定変行。

ところで我々、小出、干場氏と私の三人は、コヤ谷に

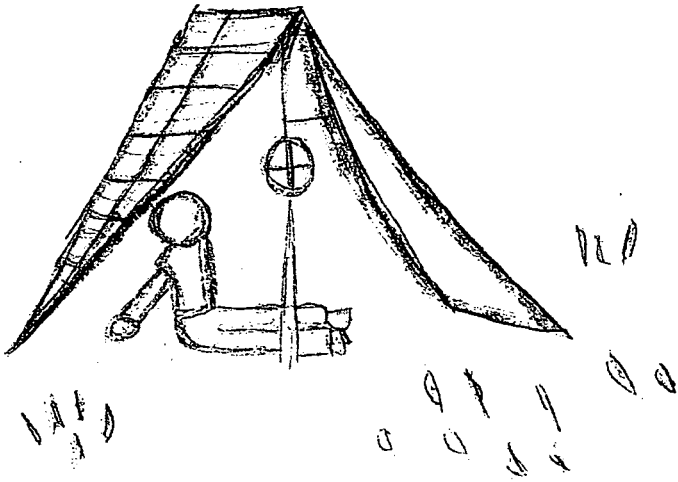
置いて来た食糧その他の改収に蛇谷に入る事となつた。悪天候のため、委員長はじめみんな心配して、色々の事態に接した場合の行動を、再三再四言い含められてテントを出た。わずかに雨が降つていたがそれでも川ぞいに往復の予定を立てていた。沿提まで来ると雨はかなり激しくなつていた。この前来た時には、この沿提の巻き道が分からず、涯を登つてアップザイルで川原に降りたのを思いだす。だがそんな事をしたと思える個所が跡かたもなくなつていて道がつけられていた。けれどもその道もすぐ切れ、川の中を歩かねばならなかつた。渡渉準備を行ない入ろうとする時には、この前のように楽しくは感じられなかつた。今度は水かさがすこし多く、水が濁り、雨のため薄暗くなつた両壁は我々を未地の世界に導くように感じられて、かすかな不安をおぼえた。だがここを通るたびに、自分に何かが身についていくように思える事が楽しみであつた。

さほど時間がかからずにコヤ谷に着いたように思えたが、それでも十時をすこし回つていた。目的の食糧などはここの飯場にあずけてあり、ただ、カラビナや細引が向い側の親谷近くの小屋に置いてあるのだが、最後の渡渉がうまくいかない。ザイルを張ろうとしても、岩板にはレスも見つからず、しつかりと確保してくれる物もなく、水につかつた足は冷さにふるえ、速い流れに足を取られそうになつた。しかたなく小屋へ行く事をあきらめた。そこで、せつかくここまで来たのだから姥ケ滝を見て帰ろうと言う事で、といつても向岸に渡る事も出来ないので（全景は向岸より望まねばならない。）滝の中腹の台に出る事にした。

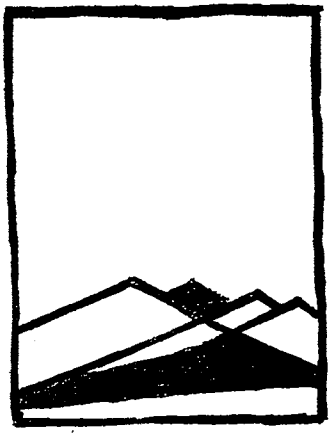
増水した滝はその名の由来通り、姥の白髪をいつそうふり乱してた。この光景を見るのは三度目になるが、感激はすこしも薄れてはいなかつた。岩にくだけた水が飛散し、それが霧となり、我々に覆いかぶさつてくる。豊かな木は深い淵へと流れ落ち、号音とともに谷をうるおしていた。この荘厳さに見とれて身体の冷えるのも忘れていた。別に自分の所有物でもないのに、みんなに見てほしいという気持だつた。

単に三大学が一しよに行動し、他校と交わり、親睦を深め、ＥＴＣ・・・というばかりでなく、合ワンは、受け持つた大学が選んだルートの批評、それが合ワンという行事に適しているかどうか等の評価がなされねばならないと思つている。そんな意味に於ても、ジンクスとあきらめたものの、この雨が うらまれる。飯場でお世話にな

りいざ帰ろうとする段に、ほんの一時間前渡つた二本の渡し木が水をかぶつていた。それもまだ一米近くも下を水が流れていたのに。沢登りの恐ろしさが身にしみてくる。しかたなく霧晴峠を越えて帰る事にした。前回も同じ道順で峠を越えたのだが、濡れた足が重く思うように登れず「バテルというのはムードの問題だ。」と言つて頑張つたものの「やはり俺はムードに生きるのだ」とへバつたのを思い出し一人苦笑した。三時間ぐらいの登りで峠にさしかかつた頃、あざ笑うように太揚がベールのすきからしだいに顔をさし出した。



秋



秋のパートワンデリング

秋の山旅

今井春宵

◇ 河童橋点描

× × ×

河童橋、いい名前だ。この橋に立つと、誰しもが詩人になる。

× × ×

僕は穂高のスカイラインよりも、五千尺のすぐ裏から屹立する六百、霞沢の紅葉が好きだ。一面に燃えるような赤と黄の絨毯よりも緑濃き針葉樹の中に点々として鮮やかなるモミヂに愛着を覚える。

× × ×

カラマツがあんなに黄色くなつてしまうとは知りませんでした。

× × ×

煙の上から梓川の底にイワナが見える時があります。そんな時のこの魚はとても可憐な感じがしますが沢渡辺りで水漕の中に入れられた尺五寸もある奴には恐はくなります。

× × ×

バスの終点のすぐ近く、梓川の河原におりる堤防は、針金の網に丸い石ころをつめてあります。その上に寝ころんで空を見てゐたいと思つたことがあります。

◇ 橋の上の女

風にこぼれる長い黒髪は何という美しさであろう。彼女はそんなにもその白い項にまつはりつく髪をかき上げようともせず絵筆を走らせている。

白い画帳をかかえ込むようにして、橋の右手、三分の一程のところからちつと穂高とその下方に拡がる五段の色彩を追つてゐるその姿に、僕達はほつと安堵する。

ゆつくりと煙草をとりだして対岸のベンチに腰を下ろし、マッチをする。今日はまた秋も終りだといふのに何という暖かさであらうか、河原からは揺々とカゲロウがたち昇り、若い人達のコーラスが聞えてくる。

沢田君も何も謀らないし僕も言ひたくない。ただ僕達は名も知らぬ女学生の姿を観てゐたひあだ。

焼岳の方、梓の下流からサッと吹き上げてくる風に彼女の髪が一斉に顔を覆ふ。はつと我にかへつて、左手が橋を吊つて居る太いワイヤーを握りしめる。沢田君は足がきれいだと言ふ。

橋には次々といろんな人間が姿を見せ、そして消へてゆく。ザイルとヘルメット、手をとりあつた老人夫婦、ワイドキスリングの長い列、色採やかなるスーツの群れしかし乍らここの自然は、それくらひの人間では害ばれない。かへつて、人間に敵対するが如くにその美しさを主張する。

彼女はおびただしい人間に厳そかなる権威を示す山を、谷を木を雲を、優しく抱擁しようとしてゐた。一枚の白い紙は無限に拡がつてしかも彼女の腕の中に在り、彼女の持つ筆は奔放に走つてしかも白い紙の上に在つた。美しい。……。場違ひだけに美しい。……。

どれ位経つたらうか、最後に力を込めて白い紙をトンと鼓き、そして両の腕を平行に伸ばして、後に背り返らせた頭でぢつと画帳をすがめたのち、何事もなかつたやうに橋を左に曲がつて明神に向ふ小径を消へてゆく秋の女を、僕達はあかづたがめてゐた。……。

後を追ふのは止さう。ほんとうに消へてしまひさうな想ひ出にしておこう。

◇ 二重山稜

× × ×

横尾から息もつかせぬ急登にあえいで、後の沢田君を振り向くと、そのとたんに紅葉の谷をへだてた槍ケ岳が黒い影となつてゐた。

× × ×

僕はきれいなものを見ると、誰かにそれを知らせてやりたくなります。木の間がくれに槍が見へた時、後から登つてくる人達に「きれいですね」と言つて、はつとなつたことがありました。

× × ×

蝶の小屋の手前、二十メートル程のところに遭難碑が建つてゐる。黒いケルン。女の人だ。

× × ×

秋の山小屋は牢獄のやうです。だけど人が入ると御殿のやうです。

× × ×

山靴の底に雪を踏むのは気持ちがよいものです。足な

んか冷たくありません。

× × ×

信州側は吹き上げるガス、梓の谷は紅葉と新雪。

× × ×

蝶槍を越せなかつたのは残念だつたと沢田君と話しました。

× × ×

雷鳥、鈴木先輩がいつか「わたりどり」に書いてゐました。本当に夫婦が互いに呼び合つて寄りそい歩く姿を見るのは嬉しいものです。

× × ×

常念の鞍部から頂上はすぐそこに見えますが仲々に長い道のりです。

× × ×

祠、檜造りが常念の頂上に在る。中に雪がつまつてゐる。ガスが冷たい。

× × ×

頂上から頭に来る急降、たちどまる。下から常念小屋、横通、東天井。雪が多い。

常念小屋は気持ちの良い小屋です。

× × ×

◇ 或る単独行者の独りごと

雪が重い。長い道だ。

あの赤いザック、蝶の小屋で逢つたあの二人だ。東京を出てからもう五日、俺も人が恋ひしくなつた。人混みから逃げて一人、この山に入つた俺だのに、この気持ちはどうしようもない。……。

彼等に追ひつこう、あと四〇〇メートル、十五分だ、歩け歩け。しかしまた何て背負いにくい背負子だ，徳本の小屋のオヤジが持つていけというもんだから借りて来たんだが、重い荷物が増々重く感じられる。……。

あのオヤジは本当に気サクな人だ、あれだけ人を信ずることができたらいいものだ。得体も知れぬ俺に留守番をさせて、上高地に降りたままとうとう帰つてこなかつた。俺は狼の声を聞き乍ら小屋の片隅から捜しだした酒を佗びしく飲んだつけ。……。

「こんちわ」・・「こんちわつす」

「今日はどこまで入るの？」

「常念小屋までです」

「そお、僕はダイテンまで入ろうと思うんだけど、この雪じゃあね。……。僕も常念までにす

るかな」
「なんか、大天井はすごい雪らしいですよ」
「そうらしいね……ああ疲れた、だけど君達が踏み跡を残して呉れたんで助かつたよ」
二人は洋カンを出して呉れた。旨かつた。俺達は二言三言謀つた、彼等は金沢から来たそうである。太つた奴等だ。……。
僕等は槍の見える部屋に一緒になつた。俺は誰でも良い、何か話したかつた。しよせん人間なんて一人にはなれぬものなのだろう。俺はいつかまた人混みの中に帰つてゆけるんだ。だから敢えて一人になろうとするのだ。人が恋ひしいから、独りになるのだ。
ちひさな頂きに人の影を認めた時のあの感激はどうだ。人を疑がふ必要もないし、壁を設ける必要もない。一言の挨拶がもう俺達を有頂点にさせて呉れる。……。
「もう二時ですね。」良くしやべる奴が眠そうに言つた。ああ、こんなに遅くまで付き合いさせて悪かつたな、明日は槍までか、のんびり歩こう。

桜貝の唄

一、美わしき桜貝ひとつ
去りゆける君にささげん
この貝は去年の浜辺に
我ひとり拾いし貝よ

二、ほのほのと薄紅そむるは
わが燃る　淋し血潮よ
はろばろとかよう香りは
君恋うる　胸のさざなみ

ああ　なれど
わが想いははかなく
現し世の渚に果てぬ

白山

工学部一年　平木元真

別山

二日目の朝だつた。天気が気がかりなのを理由に早起きを修正。といつても小屋のことだから、ぼく等の寝ているすぐ下では、暗いうちから声がしたので、目はさめていた。ただ起るのが面倒なだけだつた。

だが天気も大丈夫らしいということで、シュラーフをのこのこ這い出し、10センチばかり伸びた霜柱の山路をざくざく、がさごそと別山向けて出発した。太陽はぼかぼか背中を暖めてくれるし、空は澄みきつているし、御機嫌な行動だつた。頂上まで三キロばかりの地点だつたろうか、池を前にし、展望のきく所で、しばしの大休止。右手前に大きく黒々と御岳山がすそを引いており、左手後方には、穂高連山、そのそばに小さく槍も見えた。池には氷がはつていたが、その氷の味は格別だつた。

ここで昼寝して帰ろうかという御大将の御意見だつたが、大勢で登ることに決定、再び歩き出した。頂上まで一歩いや二歩手前らしい峰まできて一休みとなつた。ところが右手側にあつた白い雲が、いつのまにかやつてきたらしく上空は白一色、その空からやがて白いものがちらちら降つてきた。信じ難いが雪だつた。十月中新雪の降るのを見るのは、やはり変な感じ。ここで昼食をとり引返すことになつた。十一時四十五分だつたけ、この時の時間だけ憶えているのは何故だろう。自分にもよくわからない。

とにかく急いで引返した。雪は一時間ばかり降つて止み、陽がのぞき出した。歩くテンポが遅くなり、こちらはしんがりをぶらんぶらんついて行つた。そのおかげで靴の中もズボンもぬれなかつた。トップの稲葉さんはズボンをぬいでしぼる始末、えらい違いだと思つた。これで一つ知識がふえた。もつとも稲葉さんに話したら、阿呆かとどなられたが。

ただ我々が別山頂上へ登らなかつたという事実は公然の秘密で、表向きは登つたことになつている。万一、不幸にして我々が別山頂上の様子を尋ねられれば、皆一様にガスで何も見えなかつたが、頂上には、壊れかかつたチョンボくさい祠があつて云々というだろう。なおこの情報はしかるべき権威ある方から得たものであることを付け加える。

秋山の良さ

新谷正喜

今年の秋のパーワンは十月九日　十二日の予定で、八方尾根を登つて唐松、五竜を経て、鹿島槍に登る予定であつた。九日早朝、我々野郎ばかりのパーティは金沢を立つて糸魚川へ向つた。糸魚川でたいた朝飯からメッコとは先が思いやられるような山行きであつた。

女心と秋の空とでも言うのか、ケーブルで兎平に近づくにつれて、天気が悪くなつて来た。最初の予定では唐松小屋まで行くのであつたが天気があまり良くないのと、水があるかどうかわからないのと、体の調子があまり良くないので　のたりながら、即ちパーワンペースで八方池まで行く事とした。秋山は本当に静かである。今日、出会つた二人連二組のみ。第二ケルン近くで遠くに目的の山、鹿島槍を望み、そして唐松に雪のあるのを知る。予定を再度変更して唐松まで行く事とした。前半のパーワンペースがたたつてかあまりピッチが上らない。途中で寒さにふるえながらたべたリンゴの美味しかつた事、乾いた口を生き返えらせるに十分であつた。四時半過ぎに目的の唐松小屋につく。小屋には人はいなく、二年程前テレビで見た小屋の鐘が印象的であつた。他にテント二張が小屋の向こう方にあるのみである。秋山とは何と静かで心に感づる事の多い事かとつくづく知る思いでキャンプサイドをさがす。

その晩の地獄だきの飯は以外と美味しかつたが悩み多き若者達には感づる所多すぎたせいか、いつものようによくはいらない。台風の接近が気になる。昼の疲れからかニュラフに入るとすぐねむりにつく。翌朝三時起こされて眼をさます。風が強くてフライがはづれたらしい。K氏と外へ出て、フライをはづす。

粉雪が風に舞つている。寒さがきつく、シュラフの中は天国である。九時の天気図を見て、鹿島槍に登る事をあきらめ、正午山を降りて八方池まで降りる。テントをはつて後、遅い中食を取る。少しダベッテ、腹をへらしてから体内消毒をすることに皆で決める。　体内消毒の結果は口の回転の早くなるもの、遅くなるものに分かれたが結局の所はごつた寝となる。その結果真夜中に起きて飯をたくこととなる。その翌日は推して知るべしである。

「白馬が見えるぞ。」の声にも、しばし誰もシコラフ

から出ようとしない。しかしこの日の白馬、杓子、白馬鎗は上は新雪、下は紅葉と何とも言えぬ姿を我々に示した。

その翌朝は新雪に輝く鹿島槍を見て秋山の良さを夏山と比べものにならぬ静寂の中にしみじみと味わったような感じであった。そしていつかあの新雪に輝く鹿島槍を登る事を夢見て山を降りた。

秋の東北パーワン

岩手山

理学部二年　大磯岩雄

十月六日、八甲田連峰の中腹を縫って十和田湖へと向うバスから、すばらしい紅葉にかすむ山々の遥か遠くに孤立した岩手山の特異な姿が黒々と見えた。二、三日後あの頂上へ登るのだと思うと、期待とも不安ともつかぬ異様な感に襲われた。そして二日後、八幡平の頂上からかなり接近してきたにもかかわらずまだ遠く霞んで見える岩手山の姿をまたも見て、この感の深まるのを感じたものだった。干場と僕の東北パーワンの大きな目標の一つはこの山に登ることだったのである。

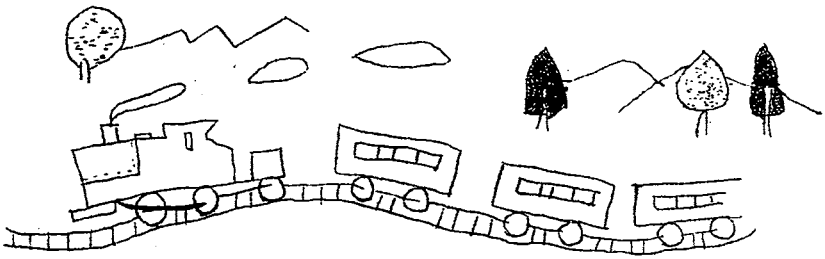
岩手山はその東部の美しいコニーデ型と、その西部の火口の爆裂による厳しい鋸歯状の二本の火口壁から成る複雑な姿をした火山であり、一部からは今も煙を噴き上げている。古くから信仰の山として知られた名峰であり、高さにおいても東北では鳥海山に次いでいる。

さて十月九日、僕等は裏岩手連峰縦走を終え、この縦走路から続いて火口壁を経由して頂上に向うコースで、まず頂上まであと二百米ほどの所にある不動小屋目指して登り始めた。そして調子がよければ頂上を越えてその日のうちに下山することにしていた。アオモリトドマツとダケカンバ、そしてヌマガリダケの密生する陰気な森を抜けて稜線に飛出すと巨大な爆裂火口がグーンとやや左前方に広がり、その向こうに黒褐色の滑らかな感じの岩手山の主峰薬師岳が目に入った。一時間くらいで簡単に行けそうな様子に思われた。と言うのは目前の火口壁を縦に見て、その激しく上下する形が目に入らなかつたからである。だが一旦火口壁上に取り付いてみるとそれは何ともひどい道であつた。地図でおよその想像はしていたが実際は、遙かにそれを凌いだ。火口壁側は多くは垂直所によつてはそれ以上の傾きを持つて深く落ち込み、その比高は最高の所で三百米を越えるだろう。岩の割目からヒョッと顔を出すと遙か下に小さくコメツが、ヒメコマツ等が見えているといつた工合で、肝の涼しいことこの上もないのである。火口壁の反対側もたいしてこれに劣らない。見事なかなりきついスロープが下方に見える雲の下までスラリと続いているのだ。途中から淡緑濃緑の入り混つた針葉樹林が何とも見事に紅葉した広葉樹林に入れ替り、その裾はかすんでいる。見晴らしは最高にいい。しかしどつちに転んだところでまづ命はない。

朝から七時間行動した後の、窒息しかけたような苦痛を感じ始めた足で、左右の様子に感心しながら登り続けた。ところが、火口壁の悲しさ、せつかく十米も登つたと思うと目前の尾根はガタンと下降しているという訳で、いい加減いやになつて来るのである。四、五回もこんな登り降りを繰返した後だつたろうか。最悪の登りにぶつかつたのである。それは左右が完全に深く切れ落ち、ただ白ペンキで矢印のみ記してある高さ五米程の岩塔だつた。真中に四十cm程の割目があるが、三十kgのザックを担いでいる僕等には何の役にも立たない。鎖が渡してあつたとしても、かなり危険な所である。時刻は三時に近く、低気圧の接近で風が強くなつてきている。引返すにしては時間が足らないのだろう。一瞬怒りと後悔の感情が入り混つて、呆然とした。だが時と場合によつては無謀でない限り、危険を冒すのも仕方あるまい。僕は多少精神的な疲労も手伝つて、恐怖をたいして憶えず、岩に取付いた。そして左右のことは考えず、這い登つた。幸いにも凹凸の多い岩の為ホールドは確かだつた。登り切つて、

今までの緊張感が薄らぐと共にこれで頂上へ行く資格を得たといつたような多少誇らしい、嬉しい気持にさせられた。（それにしても道の様子を前もつて十分聞いたりして研究しておく必要を痛感した。一つの失敗である。）それから二十分後、安堵の気持と共に予定時間の二倍もかかつて、やつと荒れ果てた不動小屋に着いたのである。それは一八五〇メートル程の高さにある不動平の片隅に建つ無人小屋であつた。あたりを風と共にガスが取り巻き始め、不気味な程静まりかえつている二人だけの山だつた。すぐ四時になり、干場は小屋の中で、天気図を書き始め、僕は一人ガスの掛かつている中を水と岩手山気象台観測を目指してポリタン二つで外に出た。不動小屋があまりひどいので観測所に泊れるかどうか調べて来ようと決めたからである。無人の観測所は奇妙な姿で立つていて、しつかりと戸締りがしてあつたが、幸い正面のドアだけは開けることが出来た。室内は立派な造りだつたので、今晩はここで泊るつもりで引返した。不動平は薄暮に近く、寒さも加わり、一、五メートル程の高さの繁みの間をガスの群と共に風がビュウビュウと音を立てて通り過ぎる。たつた一人、その中に立つて僕の心の目で見た世界は神秘なまでに不気味なものだつた。完全に人間の存在を無視したこの世界にいて、心は異様に張詰めた。単独行でこの様な状態に出合つた場合の精神的な苦しさを改めて悟つた次第である。そして近くに急にガスの切間から小屋が見えた時、実にうれしかつたことを憶えている。

さて意外に不動小屋到着が遅れた為、二人共天気図を見るまでは今日は不動小屋か観測所に泊ることに決めていた。だが天気図から低気圧と共に台風の接近まであることを知り、協議の末、休む間もなくすぐ下山することに決定、薄暮くなり始めた中を苦痛を押して、ふらつく足でひどいガレ場を急いで下つた。眼下の赤黒く続く森の上では、自衛隊の演習であろうか、砲火の炸裂する音が陰うつに響いている。時折、頂上方向を振り返り見て、時々砂煙をあげながら三合目小屋指して無言で下つた。「残念だなあ、あと二百メートルなのに。」と心の中でつぶやきながら。



東北パーワンを顧みて

干場良平

秋のパーワンに、なぜ東北を選んだか、これは中学時代に和井内貞行の伝説を読み、紅葉の十和田湖、奥入瀬の渓流の良さを知り、一度は訪れて見たいという気持がいつも私の心の中にぼんやりとではあるが漂つていて、この東北行を決心する源となり。十和田湖、八幡平ー岩手山縦走を中心に陸中海岸、平泉、仙台（松島）を廻つて来ることにしました。

このパーワンを振り返つて、僕の印象に深く残つたことは、第一に、人の親切である。陸中海岸の出来事である。附近のキャンプ場でテントを張るつもりで、十六時に浄土ケ浜に着き、吹き寄せる風の強さに驚かされ、今晩は眠らずにポールを握つて過ごさねばならないだろうと思つた。それでも一応キャンプ場がどこに在るか聞こうと思い、食堂を経営している店に入つて尋ねた。すると「今日は風が強くてテントを張るのはひどいでしょう。この土間で寝なさい。」との返事である。僕達はその言葉に従つた。どこの馬の骨とも解らぬ人に自分は店先を貸し与えるだろうか。どうもキャンプ場を教えて、店先に泊りなさいと言えそうもない自分のことを思い、このような貴い親切に対して厚く感謝する次第です。この出来事を考えるにつけ、「人の親切に感謝しない人より、

人の親切をことわる人の方が偉い。それよりも、感謝の気持で人の親切を受ける人の方が偉人である。」という内村鑑三の言葉を思い出し、本当に喜こんでもらえたのだろうかと思い巡らす。

第二、小岩岳附近から見た、岩手山山麓の紅葉です。頂上附近のトドマツの緑から下るにつれて赤みが混り、富士山のように長く尾を引く裾野は紅葉で真赤になり、この光景が霞の中にぼんやりと浮んでいる姿は、日本画を見ているような何とも言えない美しさである。

第三、陸中海岸の浄土ケ浜の美しさです。この美しさは筆では書き難い。一度見た人でないと、解らないでしょう。

第四、遊覧船上から見た、十和田湖に突き出た御倉半島と中山半島の対照的な美しさです。御倉半島にそそり立つ絶壁は、男性的な荒々しさを感じさせるのに対し、中山半島は附近に多くの小さな島を従え、日本の庭園を散歩しているように、女性的、日本的な柔和な美しさを味わせてくれた。

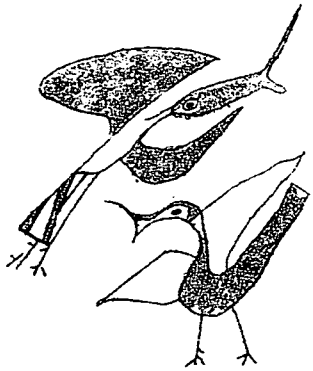
第五、岩岳からの展望は快晴にめぐまれ、大変すばらしかったことです。北はトドマツの緑の八幡平が広がり、西の山々は、紅葉で赤く色めき、東には遠く北上山地山山が浮び、南の山々は、右から、頂上に白い雪を冠つて遠くにぽつかり浮ぶ鳥海、ごつごつした秋田駒、左には秀峰岩手山、此等の山々を結ぶ山々の前に、アルプスと異つた高原状の女性的な山々が連なり、何とも言えない眺望である。

第六、奥入瀬の渓流です。ここは一番期待を掛け、計画どうりに石ケ戸から子ノ口まで歩きました。しかし、期待を裏切られ、大変失望を感じました。丁度、日曜日のため人が多く、道路にはバス、乗用車が群がり、舞上るほこりが僕達を苦しめたこと、紅葉には時期が早かったこと、川岸の片側が自動車道路になっているため、片側の光景が死に、殺風景な感じを与えていること、これらのことが期待を裏切つた原因であると思います。しかし、このコースは歩いてみるべきではないでしょうか。バスの中からでは、双竜ノ滝や銚子大滝等が見られない上、静かに流れる清流・その中にあつて少しも動こうしない小さな島や岩。その上に生い茂る木立・この動・静・生の三者の自然の調和は、大変日本趣味的で今までに見たことのないような天然の調和の美しさを表わしています。この調和の美しさを堪能するには、バスで通る二十分ほどでは、余りにも物足りないような気がします。

第七、改体修理のため取りこわされている中尊寺金色堂のこと、宝物殿のこと。

第八、大崎八幡神社（仙台）のこと、等々。

これらの光景が走馬燈のように、この文を書いている私の頭をかすめて行く。このパーワンは私にとつて総ての面で大変有意義で有つたことを思い、唯一の同行者である大磯君に対し、感謝の念を抱きます。



◇南アルプスパーワンを省みて◇

合津　尚

長い夜叉神トンネルを過ぎると、もう紅葉の世界であつた。考えてみればここまで来るには全く長い道程だつた。高校の時に山登りを志して以来、北岳はいつも私の心の中にあつた。他の山と違つて何か特別にこの山に魅せられたのを覚えている。人の話を聞いては胸をときめかし、写真を見ては遠く思いをはせ、自分で計画を作る事も二、三度あつたのだが、いつも不運だつた。そして遠く金沢に来てからは北岳は全く片思いの山となつてしまつた。だから登山口に立つて険しい尾根を見た時にどうしても現実の出来事の様な気がしなかつた。

いつも登山口に立つと期待と不安の交差した変な気持になるものだが、今度のはまるで見合いに行く様なものだつた。試験直後の弱つた体が気に掛つたが、もうチャンスはないかもしれないし、全員同じ様な条件だから何とかごまかせるだろう。ごまかすと言えば我々が貸切つたマイクロバスに同乗した女の人とワリカンにするのを忘れてしまつた。会計責任者は私ではなかつたが、全く

美人は得をする。顔は特に立派でもないのだが彼女の持つている雰囲気が良かつた。そんな事はどうでも良いのだが、我々は毒気に当てられてしまつて、釣尾根の登りは最低だつた。どうしても一年に一、二回は苦しい登りに出合うものらしいが、昨年の夏にこの道を登つている四十万は道がこんなに遠いのはまるで彼の責任かのように責められたものだ。落葉を踏んで登るにつれ霧雨となつて来た。林の中の為か薄暗く、はるかな谷底からモーターの唸りがいつまでも聞えていた。池山御池小屋は急に広くなつた尾根に裸の木々に囲まれ建つていたが、縞模様に伐採された裏山が夕日に照されて異様な光景だつた。夜、来る途中で採つたきのこを食べたが、林さんの心配にもかかわらず何事も起らなかつた、もつとも顔触れを考えれば何事か起きるはずはないのだが。

予定通りに行動したのは第一日のみで、二日目は八本歯はどうにか越えたけど、北岳の最後の登りでフラッキ、間の岳頂上寸前でついにダウン。トレーニング不足の悲しさ。北岳からの眺望は雲が低くて期待はずれで、苦しさだけがやけに印象に残つてしまつた。何年も前からこの瞬間を夢見て来たのにあまり感動が湧いてこなかつた。でもいつかこの苦しさを楽しく思い出せる時がやつて来るだろう。間の岳にはかなりの新雪があつたので助かつた。林さんと大食漢で有名な四十万がカセ気味で夕食を食わずに寝てしまつたので、十人分のカレーは大半が久島さんの胃袋へ消え去つた。その後どうにかクズ湯だけは喉を通つたので安心したが、こんな状態だと苦労性の者でなくても心細くなる。ここからはどこに下山しても二日はかかるので、南アの不便さが身にしみた。ある意味ではこれが長所なのだろうが。

翌朝人の足音や話声で目が覚めた時には太陽はだいぶ高い所にあつた。テントから顔を出したら目の前に北岳が朝日に輝いていた。この山全体を眺めたのはこれが始めてであつた。行動予定は態の平の小屋まで二時間位どなので、各自のんびりと中央アルプスを正面にして、三千何百メートルかの所で爽快な気分を味わつた。頂上までは十分位ど、始めて南アの全域を見る事が出来た。北アを見慣れた者にとつてどこか巨大な女性を想わせる。不思議な事に雪がついているのは間の岳附近だけだつた。まぶしい太陽を浴びてぶらりぶらりと間の岳を下つた。小屋は馬小屋程度で枯草が敷いてあつて今にもつぶれそうにかたむいていたが、夕方までにはそれでも満員となつた。草原にねころんで真近にそびえる農島を眺めながら

ら休養する。この辺からようやく山を楽しむ気分になつた。床下でネズミが物音をたてるほかに音もなく静かな一日が過ぎ去つた。

塩見岳までの道は平坦で樹林帯は紅葉のはなやかさは失つていたがかえつて落ち着いていて気持が良かつた。天気は良く、体の調子もやつと本格的になつたのでこの辺が今度の山行の圧巻だつた。丸くて大きな南アの山魂遠くかすむ北アの山々、目の前に広がる中央アルプス、大きな広がりを見せる富士山、そして秋の柔らかな日射しに白く輝くススキの穂、今思い出しても夢の中の事の様に思われる。塩見の登りはつらかつたが頂上からは日本中の高い山が見える様な気がするくらい山が良く見えた。頂上でのんびりしすぎて、ついにこの日も予定通り行動出来なかつた。

北岳から聖岳までという欲ばつた計画のなかばで全員の調子が回復せず三伏峠から下山してしまつた。道は予想以上に良くとくに、熊の平の小屋より塩見までではすばらしかつた。

唐松

法文学部一年　伊豫欣二

後立山の主峰「鹿島槍ヶ獄」を目指して、0時59分発の、急行「日本海」に乗り込んだ五人の男がいた。僕とは春のパーワン（大門山）以来、ボッカ、合宿（薬師パーティ）といつも同じの、リーダの紺清さん、サブリーダーの新谷さんは紺清さん以上（なんとなれば、白山でのバイト）にかじみ深い。残るは一年部員三人、柳川、藤井そしてこの俺。柳川は装備、藤井は会計、医療

僕は、食糧、気象ということにあいなつた。野郎計りのところへもつてきて、食糧係の経験者はなしときているので一年三人で、適当にやろうやつてな具合で買出しの前日になつて、今までの食糧計画を参考（結果的にはまる写し）に僕がたてることにした。買出し、例によつて山本と東京ストアーで可愛い男の子が3人と紺そいのお

兄ちやまがバスケットを手に、ブラブラしながら、あちらこちらを物色している姿を想い出して下されば結構。

話を元に戻そう。「日本海」に乗り込んで椅子に長々と寝そべつている人には起きてもらつた。どうにかこうにか乗る。朝のうすら寒い中を汽車は、糸魚川に止まるここで、大糸線の始発まで約一時間ある。控室にて、朝食の準備をする。最初から調子よくなく、メッコみたいな飯になつてしまつた。それでも腹のへつた皆さんは食べてくれた。七時頃、信濃四ツ谷からバスにて細野へ向かう。八時二十分頃、白馬のケーブルにて、ウサギ平へ。ケーブルに乗る前に見えた、白馬三山はガスにかくれて見えない。行動開始、皆快調といわれるようなのは誰も見えない。先日試験が終つた許りの、紺清リーダは、特にこの時がひどかつたとか。五時頃に朝飯だつた為、第一ケルンの少し前でパンを食べる。この後約一時間の大休止（これが皆さを喜ばせたのも束の間、苦しい目にあわせることになるのだが）。再び八方の尾根を登り進む。やゝあつて南西の方向に五竜・鹿島槍が見える。おつーつと歓声があがる。五竜の頂上附近には白いものが点々と散在している。雪だ。紺清さんが「おー、雪があるな、しめた、行くぞ行くぞ。」ほんの今まで八方池の辺りにテントを張るつもりでいたのに、きよう中に唐松まで行くと聞いて嬉しいやら、がつかりやら。とにかく唐松まで行くことになつた。同じ様なまき道を三度四度くり返して頭にきかかる頃に「唐松小屋まで3分」と赤くペンキで岩に書かれてあるのを見た時は、ほんとうにほつとした。黒部の峡谷をはさんで正面に、剣、立山の山々がその全容をあらわしていた。

その夜は明日は五竜だなと思いながらシュラーフに入る。朝三時頃、起きろの声に眼がさめる。雪が降つているらしい。これで五竜・鹿島槍は駄目になつた。この日は八方池まで戻つて、そこにテントを張る。そこでまる一日の間、週刊誌を読んだり、駄弁つたり、それらにあきたら眠る。こんな一日を終ろうとする頃から、雪が降りはじめる。池まで水を吸みに行く時など、ヘッドランプのあかりの中を、雪がたたきつける様にハイ松に、ぶつつかる。動くのが、おつくうになる。ここでトリスを飲んだことも記しておく（これで僕はますますアルコールが嫌になつた）。翌朝の白馬三山それに五竜。鹿島槍が新雪をかぶつた姿が、素晴らしかつたのはいうまでもない。これを見た時これだけでも来た甲斐があつたと思つた。八方の尾根を転びながらも、どうにかこうにか、又、

八方の小屋あたりまでもどつてきた時、はるか向うに、きらりと光る湖面ー青木湖が見えた。八方・遠見の尾根の紅葉が素晴らしかつたことも付記しておく。

又、いつの日か、五竜・鹿島槍の頂上にたつ自分の姿を思つて再び車中の人となつた。

今年のワンゲル五大ニュース解説

一、山小屋建設遂に本格化す――夢の湖畔にボートを浮べて，ウイヒヒヒヒ・・・・・。

二、部屋の倍増――池田サン喜んで下さい貴方の公約は実現しましたよ。

三、合宿女子パーティ動く――変な男が連日彼女等の後をつけていた。（男の名は・・・・G）

四、女子トレーニング行わる――ワアー　すごい女の子、ああ、グリセードだというのに寝そべつちやつたよ、トホホ・・・・・・・（I）

五、執行部の変革――何だかんだとさんざんもめて・・・・・・・。企画委員会。

紅葉の美ケ原・霧ケ峰

教育学部二年　中山　美津枝

秋のパーワンとして宮保さんをリーダーに、私達七人は美ケ原、霧ケ峰高原をワンデリングしました。

私は前々より、高い山登りよりもむしろ高原へ行きたいと思つていたので、試験最中から心が浮き浮きして待ち遠しかつた。当日マップケースを前にさげて、かつこうだけは一人前にして、高見さんと寮を出た。新入生歓迎会の頃は、まだ恥づかしくつてキャラバンシューズを小立野まで持つていつてそこではきかえたことを思い出しておかしくなつた。とにかく私達は皆に送られて八日の午前十二時五九分の急行で、美ケ原に向かつた。

松本駅より王ケ頭まで、曲りくねつた道をバスは登つた。バスからの眺めは紅葉が美しく、感嘆しているうちにバスは王ケ頭についてしまつた。丁度一時頃だつたので新婚旅行者や、団体客などでにぎわい、ちよつとうん

ざりしたが、キャンプサイドに向う頃はぽつぽつと人影もなくなり、やつと開放された様な気持になつた。

皆がテントを張つているうちに、私と高見さんとは食当だつたので食事の仕度をし、何か目新らしいものをと思つて、ハヤシライスを作つた。（あまり目新らしいこともないかしら。）体も冷えていたので、あつくつて、とてもおいしかつた。ミーティングも、映画、小説、人生論……と話題も豊富に大へん有意義なものであつた。

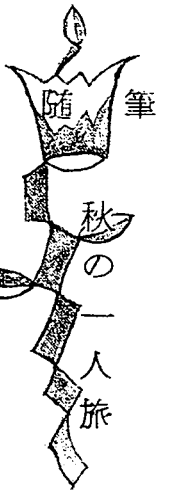
9日は4時起床。冷え込みのはげしい朝で、プリムスが冷えたのと私の腕のまずさが加わつて、なかなかつかなくて困つた。この日は十時間行動だというので、無理をしてお腹にたくさん入れた。キャンプサイドより五分程歩くと、左手に富士山がぼんやりと見え、右手には槍、穂高が威厳ありげにでんとかまえていた。茶臼山への道は四方の峰々が見渡せ、北アルプス、南アルプス、中央アルプスが雲海の上にそびえ立ち、心がおどつた。私達だけで見るのが何かもつたいない様な、このまゝこゝにいたい様な気持にかられた。左右・前後にすばらしい景色をながめながら、茶臼山へ登つた。茶臼山ははげ山で丁度、密田先生の頭でも見るかのごとくであつた。下の方には紅葉した山々が真赤になり全く印象的な風景であつた。茶臼山より霧ケ峰までは、登り、下りがはげしくて足が笑つてがくがくした。下る時に力を入れるせいか足の裏にまめが出来て、足をうかす様にして歩いた。でもまわりの紅葉した木々に、つかれもふつとび、全く軽快な気分であつた。（特にからまつ林は美しく、白秋の詩を思い出させる。）しかもあまり人にも会わず、町でのせかせかした生活が忘れられ、自然の中にとけ込んで行く様であつた。霧ケ峰近くなつて、雨が降り出すと、皆黙々と一生懸命歩いた。ただ早く目的地に着きたい一心でまめの出来た足にも気がかからずに。

途中でちよつと道がわからなくなつたが、どうにか霧ケ峰に着いた。霧ケ峰は名のごとく、雨の為、霧がかゝつてぼうつとかすんでおり、キャンプをしているものは私達だけの様であつた。外は雨がひどく、テントをゆさぶつた。翌日は昨日とうつてかわつて、風雨がけろりとおさまつて、天気が良く、私達を喜こばせた。

雨上りの山は空気が澄んで美しく、富士山も雪をかむつて、前の日とは違つた趣きがあつた。又バスから、四方の山々に囲まれた諏訪の町が見られ、稲田が美しく金色に輝いていた。

上諏訪よりバスにて松本へ。松本から鈍行で無事、金

沢へ到着。紅葉の山々、雨の中での設営など、印象深いパーワンであつた。皆さんもこのコースで一度ワンデリングしてみられるのも良いことと思います。



富田　征也

秋の試験休みふと一人旅がしてみたくなつた。ワンゲルの雰囲気から退却した世界、一人きりの世界に自分を置きたかつたのです。京都、奈良へ出かけました。それには京都の寺が見たいという事もあつたでしよう。洛北の寂光院の静寂の中に自分を置きたいという事もあつたかもしれません。室町時代の枯庭山水や石庭を見、それにひたりたいという気持もあつたかもしれません。

しかしそれ以上の物を僕はそこで得たい。旅において自分自身を静かに見つめ、自分の存在を確かめてやろうという気持の方が強かつたと思います。

京都では良く禅寺へ行きました。石庭を見ながら一人静かに茶を飲む心持ちは得も言われぬものがあります。石庭には禅の精神が打ち込めてあると言います。そしてその説明書もいたる所に書いてありました。しかし僕のような邪念の多い人間にその無の境地なんて到底理解されえるものではありませんでした。だから僕はその石庭の前に座つてあえて無に近づこうとすることはやめました。自分自身でそこに一つの問題を提出して考えたのです。自分とは一体如何なる人間だろうかと、僕を四年間さゝえてきた思想は「何でもやつてやろう。」という事であつた。若い時には若者しか出来ない、いやその時にかならずやらねばならぬ問題があると思うのです。その機を逃がしたら二度とその機会がやつて来ない問題もあると思いますし、また次にその機会を得るのはいつの事やらさつぱり解からない問題もあろうかと思います。ですからそのチャンスは適格につかむ、しかしその機をつかむためにはそれ相当の心の準備がなされていなければいけないと思います。すなわち自分をそのために常に緊張させ、自覚を持つている事だと思います。そしてその問題に対して全精神力も注ぎ込む。その時はその問題しか出来ないかもしれません。しかしその時その問題が自

分に取つて最大に重要な問題であるならばそれで良いと思います。その結果が正しい方向に進むか誤つた方向に進むか。又成功するか失敗するか、その方向を決めるのは自分自身だと思うのです。ですから大切な事はそういう結果をうみ出させる自分自身を磨き築き上げる事だと思うのです。

しかしそこで僕は次のような事を考えていた事がありました。「一つの問題に対して全力をふりしぼつてやつたその結果が失敗しても成功してもそれは結果論にすぎない。全力をふりしぼつてやつたのだから自分はなんの悔いもないのだ。」と堂々と言い切つた事があつた。しかしこれで本当に良いのだろうか。僕は最近まちがつていると思うようになつてきた。確かに物事に対して全力を出してやる事はこれは何をさておき最も重要な事である。しかしその結果失敗した時何故全力を出したのに失敗したのかを考えなかつたならばその問題は完全に終つたとはいえないのではないだろうか。たとえそれが成功してもそれは偶然に成功したのかもしれない。そこでの反省がない限り次への大きな飛躍は約束されないと思うのである。自分自身をその様に客観的に厳しくみつめることそれは大変困難な事である。又自分自身を大いに苦しめる事である。しかし決して逃避してはいけないと思う。逃避して安楽な道へ進んだとしてもその様な問題が再び起つた時又同じ悩みをいだかねばならないではないか。問題解決に早急に答えは出ないかもしれない。しかし僕はそれで良いと思う。たゞその問題から逃避しない限り。

「人間の最高価値は金でも名誉でも地位でもない。その人間の人格こそが最高価値である。」と河合栄次郎が云つた。僕もそう思う。これから社会へ出ていつてからでも。何事から逃避する事なく果敢にぶちあたつていこうと思つている。

雑感

野村孝弘

何故山に登るのだ？。辛い目をして登らなくても、町で暮せるじゃないか。何故野山を歩き回るのだ？。腹がへって疲れるだけだ。と問われたら僕はどうするだろうか。そうしたいから、その方が良いからだ、と答えるだろう。だけど、何故そう答えるのだろうか。

今日のように文明が多大の発展をすると、人は野生にもどりたくなるのだ。ということはその答えとして、よく使われる言葉だ。しかし僕は、文明だか文化だか、発展だか発達だか、どちらだか知らない。だが上の言葉は不確かながらも、ある程度の真理を持つているように思える。真理と言うよりはむしろ、自然の状態と言つた方が良いかも知れない。確かにそうだろうか。僕は自分の、クラブ活動も沢山はやらなかつたので、ほんの少しの経験から察するところだ。人の少ない、自然の中を登り、仲間同士で飯を食う。そして、自然の頂きである山頂に至る。ただそれだけであるが、その中に、町の中では味わえない人情というものがあるように思える。町のように金を出さなくてもよい。互にゆずり合つて必要物を満す。互いにみな、同じ条件の下で助け合いながら暮して行く。誰かが疲れて動けなくなれば、そいつの荷物を持つてやる。それが、町の中だとどうだ。自分の事は自分で行い、人のことまで行なう必要は無い。そうしなければ、生きて行けないのだ。人が下らねば、自分は上れぬ。これが今の社会での法だ。そのために人は、戦う。その社会の中心は町にある。だから、町に居る人は、必要以上の情は持つていないように思える。所が、我々が山へ、野へ出て行く時はちがう、自分に不必要な情でも人に必要ならば、分けてやる。みんな仲間同士だ、というだけだが、それによつて僕は大いに気分が良く、清清しい気分になれる。何故みんな仲間同士なのだというと、それは同じ条件の下で苦しみを共にしているからだ、と思う。

だから僕は、大きく言うと、今の社会で失われた、そして失われてしまうだろうと思われる、不必要な情即ち必要悪に対するものを少しでも、取りもどせたという喜びが、そこにあるからだ。と答えたい。

砂粒

法文学部一年　小栗英二

風に飛ばされてあの砂原からまい上げられてから、もう可成になるがいいかげんにどこかに落ち着かせて欲しいものだ、俺はいつまでも浮んでいるとなんだか体がすり減らされてゆく様な気がしてどうも好かぬ。

あ、あそこに緑色の大きな岩が見える。ぴかぴか光つているからきれいな肌をしているに違いない。ひとつあの岩のてつぺんに坐りついて岩と化すことにしようか、俺もそういつまでも砂粒では居られない。

とはいえこいつはしまつた、スピードがつきすぎていた、転つてばかりいては岩には成れぬ、早く体に合つたくぼみを見つけねばならぬ、こいつは大きすぎてすぐにずり落ちそうだし、これは又小さすぎていかぬ、困つた早く落ちつかなくては。

畜生、いやな風だ、きようはやたらに吹きまくつて俺をじつとさせておかぬつもりらしい。それにしても今度は高く上げて呉れたものだ。雲がすぐ近くに見える、やはり雲はきれいだ、下から見ていても大きな白い綿の様にふんわりと碧い空に浮んでいるのを見上げながら、俺も雲になれたらと思つたものだ、雲ならば誰にも良く言われる事だし……

おや、まだ吹き上げる積りか、雲にぶつかつてしまうーここは雲の中らしい、俺はいよいよ雲になつてしまうのだろうか、でもこいつは妙な気分がする。さつきまでは確か光の中を飛んでいた様だが、ここはぼんやりと薄暗い、それにやけにじめじめすると思つたら体はびしよぬれになつている。

や、今度は落ちる、ぐんぐん下がる、このまま落ちてゆけば池の中だ、池底に沈んで泥になるのはなんとも好かぬことだ。さつきまで俺をあんなに吹きまくつた風はどうしたのだろう。

やれやれ、また吹いてくれて助かつた。

でも池面にうつつた俺の影は我ながらみつともなかつた。いやそれももつともかも知れぬ、やはり俺には俺としての落ち着き場があるはずだ、きれいな岩の上は都合が悪かつたし、雲の中にも住めなかつた、水の中はなおの事、こつちからことわる、あそこは地獄だ。俺がすり切れて粉々になつたら泥にもなろう、それまでは風に頼んで吹きこんでもらわないようにしなくては。

ああ、風もそろそろ静まってきた、また地面にまい降りる頃だ。

多分きようもいつもと同じ様な草のまばらの原つばだろう、仲間がいつも風に運ばれては、ついに落ちつく所だろう、ともかくそこが、風のまた吹く時まで腰を落ち着けて居られる所なのだ。

歓送登山

大崎　進

今年も冬がやつてきた。遠くの連山はますます白さを加え、わが医王山にも雪は積もり　歓送登山をする頃になると、例によつて持病の風邪と神経痛が私の心身を苦しめるので、行こうか、行くまいかと思つていたが、四年生の大部分の人とはもうテントの中でダベることもないであろうし、久しぶりに雪でも見たら、風邪も直るだろうと考え、午后二時ごろ起上つて出発した。

バスの中で久しぶりに四年生の多くの人を見た、皆元気そうで私はうらやましかつた。四年生になると卒論などのために忙しくなり、半OBになつてしまい、あまり部室に顔を出してくれないのはさびしい。又たまに部室に来ても、後輩どものやつていることはじれつたい事ばかりであるし、又知らない人間が多くておもしろくないと思われるかもしれませんが、我々としてはもつと顔を出してもらつて、色々人生経験豊富な所を教示くださるよう望んでおります。一年生が四年生の顔を知らないのではさびしい感じがします。

テントの中では久しぶりにゆつくりとしたミーティングである。他のテントではどのような話をしたかは知るよしもないが、十人張りの方では、まず四年生の人の送別の言葉として、「誠実と正直」「個性を見失うな」「人の良い所を吸収しよう」など実際の体験を通した教訓が我々にもたらされた。その後恋愛論に移る。この恋愛論はすぐ恋愛の部を卒業して、結婚、離婚の部へと話が進みすぎてしまう、少し気が早い連中が多すぎる。次はクラブ論、クラブとはいかにあるか、山に行くということ、特にクラブから山に行くということはどのような意義があるかということについて、まず稲葉、河合（良）さんから話しがあつた後、皆意見を出し合い、午前四時まで話し合つた。又十五人張の方は朝七時ごろまで話をしていたというのだからおどろきであつた。

これからOB、OGになられても、クラブのために、助言、しつたをお願いいたします。

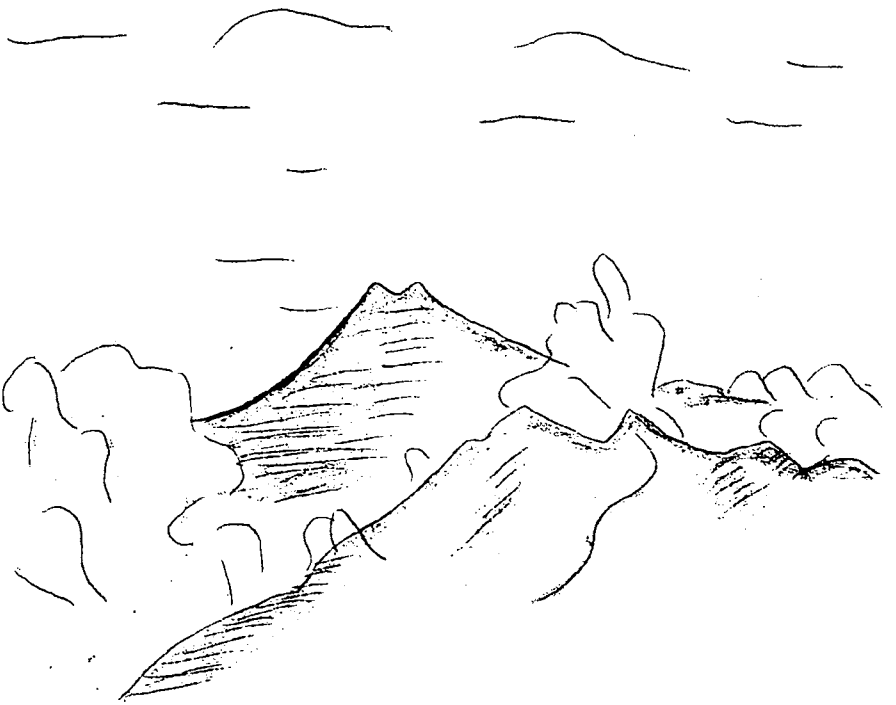
四年間を
省りみて

長そうで案外短かつた

四年間に彼らは、山の頂き、

お花畑、時にはテントの中、　等で

一体何を感じ、何を学んだのだろうか



チヨンボ

堀上　徹

今年は白山へ二度程行つたきりで殆んど行動らしい行動をしないままに終つてしまいそうです。

ですから編集員の方から何か書けと言われても別に取り立てて書く様な事もなく、そうかと言つて日常考えている事を書こうかとも思つてみましたがよく考えてみると何も考えていなかつた様で何も書く事ができません。

そこで仕方無しに昔読んだ串田孫一さんの文章をダシにしてお茶を濁します。

先程も書きました様に今年は殆んど山へ行きませんでした。それは本当に淋しい事です、クラブと縁が切れた位ならまだましですが自然のフトコロに抱かれなくなつたと思うと矢張り淋しい気持がします。でも重い荷物を背負つて山へ行く奴は馬鹿だと串田さんが言われた事があります。「人間のうちに静的な叡智人ホモ・サピエンスと、動的な工作人ホモ・フアベールの区別をした人がいます。私は昔その事を教えられた時、山を歩く人間は行動的な人間に属するらしい事を知つて、すつかり考え込みました。考え込んでも私の頭は単純にしか動いてくれなかつたために、それ以来ホモ・サピエンスの方に何という事もなく憧れるようになりました。

憧れたところで、そのとおりになるわけもありませんけれど、重たい荷物を背負つて山を歩き廻つていては、いよいよ単純になり、いよいよ愚かになるばかりのように思われ、それよりも、部屋に閉じこもつていても考える人になりたいという願いを強く持ちつつ、それが賢明な決意だつたように山から離れました。」

でもやつぱり山へは行きたいと思います。美しい花に囲まれて夢想にふけるとき、それが自分にとつて、単に時間の浪費の外何ものでもないと思われても、そうすることを拒む訳にはいきません。なぜでしよう。

山へ行き始めた頃、私はいつも何か問題を持つて出かけたものです。そしてそこで考え降りる迄には必ず結論を出してみようと決心していました。

それは美しいものを見て唯美しいと感じるだけではなしに、そういう環境のもとでいろんな事を考えればきつと素晴らしい結論が得られると信じていたからです。

しかし、それは所詮欲張りというものですし又自分の

そんな考えが何と青臭いものかと大いに恥かしくなりました。それ以来私は、ホモ・フアベールの方に傾いていつた様な気がします。

これからは山へ行く機会もそうないかもしれませんがでも行く時は動的な叡智人として行きたいと思います。結局それは可能な事だとも思いますし、そうなるためには。もつともつと成長しなければいけないのでしよう。成長といえば次の様な文を引用してみたくなります。

「一切のものが、自分の身に、特殊な力を示しながら圧迫を加えているように思えたり、これ程大きな開放はないと思えたりする。自然に対する複雑な気持をそのまま、どれがどうということもなしにいつしか抱けば、それは、昔の私も抱いていたに違いない気持であることが徐々に分つてきて、その間の私の二十年が、唯人間成長の、あまり意味を持たない横に外れた道であつたような気もしてくる。それともその二十年の間に、何か新しいと言えるような、彷徨の所産が残されているだろうか。私は自分の生活を、幾分かの我慢を交えてふりかえる。また自分の仕事を、可なりの恥しさを交えて辿つてみる。しかし悲しい事にこの自問に対しても私は首を振らなければならなかつた。」

この文章は金沢で生々活を過ごした私にはヒシヒシと胸に迫るものを感じさせます。

でもこんな悲感的なことばかり考えておつても少しも前進しません。ではどうすれば良いのかと自問しても、確信を持てる答えは出ては来ません。

「私は昔の忘却のための山歩きを羨む暇もなく、心は岩のあいだの草花にとらわれながら想い出すのは、過去を重たく背負い続けている私自身の姿である。ただそこで、努力が湧く。努力は、自分を尾根づたいに、また一つの山頂へ運びながら、真摯に妥協を去つたありのままの姿を感じさせる。

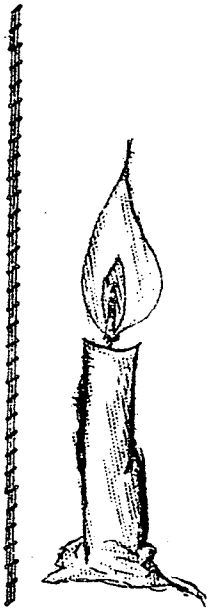
私はそれではいけないことを知つている。あの氷の山頂に立つて、私はただ振り返ることを奪われた一つの動のように、前に向つて力いつぱい踏張つていたい。よろめく私をささえるものは私以外にないことを知つている筈ではないか。

遠く続く、確かにこの足許から続く純白の山なみや、雪原に、私の未来の起伏を感じようそれは私にとつて今を遅らせればもう再び訪れることのない孤独な洗礼である。神のない孤独な洗礼。鋭い針のように痛い風と雪との試練のあとに自ら迎える、洗礼である。」

この素晴らしい文を私は何度読んだか分りません。そしてこれは私が普段感じている事を最もスマートに凝視して書かれています。この後に何を書いても無駄です。

引用ばかりして申し訳ありません「チョンボ」なる所以です。

ろうそくは、そこに三寸あれば、三寸だけは確かに燃えて、あたりを照らす。その律義さは、重みと大きさだけはもと通りで、中味はいつか逃げてしまつているような電池の比ではない。



よき先輩の思い出

山田　允

月日の流れもまゝにたゞ漫然と送つてきた学生々活もあと数ケ月を残すのみ。入部当時のベルクハイム才一号が現在部員間では六百円の高値を呼んでいるとか。あらためてその間に経た年月の決して短くないことを思う。今静かにこの四年間に行つてきた部活動を思い起してみる。山、川、雪、岩、懐しい。確かに懐しい。しかしその思い出は時間と共に薄れてゆく過去のもの。たまらなく懐かしいもの。それは先輩達の思い出。ある時の先輩の一挙一動が、一語一句が、記憶の館に大切に保たれてそれは、時間を経るにつれて美味しくなるワインに似てますます深みを増し、いよいよ鮮かに心に浮び上る。何といい先輩達であつたろうか。どんなところが良かつたのかつて？野暮な質問は止せ。何にせよ彼等は君らの持つていないものを持つていた。勿論俺が持つているというのではない。逆に俺に欠けていたものだからこそ、そんなにも憧れたのだ。先輩達が居なくなつたクラブには

用がない。君達の方でも俺に用なんかある筈もなかろうけれど。しかしそうは言うものの、部室でポカンと坐つていると、思いがけない時に発見して驚く、あのとつくになくなつたと思つていた何かを。そして嬉しくなる。

そして思い直す。俺の方の見る目が濁つてきたのかなまあ、そんなことはどうでもいい。今書いているのは確か先輩の思い出という題がついていた筈だから。しかし先輩の思い出といつてもこいつは難しい。先輩の批評などさらさらできる筈がない。仕方がない。無理をしないでいこう。思い浮ぶまゝを書く。

雪と情熱

映画の題名ではない。あれは「誇りと情熱」だ。A先輩よ。貴兄のことを最初に書こうというのは何ら悪意がある訳ではない。むしろ入部してから初めて強い感銘を受けたのが、貴兄であるからなのだ。雪の夜だつた。あれは最初のコンパの時だ。肩を組み何やらわからぬ事を怒鳴りながら前を行く一団の男達。そしてその中から不意に走り出したと見るまに、両側に積まれた四尺余りの雪山にガバチョとばかりに躍込んだ一人の男。それが、彼を知つた最初である。情熱家A先輩。果して彼の情熱をして雪でさえ冷すことができない程に燃え立たせたものは何であつたのか。

もとより愚かな俺の知るところではなかろう。たゞ知つているのは、雪に埋つた顔と、かすかに動く眼鏡、雪の中からニヨツキリと出て歌に合わせてバタバタ動く手と足だけである。以来四年間彼ほどの情熱家に会うことがない。真に酔うことを知る人に会わない。

愛とは？

愛　何と不思議な響きを持つ言葉であろう。簡潔にしてしかもその中に一切を含んでしまうかの如き広さと深さ。その神秘なるが故に、古来、青年はそれに魅惑され、あるいは、悩み疑いそして恐れ絶望する。だが結局俺には、わからない。とは言つても、実際に確かに愛だと思うものはある。B先輩の場合もそうだ。俺は愛した。そして今も愛している。すべてを。山を愛し歌を愛し芸術を愛しクラブを愛し学問を愛しそして何よりも人を愛する。そして彼は教えてくれた。愛する者はそれ故に愛に対して脆いのだということを。俺は信ずる。彼こそ愛に生きる男だ。もし、これから三十年、あるいは四十年の後再び彼に会うことがあるならばその時こそたずねてみよう。「愛とは？」

鉄人 Ma先輩

俺がMa先輩を最初に知つたのは、俺の二年の時の新入生歓迎会だ。肩幅の広いガツチリした体格。ごつい顔にでつかい眼玉。俺は一目みて、鉄人を連想した。今考えてみると、それはあながち彼の姿かたちからのみ、そう連想したのではなく、直観的に彼の鉄の如き強い意志を感じ取つたのではなかろうか。実際、彼は一種の迫力を持つていた。それは理論でもなく、又物理的力でもないが直接彼と面と向う時にひしひしと感じるところの一種の心理的圧力とでも言えるものである。当時、それが何に由来するものかも知らずたゞひたすら、俺はその力に憧れたものだ。だが、俺は諦めた。それが強い意志力に起因していることを知つたから。俺は意志というものに価値を認めなかつたから。だが、今になつて俺は意志というものを再び考えるようになつた。そして彼の思い出は、ますます俺にとつて重要な意味を持ち、忘れ難いものとなつたのだ。

キジ射ちと先輩

話は変るが山の話となると、キジ射ちの話がでるのは今も昔もかわらない。しかしながら此頃のキジの品質が昔のものに比べて、はるかに見劣りするのは何故だろうか。

才一に当今のキジは香りがない。つまり新鮮味に欠けているのだ。それはキジをキジだけで考えるところに原因がありそうだ。君達は、キジとキジ射ちを混同しているのだ。射ちという言葉は当然その中に射つ主体を含んでくる。従つてその主体に関する考察が欠くべからざるものとなる。キジ独特の香りは、これによつて生れる。奇妙な理屈はこの辺でやめよう。キジ射ちと先輩に関する思い出は数多くそれぞれ先輩達の性格を如実に表わして趣深い。その中でもM兄のエピソードは抜群である。

春山合宿も終りに近づいたある夜のこと。俺達はある小学校で夕飯後の幸福な一ときを思い思いの仕方で過していた。「イケネエツー」ふいに特徴ある声がそしていまいましそうな舌打ちが聞えてきた。あれはたしかキジ場の方角だと思うが。俺達は期待に胸をわくわくさせながら彼の出現を待つた。例によつてボサリと現われた彼は言つた。「暗いもんやから前と後と逆に入つてしもた」あるべき位置に障害物がないのだから自由を得た弾丸は喜びのあまりに、四方に跳ねとんだとか、とばなかつた

とか。察するところ、先程の声「イケネエー」は、予期せぬ現象を目の前にして、彼の口から無意識に発せられた悲痛なる叫びであつたろうか。しかし見方を変えるならば彼は、それほどに演技を知らない人であつた。俺自身、しばしば演技をしている自分に気付いて嫌な気持になるが、彼には、一かけらも見られなかつた。換言すれば、彼はそれを必要としなかつたとも言える。人間の純粋さ、素朴さの素晴らしさを彼は身をもつて教えてくれたと思う。

さて思いつくまゝに勝手な事を書き綴つてきたが、紙面も残り少くなつた。先輩達の思い出は限りなく続くが、今回はこのへんで、とめておこう最後になつたが、原稿依頼の題目といささか異つたものとなつて了つたことをおわびする。

食事雑感

川島　浩

幾年ワンゲル生活続けてみれば、咲く花鳴く鳥そよぐ風、越え行く途中でまず食事と歌うまでもない。山歩きの楽しみの一端は食べることにある。食べずして歩むことなかれ!!まず腹ごしらえをしてから行動せよ!!

小生食欲今だ衰えずと言いたいところだが、すでに峠を越した今でも、山に行くと以外に健在な胃袋を発見して(は)食べ歩きを楽しんでいる。

ここでワンゲルの食糧について書くというよりも、過去、小生のワンゲル生活を通じての出い出となつている食事について二、三記してみる。

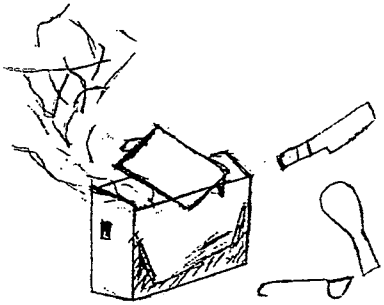
誰でも入部して最初にぶつかるのが焼飯ならぬメツコメシ。初めてこれを口にした時は、さすがに健全をもつて鳴ると自認しておる小生の胃袋も閉口したとみえて、小生をして不平不満でいつぱいにした。しかし、こうした難関を幾度か越え来てみれば不平も出なくなつたから不思議、裏がえせばメツコメシを作らなくなつた部員の腕の上達を証明している。とはいえ、時にこうしたメツ

コも思い出になる。今年の新入生歓迎医王山登山の時だつたかこれでオジャだわ何だか得体の知れぬ代物がつくられ、それをして食事担当の二年生諸君、自分達の腕で成つたもの故「弘法も筆の誤り」とでも言いたげな顔で口を動かしていたのを思い出す。

次に時はもつと遡るが小生一番印象に残つているのが焼鶏事件。事件とは少々大げさすぎるが、一昨年白山合宿のトレーニングのある一斑の出来ごと。場所は蓮尾山杉林の中。時は六月の下旬のある日。ここに我々の総勢七、八人のパーティが到着。その中の一人I氏の背に空の一斗石油カン、その中にニワトリが目をくるくるさせていたが、途中ノドが乾いころうと水を飲ませて元気づてはいた。　それがである・・・・。数時間後に我えの夕食の膳を飾ることになろうとは・・・・。

小生など門外漢はノータッチで済んで、ただ舌づつみを打てばよかつたが、焼鳥担当のI氏K氏はさすがに少々気になるらしい。とにかく、調理人の腕がよいせいで非常な好評のうちに夕食は終つた。夕後の雑談のうちにもむし暑い夏の夜はふけようとしていたが、その時テントの外を何か光るものがスウーと走つた。そしてテントからのぞきみればなんとその場所が昼料理した所。皆、顔を見合せて「ギョ」オソルオソル正体をつきとめ見ればホタルなりけり。かくして杉林の上に夏の夜はふけて行つたという次第。以来小生焼鳥屋のノレンをくぐつたことがない。（付　理由はむしろゲルピンにある。）

さて最後に一昨年山ノ坊でのスキー合宿での一日。我々食事担当斑は早々にスキー練習を引上げて夕食の豚汁の準備に取掛かつたが、その時流行したのが「川は流れる」のメロディー。あの哀愁に満ちた調子が寒々とした山宿での夕暮れになんともいえぬ調和感をもたらしたのである。小生　覚えたばかりのメロディーについ夢中になつて豚肉を大切りのまま鍋の中になげこんでいた。宿の前方にその雄姿をみせていた雨飾の山もいつしか闇の中に消え去つて行つたがそれと同時ににぎやかな山宿の夕食が開始されていた。



ワンゲルの歴史と関係あるようでない話

法学部四年　宮村宣雄

書き出しの難しいのは何の場合でも同じで、前置きを少くして、その次といこう。

なぜ、今のこの心に若い日の紅顔が帰つて来ないのか。大学入学＝ワンゲル入部、紅顔から黒顔、ついには鉄面になり、もうすぐワンゲル卒業とともに、学校側も、「僕達」を卒業させるのに一生懸命である。

もはや丈夫な根で支えられなくても、それ自体の重さでしつかり立つているワンゲル、しかし、ひびが入れば一寸した力で十分割れる。このようなクラブ、このクラブの機能が充分発揮さるべく選択され、変化してきた直接的、物質的、種々の被使用物、及び部員の精神、（つまりワンゲル魂とでもいうもの）、前者については他の人と重複するだろうし、又、それらについて書こうとしても、筆者にはそれらをいにしえのクラブとの面白い話を書く程には思い出もさだかではない。というわけで、感謝さるべき配慮をしたつもりで、後者について、唯思い出るままに連ねるのみ。だがとても部員の精神なんてものを書き表わしているものが出来るとは思えない。

山男の気質の変遷とでもいうのか何とたくテーマになりそう。もつともワンゲルの男を山男といえばだが。

歴史的観察の何となく容易な「所謂山女」の歴史を除外したくとも、このクラブの部員の性格をあいまいに定義づける事を何ら妨げないのだが。

山男は山にいて山男であれば良いので、町にいれば、やはり町男――これが又、はつきりつかめない代物――であればよい。そしてこれが簡単にいつてワンゲルの山男「所謂山男」の一気質をなしていよう。皆さんも、これを守つて立派なワンゲル的山男になる事。

「僕達」がすすめるのだから間違いなし？

先人の名前など出してもはじまらないから出さないが本当に山に行くのが楽しい、自然のもつ神秘性に対し無条件に降服するというタイプは逆三角形的に当クラブにその存在範囲を縮少してきたが、外的又内的な条件があつたのだから仕方がないが、頂点はいつ定まるかが問題

だ。何のためにワンゲルにはいつていると聞かれて、すぐに「何のための『ため』のためにクラブにはいつているのではない。」と答えるのは普通じやないか、そんなのが好きである。備品以外のクラブそのものを利用するのも良い事だし、そんな人間がいれば、その人間には結構であろうし、クラブもそれで、案外かくれた意義をみいだされ結構である。自分もそうだつたかもしれないし、何のことかわからない、云々……

好きだから右も左もみずに進むのである。それが先にいつた逆三角形の底辺形成者達だつたかもしれない。

山ではあまり、キヨロキヨロできない。左右をみる結果、他の人間的生活要因がその人に侵入して、それも山も同等の魅力として認識されず、（つまり同等に楽しむ精神的余裕をくして、）それが決定的要因としてその人をひきつければ、その人は異る山の頂上を征服すべく、望まれた人かどうかは解らないが少くともその山を形成しは出来るだろう。こんな事は所謂、その歴史とは何ら関係のないお話のようである。

ここでは楽しんで書く必要もなさそうだし、少し速度を緩めて歌の話でも一つ。歌とはまことに不可思議なもので、ひとりでに口をついてでる抑揚のある言葉のうちで、最もたわいのないものであるとともに、かくもたわいない人の心（特に男のといつても良いかな？）を嬉しくもさせ、又悲しくもさせて明日の確実な歩調を保障するものもないと考える。「ワンダラー」よ歌えや踊れとは言わない、歌おうではないか（もつとという訳ではない、ただ漠然と言つた）。固い議論や恋の詮索は下界でやろう。もつとも後者は山に来て多少ともロマンチックになれば、したいものではあるが。（詮索といつてもあでもない、こうでもない式のセンサクである。）

山は、歩いて、見て、感激して、食つて、歌つて、酔つてはいけない、寝る、そして起きる。これだけ。

ここで愛唱歌の歴史を云々しようとしても、その当時流行した愛唱歌が何であつたかは問題にせず（本当は忘れた。）、それらがその当時、「ワンダラー」の甘き心のロマンチックなささえとなつていたと簡単に片づけたいのが、タワイのない心の求むるところか。

云いたい事は種々のモノは利用し易いように変つていくが、常に夢みるココロは、そのココロがワンゲルの本質か、群をなして一点に向つて集中するべく変化し、一時期の現状はそれら各々の段階的経過の一場面であり、当然異つたものの集りであり、あの時はこうだ、それが

こうなつたとはいえない程複雑な混合をなしていると思う。そしてワンゲルの歴史の上では、まだはつきりとした変遷を、文に表す程、スッキリとした型でみせていないと思うのだが。

変えようとして変えなくても自然に変わるのかもしれないが、一、二年生はせいぜい悩んだりして下さい。

手の動く通りに書いてきたが、もういやになつたからやめるが、最後に有名な文章を引用して終りたいが、すでに心は失つたものを望み、過去の思い出にふけるのであろうか。

過ぎゆく年は一つずつ我々の幸福を奪う

まあ、一生懸命やるのが一番良い

寝言にも興あるもの多し、いずこかのパーティの到着遅れし時、目覚ませし時は、口裂けてもよう言わぬ人「助けて!!」とのたまわく。さて、常日頃、気弱き人「人来た、誰か来た、コワイ。」と隣の者に抱きつきしなど、いと面白き。白山に道作りのバイトに行きし時などは、「偵察隊が消えた。」と叫びて、他の者共を起こし自らはそ知らぬ顔で寝入る者あり。

ある部員

工学部四年　影近憲一

何かおもしろい話をということだが、きつぱら御膳立てされた行事に参加しただけの僕にとつてはいつこうに話の種になるような事が思い当らない。加えて生来の拙文のために気遅れがして筆が思うように進まない。だから僕のワンゲル生活をふり返つて感じたことあるいはやつてみたかつたことを少し述べて容赦願いたい。

「野山を歩きましよう」のポスターに魅せられて入部して以来三年余の年月が過ぎました。袋の中に投げ込んだままになつている写真がそれを曲りなりにも説明してくれているようです。初めてのワンデリングと言えば、先輩につれられての佐渡ケ島行きでした。経験、装備共に皆無に近い状態でしたから、つらかつたことや失敗したことしか記憶にありません。以来、財布の許す限りあちこちを歩き廻りました。特に二年の試験休みは、二十日間の休みをフルに使つて遊び廻り、僕にとつては、最も有効な最もスタミナのあつた時期だつたと思います。その折、下山する日の朝新雪に見舞われ、その美しさに

冬山にあこがれる人達の心がわかつたような気持になりました。その後はよる年波には勝てず、フレッシュマンが続々活躍されるに到つては、まさに老兵は消え去るのみといつた感じがします。

さて部員諸君はワンゲルに対してそれぞれのイメージを抱いて入部されたことと思います。僕は元来、山、それも名前があるかどうかもわからぬ低い山、をかけずり廻つてこけを捜したり、栗の木をゆさぶつたりあるいは春ともなれば山菜を取りにいつたりすることが好きでした。だからというわけでもありませんが、山へ行つた時直接山で取れるものを食事に加えるのも楽しい事だと思います。いつだつたか、人に教えられるままに若菜を採つてきてスープに浮かせましたが、非常に香りがあつてうまかつたことを覚えています。これも合宿などのような大世帯では無理ですが、パーワンなどに大いに利用されては如何でしようか。

次にやりたかつたがついにその機会を得られなかつたものに岩魚取りがあります。これはあくまで取りの方であつて高級な技術を要する釣りの方ではありません。聞くところによれば、今でも手づかみで岩魚が取れるところがあるという。それがある大学のワンゲルの合宿中の出来事だつたと聞き、一度実行に移してみたかつたと残念に思つています。部員諸君でこんな機会があつたら是非誘つて下さい。喜んで参加したいと思いますから。どうもこう書いてくると僕は山男には及び難く、山猿の部類に格下げした方がふさわしいのではないかと思われて来ます。

更にもう一つ経験してみたかつたことは、民家に泊めてもらつてその土地の民俗風習を直接そこに住む人達から聞くことです。先日、目的遂行のためにある山村をまわり、二三軒の門をたたいたのですが、体裁よく拒られその目的を達成することができませんでした。不徳のいたすところでしようか。

終りに、ワンゲルは僕にとつて非常によい勉強の場であつたと確信でき感謝しております。ただもつぱら楽しませてもらうだけで何らクラブのために尽さなかつたのではないかと思われ心残りです。これも不徳のいたすところかも知れません。一層クラブが発展することを祈つて筆を置きます。

今と昔

法学部四年　稲葉正己

〃部の変遷について書け〃という事なので、部の備品、部の雰囲気などについて、一年部員の頃と比較してみたい。最近まで役員をしていた関係で、そういつた御点からの話になつてしまい実に退屈だろうと思いますが御容赦の程を……。

先ず備品についてであるが、我々の入部当時は全くお粗末なものであつた。数も少かつたし、質の面でもお世辞にも良いとは言えなかつた。我々と一緒に百名近く入部したため、当時の上級生は、歓迎会や合宿の装備調達に苦労した様である。テントなどは殆とんど県の教育委員会のオンボロを使つていた。お陰でテントの内側から新聞紙をはると雨がもらないことを知つたが。

ラジュース類も殆とんどなく、合宿では一パーティに一台がせいぜいで、しかもいずれもメイド・イン・アチヤラの中古ばかりであつた。英語とラジュウスの使用法及び修理方法を同時に学んだ訳である。とにかく備品に関するかぎりこんな状態だつたから、備品は非常に大切に扱われていたし、備品を買つた時の喜びは大きかつた。また、現在部室の隅に放りだされているボンコツの備品の一つ一つに幾つかのエピソードや思い出がある。それに比べると現在では、量的にも質的にも、相当備品は拡充したがそれを十分に活かしきつていない。書物が私物化されたり、部品がゴミの中に混じつているのをみると残念でたまらない。備品の変遷は、簡単に言うならば〃貧困の時代〃から〃豊富の中の貧困（？）〃の時代への移行である。とにかく備品は大切にして欲しい。

食料、一般的に大食いであることに変わりはない、食料そのものもあまり変つていないが、最近味を重視する余り、カロリーの面が軽視されすぎてはいないだろうか、しかし、ソウメンのダンゴだとか、炭化米、フラパン入りのキジ飯、未完成のゴハン等々妙なものを食わせられる危険が少くなつたという利点もある。

山の歌、我々が〃二年のガキ共山の上……〃などと歌つていた頃はレパートリも狭かつたが、年を追うごとに色んな歌が取り入れられた様である。現在に比べると当時は数少い歌を〃ダラの一つ覚え〃の様に良く歌つたものである。山男にさえならなかつたらM・M・Kであるかの如く〃どうせあの娘はお嬢さん、オレハ……〃

ホレて欲しくてたまらないのに〃山男にやホレるなよ〃などと。最近はそれに比べ、歌を忘れたカナリヤの様である。良し悪しは別として寂しい気がする。

部員の性格、一般的に、底抜けに明るいのは同じである。特に、会合の時に、冗談を言いながらも物事を決めてゆくあの明るさはいつまでも維持したいものである。フマジメだと怒る人もいるが、御前会議じゃあるまいし、気楽に考えて欲しいものである。しかし、部員としての真剣味（＝自覚）、連帯意識等がうすれて来た様である。

これは部の基礎が固つたという心のゆるみのなせることかも知れないが、厳しく自戒しなければならないことだろう。

ワンゲル珍料理

一、サンショウウオの黒やき

先ず、渓谷に遊んでイモリを探しましょう。いいですか小さな水溜りを選んで小石をとりさすと、小さな奴がチョロチョロ泳いでおります。軍手に入れて持ち帰りましょう、水がなくてもしばらく生きております。

さて、とりだしたサンショウウオはべつとりとしておりをする故、塩をふりかけて更に水で洗いザルに入れておきます。フライパンに火が通りましたら、よく水を切つてその上にのせ、コンガリと焼いて頂きます。この際、化学調味料を少々加えていただきますと、一層うまく仕上ります。

けい、おいしい栄養料理ができ上りました。生のおしょうゆでお召し上り下さいませ。ナホホ

創作

眠りは……

工学部三年　河合良太

全身にぐつしよりと寝汗をおびて目を覚ました。六条梨香は秋深まる山の寒むさも手伝つて、それ以後、清浄ケ原が闇の中より姿を現わすまでは眠むられなかつた。眠むいようで眠むられず、起きようとすると眠むくなるといつた空虚の中をさまよい歩きながらシュラフの中に横たわつていた。秋の深まつた岩間道、今だに人を見ない清浄ケ原にやつて来た梨香はすでに三日を経過していたが少しも不自然さを感じなかつた。白山に夢の全てを投げ入れて歩いた過日の思い出だけが脳裏をかけめぐり五体は思うにまかせなかつた。

匂のほのとした新緑の燃え出ずる感情も秋深まる紅葉の激動に打消され再び無味乾燥とした朝を迎えようとしていた。毎日見る夢は決して梨香の心をやわらげるものではなかつたが彼女の心の奥底にあるものをとらえずにはおかれなかつた。

新緑のあわい中で生まれた心のときめきがギラギラする真夏の太陽の下で育つていた。白山の弥陀ケ原でのワンデリング。未宮真三郎のたくましい体力と精神力の厚いベールに包まれて此の世に生まれ出た喜びに始めてひたつた。子供の頃の喜びとは違つたものだ。

「山！あゝ、なんと素晴しい所だ」と胸の中で何度もくりかえし、色あざやかな「しなのきんばい」の花をふつくらとした手に入れて真三郎にさし出すと、

「しなのきんばいか、幾達の友なのだから此からは決して取つてはいけないよ。」

真三郎の笑顔の注意に梨香はにつこりとうたづいた。ともう、百米の向うのお花畑けに立つて真三郎を招いていた。こんな梨香を真三郎は可愛いくもあり、いじらしくもあつた。

真三郎は昨年の冬、五竜岳で親友一名を失い、その傷心のいまださめやらぬ時、梨香にせがまれての白山登山である。真三郎にはそれ以来初めてであり、梨香にとつては生まれて初めての登山なのである。砂防道の登りの苦労も忘れたように梨香は南竜ケ馬場、御前峰それに弥陀ケ原と真三郎をひつぱつて歩いた。残雪の水の冷さ、花の原色、空の美しさ、何もかもが梨香の心にひびき、下山日程の変更を真三郎に云つたが、全く受けつけられなかつた。清浄ケ原ヒュッテの一泊が最後の山の夜であ

る。からりと晴れ、雲一つない空には一面にばらまかれたダイアの如く輝き、冷え込みもきびしかつた。あたたかいコーヒーをわかし、残りの菓子に舌鼓を打つて最後の山の味わいを真三郎の昔の山話をまじえて、ややもすると梨香は真三郎との生活を思い出し勝ちに楽しく過した。この雰囲気にシュラフに入つても眠むられなかつた。山の夜は静かだ。真三郎の寝息が聞えなかつた。

「真三郎さん」と梨香が声を掛けるや否や「梨香」と云う返事と同時に重いものを感じ取つた。

地獄谷からは風が鳴いていた。

それ以後、真三郎は山へは久しく行かなかつた。梨香は時々真三郎に会つたが山のことは口に出すことはなかつた。彼女の心の発散と外部から来る理の葛藤によつて話題は日常茶飯事の事であつた。そのくり返しにあきたらず梨香は自分の学問に対する熱意と共に離れ始めた真三郎への愛を感じ取つた。

真三郎が山へ再び行き始めたのもその頃からであつた。真三郎はこの梨香の心の動揺に耐えられず、大自然の中に入つて自己の場所を見付けようと思つたにちがいない、急な山道に入つても真三郎は自問自答を続けた。

「自分に偽りがあつたのか」

「いや、ないのだ」

「梨香にも偽りがなかつたのだ」

独りでなし得ない問題なのであろうか、真三郎の生来の強情でもつて他人を引き入れようとしないことで山に来たのだ、急勾配の山道に苦痛を身に感じ始めていた。

山から帰つてもすつきりとした様な、しない様な気持の所で突然、梨香から親元で結婚話を進められていることを知らされた。その相手というのが真三郎の将来にとつてライバルともなるべき経営マンのバリバリということを知り、激しい嫉妬と闘志が湧いていた。真三郎と梨香との間のジレンマを速急に打開しようとする所には大きな楔を打ち込まれた形となつた。

「梨香ちゃん、僕の事に不満があるのかね」

「・・・・・・・」

「別に悩んだり、気を沈めることもない僕が梨香ちゃんに云つた二人の夢を立てるために経営学に専念しているんだ。僕が先に卒業するからと云つて心配することはないよ。月に一度は金沢に来ると約束したんだろう」

「真三郎さん、その事は判つております。」

梨香は真三郎の言葉に対するものではなく、近頃の彼の行動に対して不安がるのだ。初めの頃の真三郎の姿は

今では幻影となつている。然し、梨香は愛とそのあかしにより真の梨香の真三郎を見なかつた。再び輝く光ではないのであろうか。その不安の為に親の勧める結婚を受けようとする心の動揺の中に見合の相手、松平靖彦から直接の申し込みを手紙で受けた。始めは他人の如く身に感じていたが、その秋の休みに帰省した折、始めて松平靖彦に合い思いも寄らぬ感覚を知つた。最初は真三郎を少しからかつてやろうというチヤメツケでしたのだが。

金沢に帰つてからの梨香は真三郎を何かと遠避ける様になると逆に真三郎は梨香に対して論しが増した。見合いした事実を真三郎が友人から聞いたのは梨香の帰沢後数日たつてからである。真三郎は梨香を激しく責めずには居られなかつた。

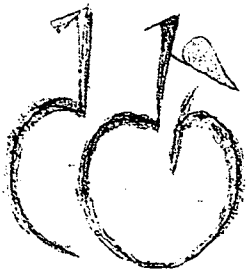
（梨香を責めてはならぬのだ。梨香の行く所を失わせてしまうことを思いながら）

真三郎の中に梨香を抱擁する最後の愛のあかしも全てが煙の如く消えることを解せず次第に縛り始めた。そんな真三郎を嫌いながらもいつにか引き込まれてゆく自分を梨香は耐えられなかつた。

そんな毎日を過している内に梨香の立場はうずしおの中に入り込み深く深く沈んでいつた。

最後の喜びを味わう為に真三郎との思い出の地、清浄ケ原に来た。ここにだけは真三郎さんが居る。と思つて来たが、梨香の心は少しも開かない。全てが終つて欲しいと願い過日の思い出を味わいながら四日目も終ろうとしている。自分を祈る夕食を一人でささやかに終え、真三郎に最後の手紙を記しシュラフに入つた。山の静かさは重く梨香の身に掛かつて来る。ブロバリン三〇〇錠入りの瓶の蓋を開けた。

窓の外が一面の銀世界となつた頃には梨香は帰らぬ旅路を急いでいた。



大学院一年生

鈴木正国

独身の部（Bachelor）は、無事卒業致しましたが、僕はまだ学生で、東工大大学院にいます。お江戸の食事が悪いのかワンゲル一の体重を誇った肥大漢も、スマートな、やさ男になり下りました。でも社会の荒波にもまれているわけではないので、一席弁じる種もありません。

それで、大学院の宣伝と、体験談を御報告することでお許しいただきたいと思います。まず大学院については今迄あまり知られていませんでしたが、最近は非常に、志望者が増えています。旧制大学のたかでは、学部により、1/3ないし1/2位進学するところも珍らしくありません。向学心に燃えた人は勿論、功利的に考えても、進学は有利な事柄になりつつあるようです。僕のような怠け者で、成績不良児、精神薄弱児、虚弱児童は、進学すべきであります。おかたい話は、これくらいにして次に移ります。

僕は、アルバイトで、女子高校〇〇学園の非常勤講師をしていました。こちらでの生活は、自由でアカデミックな雰囲気で、毎日が充実しており、楽しい日々ですがそれに女学校の先生ときては、張切らざるをえません。

これは、某研究室の人から話を、持ちこまれたのですが、その時は、生活費が、贅沢のせいもあるが、高くついて「ヲ」を上げていたときで、おまけに奨学金は、今年修士一年が百六十九名で、内四〜五十名しかあたらないという話で、然も入学試験の成績を、参考にするというのでは、淋しくなりますよね。「チクショウ、ドイツ語が、もう少し出来ていたらなあ。」と思つても後の祭です。

こういう時に、このうまい金になる話。これで僕が、単なる△口心から女学校のセンセーになつたのではないことが納得いただけると思います。尤も、悪運強く奨学金は、もらいましたが。毎月一万円で、七月に四万円が入つたときは、いい気持でした。

現在、高校のカリキュラムが変り、理科系教員の不足は、ひどいそうです。〇〇女学院でも、ご多分にもれず教師不足で、僕は、数学教師を、志望したのですが、物理教師が絶対的に不足しているからと、校長さんから強く頼まれました。（物理は厭だとゴネタので、校長さん

は、ここで逃げられては、大変と、手をワナワナふるわせ、いや高血圧のせいだつたかな。）これは、然し幸運でした。というのは、数学だと、いつも、試験をしていなければなりませんが、物理は定期試験だけでＯＫです。怠け者には、もつてこいです。

さて新任の挨拶のときは、何ともはや心臓の弱いところへもつてきて、乙女乙女と、見渡すかぎり花の乙女！いかがあいなつたか、御想像に任せます。私立の学校では、定年後の先生や、中年の覇気のない人、さらに足りない分を、定時制の先生を、講師にしたりしているので若々しい空気に欠けています。女生徒は、若い先生を、求めています。そこでハツラツとした若い先生が、乗りこむと、、、、、、あまり下らないことは、これ以上いわない方が、よさそうですな。

授業は、やはり最初のうちは、苦労でした。教職単位は、とつてないし、黒板に書く字はなつていないから冷汗の連続です。然し女性は、全くよく筆記しますな。黒板に書くことは、全部筆記しますよ。時々、おかしくなりますね。それに全ての目が、自分に注がれているのは、何とも妙なものです。それも、全てを吸収しようという気概の目です。うつかりしたことはいえないし、そうなると余計緊張します。生徒は、都合が悪くなると、前の人間の影に隠れて、うつむきますが、身のかくす所のない黒板の前で、赤くなつてウロウロしたこともありました。一度などは、気圧計の説明の絵が「ヤンゴトナキ象徴」に似た形になりました。生徒達は、上目づかいに、僕の顔を、うかがい、隠微な、ワライを洩らしました。暫は、気がつきませんでしたが、一瞬顔から血ノ気が、ひき、すぐ耳まで真赤になり、・・・・・・・・・・・・・

芳紀まさに17才の乙女達も、意外と、何でも知つていることを、認識しました。「下らない話は、我々「オノコ」の専売特許ではないらしい。またこんなこともありました。センセーが、廊下に立たされるのです。というのは、体育の次の時間だと、教室は着替の最中です。戸を開けて一歩教室に入ると、突然黄色い悲鳴、かくてお化粧がすむまで教師は、一人ポツネンと廊下に立つわけです。

どうも下らないことばかり書きましたが、教育のむづかしさと重要さは、身に滲みて感得されました。一のことを話すには、十の知識が必要だというのは本当です。説明するのになんでもないことでも、ちよつと怪しい点があると、もうどことなく自信のない説明になります。充分の知識と、話術、熱意がないと、生徒達をひきつけ

ることはできません。教育の場というのは、一方的に、与える場だと考えられますが、教師の側も非常に教えられることがあります。多勢の人間の心理状態を把握するテクニックや、女性に対するタブーの数々。教室の中で一点ばかり見つめてはならない。女性とは限らないが、人前でミダリに、ワイセツなことを、口にしない。間抜けな顔でも、時には、締る必要がある。さらに、女性の心理は、微妙ですから仮にも、その誇りを傷つけてはならない。等々…例えば、問題をやらせて、できなくても、問題のせいにするなどです。僕は、黒板で問題を、やらせていて、一生徒に、ちょっと強くその間違いを、指摘したことがありました。すると彼女は、突如身をひるがえして、自分の座席にもどり、うつむいていましたが、そのホホには、大粒の涙がつたわり机の上にポトリ。僕は後悔の念とすまない気持になりました。然しすぐ傍により、余りにやさしく慰さめることは、大勢の生徒の前では、教育上よくない影響を与えます。教師は何事にも慎重であらねばなりません。(笑わないで下さいよ)

残念ながら僕は、十月の半ばで、本職の方が忙しくなったのでやめましたが、最後の授業の時は「センセーやめないで下さい。」などと生徒からいわれ、「俺は、そんなに慕われていたのかな。」とうぬぼれたりしました。職員室で、机を整理していると、生徒の代表が記念品を渡しにきたときは、全く泣けてくる気持でした。急にやめるのが、惜しくなり、去り難い気持を整理するのに骨を折りました。いいかげんな気持で始めたのが、逆に生徒から強い印象を与えられていたわけです。やめて数日後、今度は他のクラスから、「寄せ書を」送る。また学園祭には招待するから是非きてくれ。」という手紙がきました。(本当です。)

「ワンゲルには、色男多しといえども、僕のように多勢の女性から、かくの如く慕われた男は、僕の前になく、僕の後にもない。」ことを確信しています。(誰ですか笑うのは)

教師を、一生の職とする気のない人でも、一度は、女学校の先生をしたいと思いませんか。そういう人は、どうぞ大学院へ!

記念品にもらった「ロダンの考える人」の小像は、今日も僕の机の上で考え続けています。

筆

視覚的印象と聴覚的刺激間の連繋作用に関する物理学的一考察——「立山行」

工学部四年　山下紀久夫

随

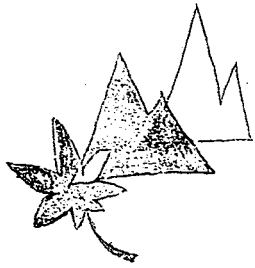
これは随分古い話である。第一回の夏山合宿に立山に行つたが、あの時、みくりが池でテントを張り、三日目に五色ケ原に向かつた。その途中竜王岳、獅子岳等を越えていつた。なにしろ生まれて初じめての本格的な山行きであり、目にする全てが珍しく、美しくそれだけに感じ方が印象的だつた。又肩に加わゝる荷の苦痛も極めてきつかつた。その径は極めてガラガラの岩の径で、径と云うよりは矢印に従つて岩の上を時には這い、又時には岩から岩へと跳びつゝ進んでいつた。しばらくの間だつたが、やゞ屋根や、ガレ場のザラ峠を越えて五色ケ原に着いた。着いた頃には全員くたくた、もう夕闇も間近で先に着いていた附近のパーティからは夕げの匂いが我々の鼻をわずかに刺激するのみだつた。その頃下界では皆殺しの歌」と云う殺伐な題名の歌が流行していた。但し私は、その歌そのものも知らず、又その題名がそのメロディーである事を知つたのは、ずつと後になつてからの事である。題名とは似合わず静かな曲で、トランペットで奏でる低いソロの部分は特に私は好きである。音楽にも造詣の深い皆様方は、御存じだろうと思います。御承知の通り映画「リオ：ブラボー」の主題歌である。だが私はこの映画を見なかつたので、この曲が映画のどんな場面で流れたかは知る由はない。唯この場合、私がこれから語ろうとする事は、見なかつたために、或いは題名も知らなかつたために云える事であるかも知れない。間もなく合宿が終つて下界に下りてきて一ケ月も経つた頃、夏の終りとは云え太陽はまだ高く、ぎらぎらと光る中を、ぶらぶら歩いていた。その時町角のどこからともなく流れてくるこの曲を耳にした。(多分初めてであろうと思う)

その時忽然として一ケ月前の合宿での五色ケ原に行く途中、重いザックを肩に疲れ切り、自分の身を一歩一歩

とガラガラの岩の上を運んで行く自分の姿が目に浮かんできたのである。それからと云うものは、この曲を耳にすればいつでもこのシーンを思い出すに至つた。イベントはこれだけの事であるが、曲が映画のどんなシーンで流れたかも知らない自分が、この曲を聞く事により一ケ月前の自分の姿を思い出したのである。実に不思議な事である。勿論題名も知らない事は前にも記した。もし知つていたら或いはそれが邪魔をして、思い越さなかつたかも知れない。兎も角こゝで考えたい事は、このいわば視覚による印象が時間的に後から与えられた聴覚的刺激によつて、直射的に前者の印象が呼び起された事である。この間には意識的に何の連繋もない、唯あるのは視覚で捕えられていた印象と聴覚より与えられた刺激である。

もし次のような仮定が許されるとして考えてみると、即ち、視覚に与えられた刺激が視覚神経で一種の電磁波（固有の振動数や振巾を持つ）のような形で脳に伝わつていき、そこで痕跡として止められる。又聴覚に与えられた刺激も同じ電磁波の形で脳に伝わつていく。今の場合、たまたま後から聴覚より受けた刺激の電磁波が先の電磁波と振動数が同じであつたため、一種の共鳴のような現象で極めて短時間の内に、脳の電磁波の痕跡の部分が振動するような状態になり、先の電磁波が再現され、目に浮かんできたと考えるのである。又この時のその鮮明度は、波の振巾によるとするのである。しかしこの電磁波は、個人により又神経の鋭敏さ、情緒観念、諸知識経験又その時の附帯状況及び時間的問題等のいろいろなファクターによりその電磁波の振動数や振巾が異るのである。従つて、各個人により固有の振動数及び振巾となり、それはある人には山の光景を連想させようとも、別の人には海の光景を、又他の人には何も思い越させないかも知れない、がそれらは、単なる振動数及び振巾等の大小に依るに過ぎないのである。又同じ光景を思い起しても、各個人に於いて異るのは、その再現された電磁波の波形が異るからである。以上の刺激より印象を再現するのは百万分の一秒よりさらに短い時間に脳に於いて、コンピューター以上の速度で以つて数多くの前者のファクターについて次元解折がなされ、その結果振動数の同じ電磁波の痕跡を見つけ共鳴し刺激に対する印象が導き出されるのである。今の場合聴覚より視覚への作用であつたが、当然逆の場合も当てはまるだろうし又聴覚から聴覚、視覚から視覚への作用の場合もあるだろう。以上の理論により何の関係もない一映画の主題歌より、山の

上の一シーンが鮮かに再現されると云う事実が説明されたのである。しかしこれは全く、私の頭の中で勝手に想像したに過ぎず、いわば秋の夜長の思索の散歩である。こんなへ理窟より、トーンがシーンと何か繋りを持つているのではないかと考えるなら、又面白い事ではないだろうか、唯それだけの事である。それにしても平常より友人仲間が遅鈍で以つて名の知れる自分の悩でこのような複雑な計算が早く行われ得るとは思えないし、又精神医学や心理学等に、詳しい方からは一笑に付され、お叱りを受けるであろう。しかし前記の通り散歩である。お許しを戴けると思う。願はくば秋の夜長、この幼稚な問題に悩み又解決して世に出でんとする恥知らずの若者に、ワンゲルの諸氏よ明（迷）を与えられん事を。



山小屋建設について

理学部三年　石橋　毅

クラブに山小屋、という話題は過去においてかなり話し合われ、又その希望する声もかなりあつた。しかし、創立以来、浅い歴史の当部にとつては難題であつたようである。山小屋を建てようという具体的な話は昨年の秋頃であつた様に思う。それまでの小屋建設には、医王山の西尾平ヒュッテの管理権の獲得、ベルクハイムでの建設案が一部の部員の間で相談されたが、具体化はしなかつた。

今回の山小屋建設案は、現在の三年部員の間より起つたもので、医王山の有料化がその一の契機となつている、御存知の加く、有料化に伴い、部員の医王山への魅力は半減し、その結果、山小屋を医王山にという話は、いつしか他に良い場所はないものかと物色させることになり幸い、犀川ダム建設による倉谷部落の移住で、材木入手の可能性が出て来た。部内に山小屋建設準備委員が決まり、本格的に交渉に入つたのは十一月の初めである。努力の介があり、材木は倉谷部落の民家の払下げを金沢

市より、又土地は営林署に交渉し、書類提出まで漕ぎつけるに至つた。ここ迄来るには、土地の選定、測量、小屋の設計等、一部の人々の活躍に負う所が大である。

現在までに学生部へ書類提出を終り、後は学生部より営林署へ書類をまわしてもらい、建設予定地の現場立合を行い、来春の許可を待つだけであるが、仕事はこれからであつて、部員の強力な団結、援助が必要である。

山小屋に関する簡単な紹介を行うと、

建設予定地、金沢市旧倉谷部落南方約四百メートル。

敷地六四八m^2（約二百坪）　建坪約三十m^3

収容人員約二十五名

予算六万円（材木は市より無償）である。

建設行程は許可の時期にもよるが予定では

土地整地　五月初旬　四日間

資材運搬　五月下旬　開学記念祭利用

基礎工事　六月

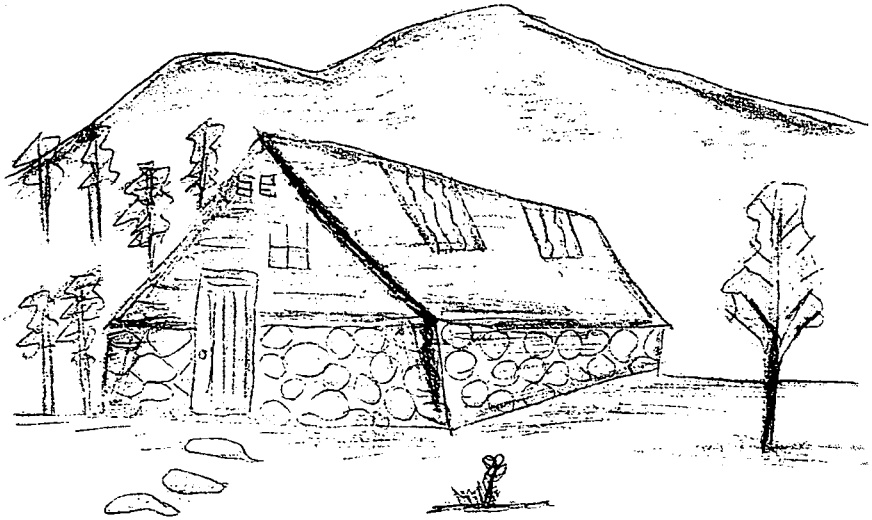
木材加工　七月合宿前　合宿のトレーニングを兼ねる

組立て　八月一日～五日間

内部工事　八月中旬～下旬

完成予定　十月十日

以上の予定であるがすでに建設への歯車は回転し始めている。部員及び先輩の助言、援助を、お願い致します。



随筆

考レ共二先生一事

薬学部三年　木下泰恵

人生の目的、誰しもが一度は考え突き当つた壁である。しかし、皆、ととことんまで突き止めて考えてみただろうか。大概の人は、途中で考える事を止めてしまつたのではなかろうか。

私が新トレのミーティングの時に、立派な先輩諸氏が多く居たので、此の人達なら少しでも疑問に答えてくれるのではなかろうかと思つて、尋ねてみた所、「そんな事、考える者はバカや。」と一蹴されてしまつた。それからは、二度と他人にそんな質問をする気が起きなかつた。

皆は、本当にそんな事は全然考えずに、平穏無事な日々をのみ願い、喜怒哀楽、弱肉強食の生活に慣らされて、生きかつ死んでゆくのだろうか。私だけが、こんな抓まりそうもないバカな事を考えるのだろうか。イヤそんなはずはない、と、何度も考えたものであつた。

しかし、シニアに来て初めて、自分も皆と同じ事を考えていたのであつて、決してバカな事を考えていたのではない、考えない方こそ憐むべき人間なのだ、という確信が持てるようになつた。

死の旅に着く列車が発車する間際になつて初めて、その深淵をのぞき、恐れおののき、一体、自分は何を目的に生きて来たのか、それは果して有意義な一生であつたろうか、それはどこかで、もつと存続するのか、自分が死んだ後、自分の見えない所で、つまり生とは何か、と考えても、もう既にその時は考えるには遅過ぎるのである。再び、その問題を考える時には、もう遅過ぎるという事が解つているなら、どうしてもつと早く、その問題を考えて悪いことがあろう。

その考えるべき時は、正に、死の直前を除いては、今しかないのではないか、今こそ、此の学生時代こそ、そういう問題と取りくむ時期ではないだろうか。一旦、社会に出てしまえば、大きな流れに逆つて逆流する事は出来ないのである。与えられた時間は素直に有効に使うべきである。

人生の意味とは、我々の数々の人生の小さなかすり傷や、意味のない走り書きの線に混ざつて、一本のはつきりした太い線、決定的な一線に貫かれているのではないだろうか。

生きる事は、人間が目的に到達する為の手段に他ならない。その手段の主流をなすものとして、職業がある。我々の一生が、職業に左右されると云つても、決して過言ではない。

その大事な職業の選択を、名誉欲や利害欲等の私欲に任せるべきではない。では、どうして、何を基準に選べば良いのか。それこそは、此の学生時代に考えておくべき事なのである。

手段と共にもう一つ大事な事は、その手段を為すもの自体、即ち人間である。

人間は皆、或る使命を持つて此の世に送り出されて来たのであり、常に真実を求め、人の子として正しく生くべきである。この真実を求める態度を失えば、人生は、無意味な価値の無い、何の為に生きて来たのか解らない人生になつてしまうのである。

では、その使命とは、一体何んなのだろうか。

その使命とは、他者の為に生く事なのである。昔、或る作家が、「愛は奪うものなり。」と云い、当時の多くの若者達が、その言葉に魅せられたのであるが、しかし、今はどうであろうか。その言葉は、もう殆とんどの人には省りみられずに、埃の山の中に埋もれてしまつているのではないか。即ち、それは、真実な言葉ではなかつたのである。「愛とは与えるもの」であつて、決して「奪うもの」ではないのである。即ち、他者に愛を与える事、これが、我々に与えられた使命なのである。（ここで言う他者とは必ずしも、他の人々を意味しない）

その使命を果たす道は、多くあるが、その中で、最も自分に適したものを捜し当てて、その道をまつすぐに、脇道に逸れることなく、進みたいものである。一たび脇道に逸れ、本道を失つた時には、あわてずに、冷静に、現状を眺めて判断すれば、きつと又、真道に戻れるのである。頂度、山で道に迷つた場合と同じである。

こうして人間は、一つしかない或る一点へ向つて、色んな道を歩みつつあるのである。道は多いが、真の道はただ一つである。

―中略―

右の文は、東大の石館先生が言われたことを、参考にして書きました。続きは、又いつか。

卒業生プロフイール

昭和三十八年度卒業生

部屋では歓送登山の話題がささやかれている様だが、後輩諸氏にとつては「目の上のタンコブ」が消散する心楽しい時期であり、反面当の四年部員にとつてはクラブ生命のつきる寂しい時でもある。　例によつて、今年も部誌の一隅を借りてポンコツ諸氏のプロフイルを紹介する。　これが共に活躍した人々にとつての時の流れを超越したより良き絆となれば幸いである。

今年はクラブ始つて以来の多数の四年部員を送り出すこととなつたので、多小趣向を変え、前半の自己紹介と後半の他己紹介の二本立てでゆく事にした。　組上の理となる四年部員にとつては、はなはだ迷惑の事と思うがその意図を考慮の上御許し願いたい。

尚、この稿に関する文書は、今井、稲葉にある。

（敬称略。アイウエオ順）

稲葉正巳

（法文学部経済科卒・津田駒工業に入社）

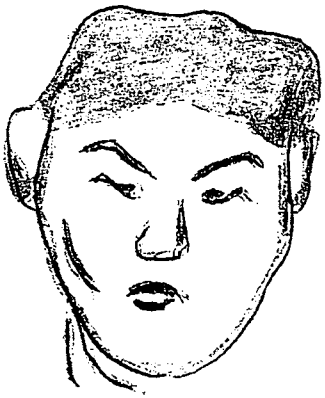
この男を一言で言うならば「ダラな男」である。大体部長を引き受けるなどその良い例である。（歴代の部長サン、カンベン）厳寒の牛首川で泳いだり（？）総会などでクダラヌ意見に面しカツカしている所などを見るとその感を深くせざるを得ない。最近は「ダラに徹するのも一つの道だ」と自負している。

本当にダラに徹している。しかしダラではない。ダラ真面目なのである。彼のこの性格が「雲の上の存在」的になつて群をなす女性は遂に彼を落すことはできなかつた。涙をはらつて部の発展に邁進するこの男を乗者は尊敬と同情の目でながめたものである。ススメススメ。イノシシになれ。部に対するあの情熱を全てに振り向け

よ。されば良き指導者となれることうけ合いである。願わくは早急に良き相談相手をみつけて、我々後輩の前にその意気軒昂たるところを示してほしい。

伊東照芳

（理学部数学科卒・福井県教員）



能登キラーである。入部以来三年連続能登をワンダリンクした。山が嫌いな訳ではないが、ロードがトランジスタ型の自分に適しているのかも知れない。他称〃チョンボの大将〃その通りである。それだからこそ、四年間学業の方を無事にやつてきたともいえる。性格温厚、世話好き、但し無責任なところもあり。

タカの様に鋭い眼、ひきしまつた顔、知性的なマスクの持主だが茶目ッ気のある男。ある夏期合宿で、手を出すとマッチ稽が引込んでゆく奇妙なカラクリを作つてびつくりさせたこともある。最近はブルジョア的傾向があらわれている。某温泉の女中さんのプレゼントなるパイプに〃シンセイ〃をつめ〃ゴルフに来いや〃などとぬかすあたり仲々貫録がある。

入部が皆より一年遅い関係から活動はやや消極的であつたが、充分やりこなした。毎年一年部員を能登に引つ張つていくあたり、貴重な存在であつた。

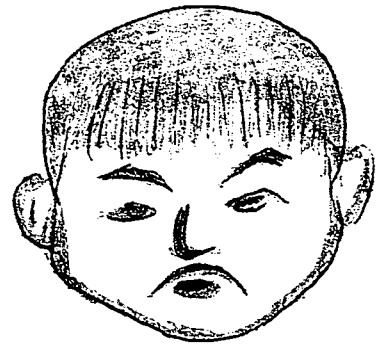
大橋博

（工学部機械科卒・日本車輌入社）

口数少く、偶つこで小さくなつているが、どうしてもその存在が分つてしまう男。

どこの下宿に住んでいるのか、誰も知らない男。

自転車がないと夜も日も明けぬ男。雨の日曜等は、外へ出られないので、空を仰いでは嘆息し、熊の如く室の



中を歩き回つている。又夜になると街中へ走り出ている。

スキーを始めたのは、高校一年の時だが、その後途切れ途切れになつて、腕前はサッパリ。大回転？が得意。

何も言わずに、ただニヤニヤしている変な男、と思われるかも知れないが、本人は皆の顔を見ているだけで、皆のしやべつている雰意気に浸つているだけで楽しいらしい。

孤独を愛す、と云えども、そればかりでは済まない男だが、かつて、自転車で中部日本を縦断したこともあり。毎日新聞に彼の丸い体の写真がのつているのを見て、部員一同、大いに驚いたものである。それだから車に縁のある会社に入つたのもうなづける。

彫　近　意　一

（工学部精密工学科卒・国鉄入社）

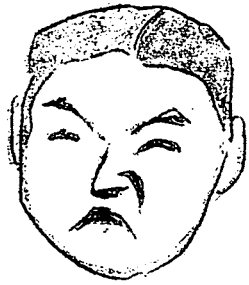
本年二十余歳になるがどうもそうは見えないらしいのが悩みの種。それでいて自分では大いに背伸びしようとしているから困る。元来内気である故、言いたいことの半分も言えないので損をすることしきり。

全く内気な男である。勉学に励むのも一つの手だが、もう少しアノ方もハツスルしてほしかつた。勉強と女の子が両立することを実証してほしかつた。

言いたい事は言えないかもしれないが、たまに言うとずれた事を平気でかどうかしらないが言つて喜ばせるのが又、彼の愛敬に輪をかけている。本人はまじめなのだから仕方ないともいえるが。女性に関しては、彼の方で

も持ちまえの観察眼のするどさで、そこはかとなく観察しているのだろうから、彼がその方に無関心かどうかなどということを案ずる必要は毛頭ない。

金岩　孜
（工学部工業化学科卒・住友化学に入社）



頭の切れる男である。　とは言つても決して冷い感じのする男でないことはこれであらためて言う必要がなかろう。　非常に温厚な性格の持主であるため、過去四年間のクラブ活動において、派手な動きはなかつたが地味ながらもかなりの活躍をしてきた。

ところで彼は妙な特技をもつている。　山行中表だつて人に言えない様な病気（たとえば虱の木病＝胸ヤケ、キジダメ、ソウソツ病等々）になつた場合など、ある時にはクレオソートなどの薬で、ある時は彼一流の論法で完全になおしてくれる。　また備品の修理などもコツコツとやつてくれる。　かくれた医療係とも言うべき有難き存在であつたが、シニアに進んでからは尻皮やポンチヨ等の個人装備の方が本体（？）よりも多くワンデリングしているといつた傾向がみられ彼の特技を発揮する機会が少なかつたのは残念である。　しかし、四年前の列車カン詰事件にもめげず、ヘタの横ズキーかオーストリア流のスキーかどうか筆者の知るところではないが、四年間スキーをやり通した。スキー合宿などでは彼一流のポーカフエースで〃オイヤツ、なあもダツチヤン〃と言いながら黙々とすべつている。今年のスキー合宿では、過去四年間の集大成とも言うべき妙技をみせてくれたことだろう。

亀田　武
（法文学部経済学科卒・共栄火災海上に入社）

一年部員として入部以来「自己紹介」で追いまわされ現在に至つた。しかし今もつて少しも

それがわからない。どうしても楽しいとは言えない。万事この調子で、のらりくらりと暮す人間もこの世に一人ぐらいは必要であろうと思うのだ。

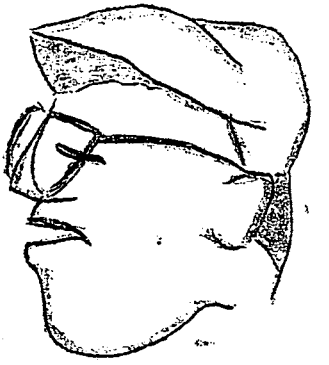
こう書いてある程に深刻なんだなあと案ずることは全くない事は彼が赤白い顔でだまりこくつて、あたりを見たりして（どんな時かは知らない）ニタリとかウフフと笑つている時を見ればまた楽しい男なんだとも思える。

とにかく、内に秘めたる情熱は恒に詩を求め、ロマンを求め、そして理想の女性を求める。嗚呼！　彼を無気力な男と言うなかれ。試みに一度彼に愛を、人生を、学問を問わんか、必らずや秋風の如き快感を覚えるであろう。ただ残念なことは彼が女性と香林坊を歩くのを見ることができなかつたことである。赤白い顔を一段と赤くして恥しそうに見上げる瞳は常に初恋の人を抱いて彷よえる哲学者の面影を見せて寂しい。

河合　央　明

（理学部物理学科卒・サンキョー器入社）

遠州は浜松の産、そのせいかどうか知らないがウナギの如くノラリクラリとして、全くつかみどころがない。人の良い証拠に、こちらが少々まとはずれの事を言つてもすぐにそうたそうだと言うので、後にこちらが困る程である。しかし、彼もなかなかあらゆる意味での「やり手」である。近頃会わないところをみると、何をやつているか知れたものではない。



彼は一目ボレの大家である。赤い羽根を売つている女学生の顔に近づきたいが為に実に七枚の羽根を買いに行つたのは有名な話しである。かと思うと、ロングヘアーのウエイトレスに憧れて毎日某喫茶に通いつめた。そしてある冬の雪の日、いつもの通りに訪れた彼女は、軽ろやかなる何とかカツト、ああ、あわれ、彼はその日泣きに泣き、飲みに飲んだ。筆者はもう……涙で声も出ない、……。（ここで才二の筆者にパトンタッチ）しかしである。彼がコツテ牛の如きド根性をもつて上を向いて歩いて行くことを期待する。

河合良太

（工学部機械工学科）

ワンゲルとなると直ぐ夢中になる単純な男である。歌も、ダンスも全てだめ山を歩いてながめるだけしか楽しみを持たないそうだ。昔は春山をめざす程のものが今では高山植物のかれんな美にひたる心境、知る人ぞ知る。

ワンゲルの代打男・昨年・今年と二年連続合宿リーダーのピンチヒッターをつとめ、元のリーダー以上の働きを示した。これはクラブ活動に対する日頃の真剣な態度と確固たる信念のなせるところだろう。かつてアラン・ドロンに似ていると言われたことからもわかる様に、スラリとした好男子である。それ故ダンスとか歌の如き技巧などはへのカッパ、しあわせな男である。　自己紹介の中で高山植物をもちだし「その心境知る人ぞ知る」などと気取っているところをみると、意中の女性を射止めたらしい、世の女性にとつては残念なことであろう。

川島　勇

（法文学部経済学科卒・足利銀行入社）

最近、彼氏猛裂にハッスルして自動車教習所に通つている。老体に鞭うつての健闘振りには全く頭が下がる。氏は唱う会出身であるが故、種々のパーワンでは歌唱指導に当つた。我々が今日、得たり顔をして歌つている歌の数々も彼の指導よろしきを得たところの産物であることを知るべきであろう。

全く長老の貫禄充分、まばらなるアゴヒゲを撫で乍ら腰をやや折り曲げて歩きに歩く、その姿たるや、老いたる秀吉をしのばせるものがある。筆者は彼に、故意にとい

つてよい程の調子で復を立てさせる様な事をよく言つたものだが、彼たるや、聞き流し専門かどうかしらないが、全く相手にしてくれずいつもこちらがバカをみる。彼はこんな男であり、完全に大人になつている。筆者などきたないと解つても、彼のツメのあかをセンジて飲めばよいと思う。彼の変つているところは、女性に興味がないという顔をしている事である。いや実際ないのかもしれない。しかし、そんな事は絶対ないのであつて、要するに、こちらをそんな事で悲しまさないのであり、実をいえば、少し位悲しませてほしい程である。

沢田豊子
（教育学部養護課程卒）

外観的には、これと云つた印象もないようだが、無理に云えば、口元の大きなホクロであろう。（生れた時からあるようで私の今迄を最もよく知つているものである。内面的には放浪があり、この欲求を満たすためにワンゲルに入つたのであるが、行く所はあまり高すぎて、ボーッと行くわけにもいかず、いささか当惑しているという感である。

しかし、ワンゲルには、何か愛着を感じてかよつている人間の一人である。

お姐チャンタイプ、時々「ほうけ？」などと富山弁を混じえながら話す態度をみると全く気サクで話しやすいが、初めの時は実にとつつき難い。

内面的に放浪癖があるのならば、もつと我々の心の中にもワンデルングして来てほしかつたと思うのは私のみの心ではないだろう。

注射してもらうにも、何の文句も言えないおごそかさを有している。猛きをもつてなるワンゲルの男の子といえども彼女の前にては意気消失の感がある。

富田征也

（法文学部経済学科卒・中京電機に入社）

老舗の旦那の様な男で勉学、クラブ活動ともに前向の姿勢で前進しているがやや八方破れ的な魅力の持主でフラれて飲んだの十何回と記憶している。典型的東海人であり、その為か誤解されることしばしであつたが持つて生れた親分肌にモノをいわせて倒れては起き、起きてはフラれて今日に至つた。キャバシテイの大きさには筆者も敬服している。

よせば良いのにロイドかなんか、顔よりもデカイ奴をピカピカの鼻の上に乗せて、斜め左方に向つてギョロリとウインクすると世の女性は皆飛びついて来るとウヌボレている。

金もないのに、むやみと後輩にオゴリたがるという良いくせがあつて、月末には昼メシを抜くために学校をサボッテ昼まで寝ているといつた変な男である。

また、それを一段とひき立たせているのがあの頭のテッペンから出てくる声だと思つているのだからもう救われない。

林　克郎

（工学部精密工学科卒・東洋ベアリング入社）

ズバリ一言、ワンゲルの落オ生、それは私です。

汐は多ければ多い程渡り良い。

自分で証拠をあげよう『おまえは一人歩き一出す頃になつて、歩き出そうとはしなくなつたではないか』

二人で話をしているときの気まずさ、これは今尚脱ぐい

去ることを出来ずに一枚下着として冬を越すことになつた。ああもしよう、こうしたらよい。いつも頭の中でこねまわしている。これが私のすべてである。唯友あれば足を引つぱりつつも、ついていける。これが取りえといえばいえるかもしれない。

前文から判断すればもつぱらついて回るそうだがところがどつこい。彼の先達のうまさは同行した人ならすぐに肯けるだろう。彼がトップを歩く時、常にパーティ全員に気を配つてのペースメーカーぶりと道に迷つた時のルートの発見のうまさはおそらく右にでる者はあるまい。先人も言いました。「先達はあらまほしきことなり」と。

彼はまた気温の感じ方においてすこし原点がずれている。すなわち太陽が輝り出し、気温が上りはじめると全く元気がなくなる。従つて夏の合宿は最も苦手とか。ところが一端、気温が零度に近づきはじめるや、がぜん調子が出、他の人が寒さでふるえるに及んでも山シャツ一枚で平気でいる。諸君、寒くなつたら遠慮せずに彼が持つているものを拝借したまえ。

最後に一言、彼は早婚論者である。

久島俊也

（工学部精密工学科卒・新三菱重工入社）

天竜の水で産湯をつかい、中央アルプスの内ふところに抱かれ、南アを眺めて、馬肉で育つた人、その故かどうか知らないが、馬車馬の如きスタミナの持主で、熱列な山好き。先日の南アパーワンでも試験直後という悪条件にもかかわらず、平均一〇時間、最高十三時間余の行動件画をつくつた。その計画が完遂できたかどうかは知らないが、その老練さでチョンボしたとか。反面、盆栽の如き枯れた味をもつて居り、屋台で静かにコップ酒をすすつていたこともあつたが現在ではその単位も取得しこんどは、キャバレー学科に入つたとか、それはともかくとして、その渋味を十分に活かし、部の元老的（？）存在として縁の下の力持ち的役割を果してきた。渋すぎて仲々他人と相入れないところがあるが、そこが彼の彼たる由縁で、独り我が道をゆくその風格には女性たる者父親の如き安らぎを覚えてやまない。ところで単独行を好む奴は失恋した男であるかという説があるらしいが、

彼は単独行が好きだつた。〃だつた〃というのは、昨年あたりから単独行をすることがほとんどなくなつた。何故だろうか？。

平賀晶子
（教育学部養護科卒）

物にこだわらず楽天的である反面天候には敏感に反応し、出発の前夜には眠れないといつた、ウブなところもある。みかけによらず器用なところがあり、飢キンの気配あれば、ヨモギの油イタメや西瓜の漬物など作つて、本人は良いカミさんになれると自任しているが、惜しむらくは、相手がいないことであろう。

常にハツスルしているファイトウーマンである。五月末に入部し尾瀬行に割り込んだことでもそれがうかがわれるだろうが、某月某日、某山の某雪渓で、下で水を飲んでいた細い男が上からシリセードですべつて来た彼女にシュラフの羽毛の如くに吹飛ばされたことでも充分実証されるだろう。部在籍期間が一年しかないという悪条件を克服して十二分に活躍した。このファイトを持ち続け、立派な相手を捕獲してもらいたいものである。

堀上徹
（理学部物理学科卒・東北大学院に進学）

よく喋るという評判だが本人はそれ程に思つていない。

唯北陸人気風と大阪人気質とが相容れない位にしか感じていないから仕末が悪い。同じ喋るにしても女性とのダベリングを人生最大の楽しみと心得ている男。

〃ブチの尻皮〃で一世を風靡した男。その独特なスタ

イルは当部のファション感覚に大きな影響を与えたが、彼の短パンスタイルは某画家を連想させて、いただけない。このままでは彼の人生最大の楽しみが春の淡雪の如く消え失せるのではないかと懸念される。彼は部一番の理論家でもある。彼の弁舌さわやかな理論に筆者も頭をいためた事が幾度かあるが、その動機はすべからく後輩思いのなせるところであり、そこに彼の彼たるゆえんがある。時々もらす寝言も一理論としての価値があるとか。将来は日本理論物理学の大家となることだろう。

松　本　昭　子

（教育学部養護課程卒）

生れ育つた所が米騒動発生の地であり、逞しい富山レディの心意気が私にも流れているかは知らないが：全体に甘ちゃんである。甘党の甘ちゃんではなく、人間が甘いことなり。みかけによらずのんびりしていて、あつかましい。

山登りはどちらかというと多人数で登るより単独行か小人数で歩きたい方だ。実践がともなつていないし単独行への憧憬者といえそう。結婚するなら、暖かくつて、山の良さ、美しさが語り合える人だと嬉しいなと夢見ている。

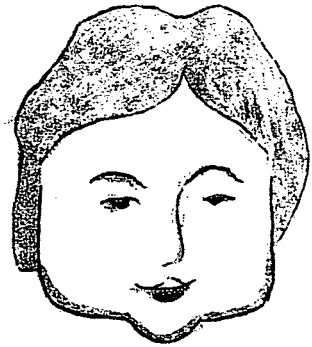
デッカイ眼をグルグルと廻してデッカイ注射をする甘チャンであるが、我々それをされる立場にとつてはコワイオネエチャンである。しかしお陰で、今年の合宿は病気のことを心配する必要はなかつた。

おつとここにも単独行の好きな人がいた。そしてまた彼女の言うところによればクラスで十六番目に結婚する予定だそうな。ちなみに十月現在数人が実行したそうな。この二つを考え併せると、「夢みている」という心境も自ずと明らかである。彼女に幸あれ。

宮　腰　田美子

（教育学部養護課程卒）

旅行先での、そこの土地独特の人形を買うことが好き。家族ぐるみでやつているから現在は、北は北海道から南



は桜島までのいろいろの人形が約七〇種ある。また、プロ野球観戦が好きで、巨人軍のファン。中学二年頃から巨人軍のプレーは都合の悪くない限り必ずみる。

その他お茶も少々。

実に静かな人である。将来はナガシマの如き旦那サンの活躍振りや、シバタの如きはつらつとしたポーズに対しニコニコと笑いかけながら、無数の人形に囲まれて静かにくらしてゆくことだろう。そんな感じのする純日本的な典型になること受け合いである。だからヤンチャなワンゲルになじめなかつたにちがいない。「ワタシの限界を知つたワ」などと言つてあまり活動しなかつたが、オープン登山では良きナイチンゲール振りを発揮してワンゲルの名を高めてくれた。

宮村宣雄

（法文学部経済学科卒・日本ビクターに入社）

一見静的　二見したりするとかなりダイナミック、しかし、金沢が好きな男で、気候の悪いのに充分なれていて、ほんとうはシンミリさもあるかもしれない。

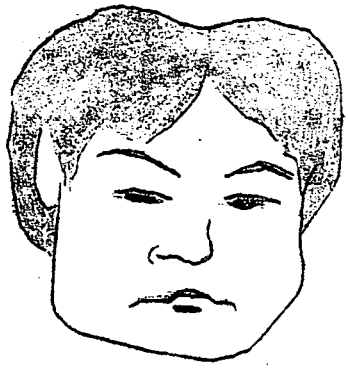
酒は飲まさない方があらゆる意味で無難。

山でも子供になりやすい方であり、下界では、かなりなんでもやりたいらしい。だが、いずれこりるだろう。無茶な事でも、通してみたいという「ヘソマガリ的なところがある。

追記する、三見するとダイナミックを通りこして爆発的である。大学教授といえども彼の前ではネコの如く御気嫌をうかがうとか。クラシックに関しては当部随一のオーソリティであるがいざ歌を唱うとなると聞く人間、否スピッツまでがコソコソとどこかへかくれてしまう。人々は彼に声を出させまいとあらゆる努力を惜しまず、せつせとアルコールを貢いだとか。ところが彼とくるや

いくら飲ませてもケロリとしていつこうに効果が無い。角瓶をラッパにして一気に飲み干すなどはスサマジいどころではなく立きたくなる。

村　上　紀志子
（理学部化学科卒）



俗称「皇后陛下」　数十名入部した女子部員の中で最后までガンバリ通した。細い身体に似合わずその意気は高い。

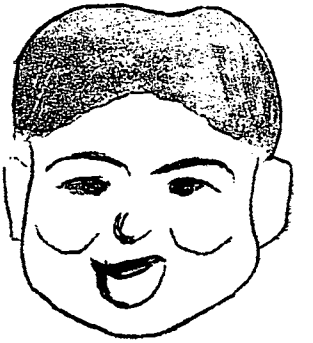
後輩の女子部員にも見習つて欲しいものだ。

かと言つて、男性的女性であるというのでは決してない。エピソードは、他の四年生に較べて少ない。生まれてもつた天性のワガママさが随分得をして来た。二年の北アルプスでは、水ききんの西岳で、ビール瓶で、数本も水を飲み、その夜は一晩うなり続け、リーダーを眠らさず心配させたこともあつた。同級の女性三人が婚約したそうだから、間近いうちに婚約発表もあるだろう。

「イイヤンカ・・・」　艶色濃きあの声に合えば、世の男性枕をならべてブッ倒れ、一週間は起き上れないことは男子部員一同神に誓つて保証する。ましてや、最近のすさまじいまでの「美」の追求はその概念に一大革命をもたらした。その意味で彼女は部員というよりも「女神」的存在と化してしまつた。いかに化けるのが専攻とは言え、男性を悲しませるのは大きな罪であると筆者は考えるがいかがなものであろうか。

山　田　　允
（法文学部哲学科心理学卒・法務省に入省）

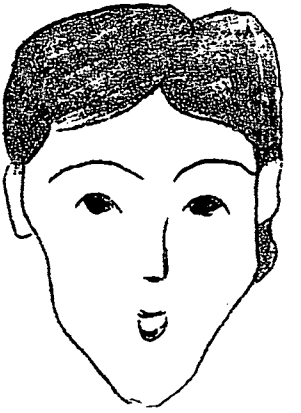
本籍東京、産地名古屋、終戦后金沢に移り、ここに育つ個人主義者と自負するも、他人は現代的エゴイストと評価する。趣味者好ともに多いが総て浅い、逆めて単純。バテるとやたらにヨウカンを欲しがり、食つて了うと元通りノコノコ歩くイヤナ男、効率は中の下。



かつて副部長として部活動に献身してきた功労者である。現代的エゴイストのできる技ではない。ところで、彼の山スタイルは中々ユーモラスである。ウス汚れたハンチングをあみだにかむり、チョッキのポケットから「ヒカリ」用の武器をのぞかせ、ギリ版を腰にぶら下げ、やや左肩を下げ、〃ミ〃の音かでない笛を吹いているサマは一見の価値がある。平素は頷にシワを寄せ、マバラなヒゲをなでつつ何かを考えこんでいる。それ故中々とつつきにくい、が「ハッキンカイロ」の如き暖かな心の持主である。

悩みごとのある時など彼に相談して見給え、商売柄心の動きを素早く読みとり、適切な助言してくれる。抱擁力のあるいい男である。その商売も最近は活気を帯びて。彼の顔も活々としている。何故か？　彼もやはり一人の男である……筆者は彼を怪気羨望の眼でながめている。

吉岡和子
（教育学部養護課卒）



原産地は山中温泉で、末ッ子として生れた。

そのためか甘えん坊で依存心が強い事が気懸りな点である。

いくらお姉さん顔をしてみても見破られてしまうのは我ながらあきれる次オである。将来のハズは（映画の中での）ペックの様に親切で頼りになる男性と夢みている。そして今から男性研究などの意味から多くの人と接して行きたい。（内）筆者加筆

「甘えん坊」であるけれども、それを別の面から言えば近き将来にはハズに何のてらいもなく甘えることができるという天分をもつていることにもなる。

「私は甘えん坊では御座居ません」と気取る必要は全くな

い。ワンゲルに入つたのも男性研究の一手段であつたのだろうが、我々としてはそれならそれで、もつと活動して欲しかつた。しかし、一べつしただけで我々のワンゲルが、その手段と到底なり得ないと直感したからかも知れないが……。

ともあれ、今後も、研究活動を続けられ、一尺足らずの身長ながら、がつしりとテントをつなぎとめているペグ、オツと失礼！ グレゴリーペックの如き頼もしき男性を射止めてもらいたい。

「最後に」

皆、本当にいい人ばかりでした。先輩から受けた数々の教示は、後に残る僕達の心にいつまでも焼きついていることと思います。

北に南に、全国に散られる先輩諸氏の下宿に、寮に今後も度々押しかけるかと思いますが、その為にも是非、近況報告などの手紙をお寄せ下さる様お願いします。

医王山有料地区見聞記

中川皓三郎
今井春彦

Tサンの「戸室山で見た月と、金沢の夜景は大変すばらしかつた」という言葉で、お互に最大のロマンチストとこころえているIとN。話は簡単である。土曜日の総会の後、「行こか」「行きましよ」。出発時間は土曜日夜十時。ところが無念！ お月さんはIとNのような二人に顔を見られるのが恥かしいのか急におかくれになつて涙雨……。

日曜日朝七時、Iより電話「どうする」「どうしよう」決行と決まり見上でTサンを待つ。しかし来る様子もなし。Iは朝から飯を食つてない。NもIも昼食持参せず。それにしても無情なるはTの奴よ……。

しかしままよ。十一月でもアケビがあるぞ。Nは去年あの辺りでとつたなど不確かなことを言いながら歩きに歩く。Iはもうフラフラ。目ぼしきブッシュをめがけて突入する。青い実、赤い実、黒い実、黄い実。

とにかく何でも口に入れる。「ペエッペ！」「ペエッペ」二人の変な顔が益々変になる。Iは傘を置き忘れた。

残念だが仕方ない。とにかく行こうと駆け足で大池へ。おお！何と我が「山ざと」も変つたことか。変なオジサンが変な垣根の中に頑張つて、「はい、いらつしやい。学生さんは七十円。お二人サンですね百四十円ですよ」池のまわりは手入れがゆきとどいている。しかしただきれいになつただけだ。美しさが無い。僕等は枯れて今にも倒れんとする木や、木の葉を積み重ねて静まりかえる小川、そして背丈もあるようなクマザサの中を胸ときめかせて歩きたいのだ。ズボンが泥んこになろうが、靴が破れようが、自然の中に抱かれたいのに……。

三蛇の広場。ここはもう少し昔の日本の部落である。一番地から十五番地までの区割、大根や白菜の畑、水を引くビニールパイプ。川に沿つて張られた黄色いテントは、小学校の運動会を想わせる。それでも日曜とあつて人は多かつた。皆、お茶を飲んだりしている。……。

支配人という人と会う。気サクな人だ。人間は真からの悪人になんてなれるものじゃない。「ええ、まあ学生サンのことだし、しよつちゆうここへ来ておいでだつたんでしたら、料金のことなんて適当にね……」。と色気を見せて呉れる。彼とてもこの度の有料化には余り乗り気でないのだろう。彼にはそんなことはどうでも良さそうだつた。「いやあ、僕はねえ、大阪は案外詳しいんですよ。そうそう、岐阜もいいとこですなあ」「ところであの池の辺りには昔、寺がありましてな、惣海寺といつたんです。あれは、いわゆるそのタイチョウ大師が開いたものでね、富山では加賀山と言つとつたらしいですなあ。それが例の一向一揆で焼き払われちまつてねえ、それ以後は……」。Iの奴が山日記なんかとり出して筆記するもんだからあのオジサン、益々調子にのつて話し出した。「……四十八坊、八池九山というのはですな、つまり……」。ああ、雨が降つて来たよ。Nは気が気でない。ほど良い切れ間をとらえて「どうもありがとうございました」「どうも。アハッハハ……」。ああおどろいた。一本どうなつてるんだい。

一気にトンビをかけのぼる。おつと、ここにも料金を集める机が在つた。すると福光側とトンビと大池と、三ケ所で集めていることになる。二人はパックリと口のあいた重い靴をひきづつて最終バスに乗りこんだ。いやあバスの中で食つた甘柿はうまかつたねえ。

O・Bだより

柿谷　道子　　金沢市仙人町七

思いがけなくも医王山の代りに六甲山を朝夕眺めて過ごす様になつて七ケ月余り、部室に御無沙汰してると同様キャラバンシューズやキスリングとも縁が切れ、鈴木さんや下出さんにお会いした時、いつでも山へ行く事のできる人を羨ましく思いながら楽しかつた山行を思い出してます。雑用が終ると近くの知合の家へ行き、スマートなコリイ犬の相手をしたりして退屈することはありませんが、徒何となく一日一日が過ぎていきます。どうぞ皆様方、学生時代を悔いる事のない様、思う存分御活躍下さい。新しいベルクハイムを手にするのを楽しみにして居ります。　ではお元気で　さようなら

田村　昭夫　　金沢市笠舞町への一一四　神田方

最近は歩く機会があまりありません。通学の一五分程度がせいぜいです。そのためか近ごろ尻に肉がついてズボンのほころびが頻繁に起ります。それを螢光灯の下でつくろうわびしさは秋の深まりをいつそうしみじみ感じさせます。学校の方は講義や実験で毎日六時ごろになりますがともすれば手足の実験になつてしまい勝ちです。職人になつてはならぬと反省はするのですが、長かつた大学生活の前半に比較して後半の何とせせこましく過ぎ去つて行くことかを感ずる今日このごろです。

鈴木　兵一　　神戸市垂水区西垂水町天ノ下六六　川崎重工西垂水荘八六号室

拝啓　秋冷の候ますます御清栄のことと存じます。

このたび私共両人は辰野倉吉氏御夫妻の御媒妁により十月二十七日結婚致しました。私共が新しい人生の門出を迎えることが出来ましたのも皆様方のひとかたならぬ御厚意の賜と感謝いたしておりますまだまだ未熟な私共

ですので今後共よろしく御指導の程お願い申し上げます

尚新居は左記の通りでございますのでおついでの節にはお立寄り下さいますようお待ちいたしております敬具

昭和三十八年十一月

鈴木兵一
宣子

大歓迎どうもありがとう。楽しかつた。又行こうと話合つてる。みんなやつてこい今度はこちらで歓迎する。

岩井　修　山口県光市井戸町

河畑寮

ワンゲルの心はいつも私の中にある。「運命」といえば云いすぎになるが少くとも「夢」と「生活」の中に生きている。独身寮で酒を飲みながら快気焔を上げる時の話題は山や北海道についてであり、むしやくしやした時にボリユーム一杯に鳴らすステレオはヨーデルである。

それから私がキャンプファイアのまわりで「カモメの水兵さん」を踊つているNHKテレビを見た方はないでしようか？この時のファイアは私が組んだものでマツチ一本で真中から燃え上りました。忘れられない思い出です。八月には三日間の休みを利用して四国の石槌山一瓶ゲ森の単独縦走をしました。テントに眠つたのは久しぶりでした。最近はバーベキューが流行しメシタキ兼掃除夫として活躍しています。十一月からは狩猟シーズンです。獲物なきハンターとして道なき山を歩きたいと思つています。

高田昌嗣　名古屋市瑞穂区市丘町一ノ二
新三菱第二菱風寮

一、会社生活について

乗用車の設計をやつているところにいる。正式の名称は乗用車シャシー設計課である。自分で設計をやつているわけではなくて目下勉強中である。

二、寮生活について

「大メシ食イ」の習慣はなかなかなおらず時々ドンブリで二杯食うのでよく笑われる。寮に来てメシを沢山食う奴と言えばすぐわかる。

洗濯はマメにやつている。

三、金まわりについて

相変らず悪い。月給は一度呑めば終り。あとは小さくなつている。

四、山について

鈴鹿を中心とした日曜日帰りの沢登り程度。中央アルプスも場所によつては土曜の夜行で行けば日曜に帰れる。近日中にでかける予定。

五、スキーについて

メタルスキーを新調した。昼休みに四〇分間猛烈なハードトレーニングをやつている。正月は三十日から五日迄志賀高原に行く。

六、終りに

来春には東海地方も人数が増えるのでワンゲルOBの東海支部を結成したい。そして一ケ月に一度は定例ワンデリングを行う。

西尾　晧史　　小松市遊泉寺町

現役の諸君、OBOGのみなさん如何お過ごしでしようか。私も相変らず元気な毎日です。卒業してから一年半、仕事に拘束されつつ今日に到つています。社会に生きる人間の宿命でありましようがいろいろと時間的にも又精神的にも拘束される要素が多すぎて仲々やりたいことは出来ません。その点今の社会制度の中で堂々と自らの責任さえ果せば何ら拘束されることのない学生時代はやはり特権と云えましよう。働くことは勿論重要な社会的な意味があります。又働くこと自体も面白く充分意欲を持つてやることはできますがやはりそれだけが人生の全てではない。私としてはビジネスはビジネスとして割り切つてしまい私生活は私生活として自分なりにエンジョイした気持は強く持つているが営利会社の組織下ではそれも仲々難しい。会社のためなら自己を犠牲にしなければならないことも多い。日曜日はともかくとして平日に休暇をもらつて山に行くことはよほどうまくタイミングが合わないと不可能だ。

〃偉大な大自然の下で腹の底から怒鳴つてみたい。海一杯に新鮮な空気を吸いたい。どんなに気持がいいだろう。〃

毎日こんなことをつぶやきつつ働いている。

自然は大きい。心ゆくまで青くあくまで深遠な秋の空を想いうかべるだけでたまらない。

北　正昭　　小松製作所

現役各位には、秋の夜長をひたすら晩学に励んでおられることと喜んでおります。僕も現在至つて元気で調子

よく面白みがでてきた仕事に精だしております。忙しければ忙しいにつけ、結講暇もできるものでよく遊んでもおります。職場には必ず、数人のそういう仕間がいるものでよく一諸に山へ登つたりしています。先日も福井県の浄法寺という六〇〇m程の山へいつてきました。二日間ともどしやぶりでほとんどテント暮しでしたが近くにかつこうの岩場がありひさしぶりにザイルるにぎつたりし御気げんでした。ちょつと金沢近辺では得られないような、よい岩場です。

今、僕ら仲間の重大関心は小松の奥の大倉山にスキーの小屋をたてることで、現在着々準備を進めておりうまくゆけば今冬雄大な山の斜面を滑れるものと期待しています。……てな調子で僕自身ぜんぜん年もとらず学生気分で過しており、ぞくぞく結婚するOBOG達を驚嘆のまなこでながめています。僕はDas hat noch Zeit

そろそろスキーシーズン。今年は十一月に立山、正月に西尾君達と発哺へ行く予定です。新婚旅行にスキーへ行くのもいいな⁉ 御希望の方はどうぞ僕まで。

若きワンゲル連の為に　カンパイ

十月二十九日（夜）

北記

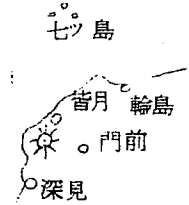
教室より山をながめる。
山に向いて言うことなし。
教師に向いて言うことあり。
つまらないお話は、おやめ。
× × × × ×
オデン屋の△△ちやんへ。
他のお客に微笑むのはやめてくれ。
× × × × ×
あの北の大平原を思う。
今頃見渡すかぎり、白一色になつているだろうな。わびしさに堪えよと僕におしえて、くれたつけ。
× × × × ×
私は、ききょうの花が大好きです。
× × × × ×
私は影のある女の子が好きです。
× × × × ×
皆さん、元気に生きて下さい。

（ある男の手記より）

曾遊

猿山の記

柏野　義夫



路傍に「しやば捨峠」と立札のあるところで、一服した。ここから灯台が見えはじめる。火山岩の礫から成る黒つぽい礫岩層が、日本海の激浪と斗つて、高い断崖をなし、道は崖の上につけられている。十一月はじめの晴れた日、海の色はあくまで碧く、北の海上はるかには七ツ島が浮かんで見えた。

私はさつきから、ひとつのことを思い出そうとしている。二十年以上もまえに、友達と四人づれで、この道を逆に（猿山から吉浦へ向けて）歩いた時のことである。しかし残念なことに、風物の記憶はほとんどない。道が今よりもずつと細かつたことだけは確からしいが。

灯台への登り口のところに、小川を利用した水源地の小屋がある。ここには「悟らじの水」の立札がある。「しやば」を捨てたつもりで灯台守を志した人が、やはり悟りきれずに…という意味か？そんなことを、立札にかきたてて誇示するのは、いい趣味ではなさそうだ。

×　×　×

灯台はどこでも美しいものだ。型にはまつているきらいはあるが、つつましく清潔な文明が凝集している。私は昼食のあと、灯台の前の芝生に寝ころんで、むかし、四人づれでこの灯台に一泊した時のことを思いうかべていた。昭和十五年の夏。二十三年前。旧制高校一年の時。

夏休みに能登一周を思い立つて、七月中頃に出かけた。テントと食糧を背負つて、一週間のキャンプ計画。能登は純朴で、どこの民家でもたのめば泊めてくれる。という気安さで、経験のない者ばかりの四人づれだつた。その二日目、外浦の海岸づたいに鹿磯を過ぎ、深見を経て猿山を目ざした。途中、深見の南の海岸づたいで、どうしても渡れなくなつた。岩づたいになんとか渡ろうとしたがどうしても駄目。水に入るには深すぎるし、泳ぐには荷物があるし　。そうするうちに三時間もすぎて夏の陽も傾きはじめた。ひきかえすより仕様がないと海岸の崖の上を見ると、人が歩いている！道があつたのだ。なんのことはない、海岸づたいの途中から、上にあがる道があるのに気づかず、ガムシャラに岩づたいをやつて、無駄な苦労をしたというわけである。

そんなことで、深見についたのが、とつぷり暮れた7時すぎ、疲労と空腹で、まず飯ということになり、とある民家の軒先で炊事をはじめた。その時のお婆さんの顔を今でもおぼえている。ハンゴーの飯を腹一杯食つて、今夜はここで泊つてゆけ、というのを聞かず、8時頃か

ら猿山めざして登りかけた。月明かりだつたが、うねうねとつづく谷あいの悪路を、テントと食糧の重荷にあえぎながら、休み休みして灯台に着いたのは、かれこれ十時半だつたと思う。灯台の人にたのんだが、部屋があいてないということで、やむなく建物の間にテントを張つた。蚊がひどくて眠れない。　夜中になつて、灯台の人が同情してくれて、部屋にあげてもらつた。快的なタタミの上で、しばらくダベつてからぐつすり。翌日目がさめたら、すでに昼に近かつた。

× × ×

猿山灯台をあとにして、石を見ながら深見へ下る。その昔、夜の行軍でアゴを出した道である。カシワの樹林の間の小道には、落葉がふんわりと積んで、最上の歩き心地。こんな素晴しい散歩道は、しばらく歩いたことがなかつた。樹間に見えがくれする海岸の風景と、樹林の枝ぶりの面白さ。石が見えないのですたすたと歩く。その昔の苦難の道とは思えない。もつともあの時は夜で、つかれたあとの登り道だつたし、若さにまかせてどつさり荷物を背負つてはいたが。

あの時の四人づれは、それぞれちがつた道へ進み、それぞれに苛烈な戦争の苦難を経験した。一人は法科へ進み、学徒動員で海軍に入り、戦後はアメリカ政治史をやつていたが、やがて病にたおれた。一人は工科の鉱山に進み、卒業後郷里にかえつていたが健康を害し、療養所でさびしく他界した。H君は、当時花形の航空工学をやり、戦後はレンズ工学に転向して活躍している。

二十三年たつた今は、四人のうち二人はすでに鬼籍に入り、私だけはずつと山歩きをなりはいとしてきた。昔の道　たのしい青春の散歩道を、血まなこになつて石を見ながら歩いている。　という感慨は一入である。

山を下りきつて、深見の部落についた。少しばかり新しい建物があるほかは、村のたたずまいはあまり変つていないようだ。あのおばあさんの家はどこだつたのか、あちこちと探してみたが、とうとう思い出せなかつた。

昭和三十九年度新役員

・印　企画委員会会員

主将・合津 尚（工3）
副将・池田 進（理3）
主務・沢田孝雄（経2）
企画・今井春昭（教3）・富永浩之（工2）
会計・宮保洋子（文2）
装備・四十万利之（工2）伊予欣二（法1）
書記　福田繁機（理2）玉野暁世（法1）
　　　木下泰恵（薬2）藤井信晴（法1）
O.B係　谷田和子（文2）
連盟　千場良平（経2）
支部長　吉田（法文）田丸（工）黒瀬（教）大磯（理）

編集後記

九月に編集を始めて以来、値上げその他の理由により部員の皆さんに、大変御迷惑をかけましたことを深くおわびいたします。

難産ながらも、このベルクハイムも誕生しそうになつた今、本当にほつとして、クリスマスをむかえようとしております。

初めは安易な考えで編集を引き受け、八方破れの計画をたて、それをユニークな計画と考え違いし、企画だおれもずいぶんあり、編集委員の皆さんも、無理を承知で本当によくやつてくれました。たよりない私のもとで。

原稿に、広告に、経験のない私にかわつて大活躍してくれた、大男だが気はやさしい今井君、表紙、とびらからすべてのカットを書いてくれた、ちよつびりすねたお嬢さんの宮保さん、随筆などを担当してくれた、理知深い山女の木下さん、紀行文を担当してくれた、のんびり型の山男吉村君、のつそりしているが細い所に気のつく山村君、もてすぎるのか忙しすぎる中山さんなど御苦労さんでした。

又石橋さんには編集顧問として、色々お世話になりましたし、紺清君からは巻頭詩のすてきなカットをいただきまして、深くお礼いたします。

このベルクハイムがわずかでも、クラブの発展に役立つものなら、幸いと存じます。

（大　崎）

ベルクハイム第五号
発行日　昭和三十九年一月十八日
発行者　金沢大学ワンダーフォーゲル部
　　主将　合津　尚
編集責任者　大崎　進
部所在地　金沢市大手町一　金沢大学内
印刷所　金沢孔版社
　　金沢市彦三大通り
　　TEL ⑥ 一七五二

完全な装備で楽しい山行

登山とスキー用品

サブザック　キスリングワイド型
シュラフサック、札幌門田ピッケル
アルファ米、ラジウス、キャンプ用品、等品揃

大和

金沢、片町　スポーツ用品売場

最新の機械と最高の技術
皆様のよき助手として
タイプ印刷及謄写版印刷

金沢孔版社

金沢市彦三、大通り（石川交通向）
TEL ⑥1752

早くて美しい

さくらカラープリント

コシヤ

香林坊
金沢ビル一階名店街

テント
ザック の専門メーカー

田村テント製作株式会社

野町広小路
TEL ④3321
④3322

ZYUEN
名曲と珈琲

RECORD
CONCERT

寿苑
TEL 3/3042

綜合食品

TEL 代 ⑥3800～5

マルサン

ギョーザの店

理学部正門前 ③0903
並木町 ②4077

文化燃料の店

山根燃料店

小立野 ②2574

古い歴史、新しい風味

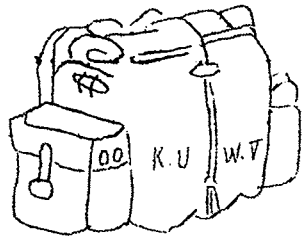
別所の菓子！

銘菓、和洋酒、食料品

小立野 ② 0940

お山の道具

一揃い



西田運動具店

金沢市竪町

TEL ③ 6945

綜合食品

やまもと

金沢市竪町

TEL ③ 6295

喫　茶

尾山神社前

TEL⑥ 5817

菓子.パン

桂月堂

本店.広坂通り ② 0953 ② 0954

洋食.

喫茶の

藤屋

下鶴間町

TEL⑥ 5228

北陸随一をほこる音楽喫茶

毎夜（7. 8, 9, 10時）
専属楽団
（西條秀則と　ニューサンズ
中川　弘と　リズムウェスト）

香林坊
大映地階

ミュージカル サロン
純喫茶 オリオンズ

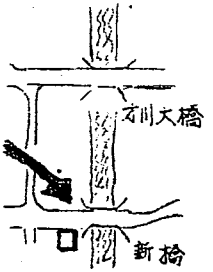
写真とD.P.E

生協指定店

タテマチ 石五
TEL ③ 0181

ウマイ！ 他の店の2倍のデカイ奴！

辻屋鮮魚店寿司部
新橋詰
TEL ②1515番



辻屋鮮魚店寿司部
新橋詰
TEL ②1515番

パン、洋菓子の最高品は

三共広坂店で

広坂通り　（理学部前）

③ 0903　　② 4077

松任店もどうぞ……TEL……654

中古カメラ
大名刺8円、仕上げ絶対保証

広小路カメラ

野町広小路　田村テント横

④ 0600

純喫茶
エデン

EDEN

古寺町　TEL⑥0123

コーヒー スタンド

ホルン

小立野. 電停横

登山用品

スキー用品の専門店

コジマスポーツ

尾山神社前通り

TEL ③ 7735

うどん. そば

びっくりや

広坂通り ③ 1055

ベルクハイム

金大W.V.